

熊本県立装飾古墳館

研 究 紀 要

第 5 集

序文

【論文】

谷間の縄文人…………… 1
木崎 康弘

【報告】

細石核・細石刃の製作記録…………… 35
—鹿角縦叩き法と削ぎ落とし法の呈示—
江本 直

岩原古墳群…………… 49
—集中豪雨被害箇所修復工事に伴う、
平成14年度緊急発掘調査報告—
熊本県立装飾古墳館

【研究ノート】

点描：石清水式土器…………… 65
木崎 康弘

【資料紹介】

熊本市竜田陳内所在の
阿蘇二の宮神社境内で採取した石器について…………… 73
池田 朋生

2005. 3. 31

熊本県立装飾古墳館

研 究 紀 要

第 5 集

序文

【論文】

谷間の縄文人…………… 1
木崎 康弘

【報告】

細石核・細石刃の製作記録…………… 35
— 鹿角縦叩き法と削ぎ落とし法の呈示 —
江本 直

岩原古墳群…………… 49
— 集中豪雨被害箇所修復工事に伴う、
平成14年度緊急発掘調査報告 —
熊本県立装飾古墳館

【研究ノート】

点描：石清水式土器…………… 65
木崎 康弘

【資料紹介】

熊本市竜田陳内所在の
阿蘇二の宮神社境内で採取した石器について…………… 73
池田 朋生

2005. 3. 31

序 文

情報化、社会の高学歴化、少子高齢化など、激しく変化する今日、人々の生活様式や価値観は、多様化しています。また、人々の生活水準は向上し、余暇に費やす時間も増大しています。こうした社会情勢の中、人々は、物質面での豊かさに加え、生涯を通じて自己の満足感や充実感など、精神面での豊かさを求めるようになりました。

こうした中、学校教育では、正義感や道徳を重んじる心、人を思いやる心、人の命や人権を尊重する心、郷土や伝統文化を愛する心など、人間性の醸成が叫ばれるようになってきました。特に、郷土や伝統文化を愛する心は、将来の日本を担う子どもたちにとって必要なもので、そのためにも、郷土の歴史や伝統文化を紹介し、その素晴らしさや誇らしさを訴えかける博物館の役割は、重要となっています。

こうした社会の情勢、教育をとりまく環境を踏まえ、熊本県立装飾古墳館では、生涯学習や学校教育に大きく貢献する教育施設となるよう、「県民にとって身近な古墳館」、「教育に貢献する古墳館」、「居心地のよい古墳館」、「地域振興、観光振興に貢献する古墳館」を目指し、展示事業、体験学習事業、調査研究・資料収集など、さまざまな活動に取り組んでいるところです。

本研究紀要は、こうした諸活動の中で収集することのできた情報を基に、本館の学芸職員が研究したその成果を公開するものです。これらの成果については、さらに分かりやすい内容となるよう研究を進め、本館の展示事業、体験学習事業、各種の講座等を通して、小中高の児童・生徒たちをはじめ、県民の方々に提供していきたいと考えております。郷土熊本の歴史や伝統文化の理解に資するようさまざまな機会を通して、本館の研究成果を活用してまいりますので、今後とも、本館の事業に御理解と御指導をいただけますよう、お願いいたします。

平成17年 3月30日

熊本県立装飾古墳館 館長 小田 信也

谷間の縄文人

木崎 康弘

熊本県立装飾古墳館 主幹（学芸課長）

1 はじめに

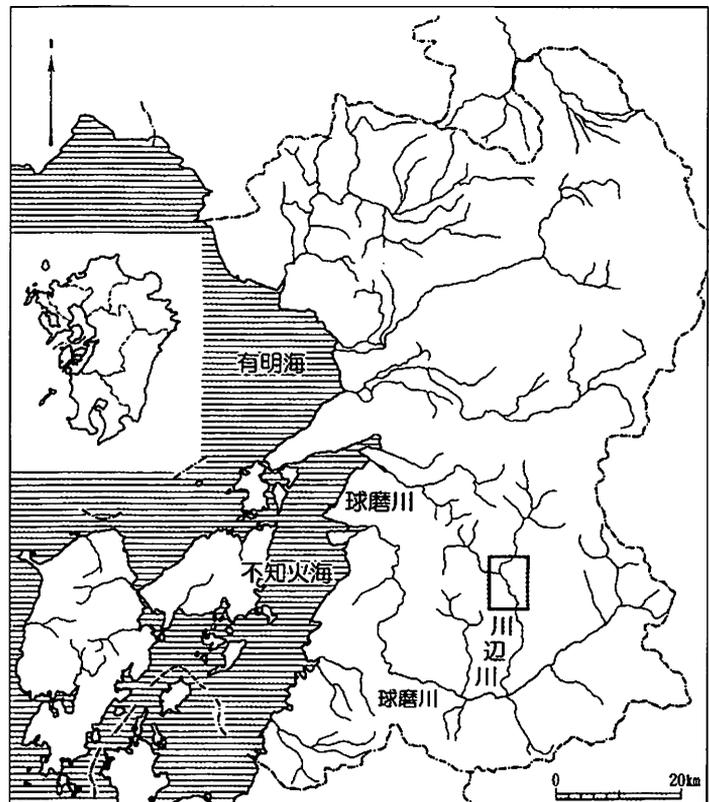
九州の中央部には、祖母山（1756m）を最高峰に、国見岳（1739m）や市房山（1721m）、傾山（1602m）など、1000m級の山々が連なりながら北東から南西にのびる九州山地がある。雨量が多く、温暖な気候で、樹木の生育に適し、様々な生き物が巣くう、豊かな森を育てている。その様は、どこまでも奥深い。また、そこは、西側の斜面を流れ下る球磨川や緑川、東側の斜面を流れ下る一ツ瀬川や耳川、五ヶ瀬川など、大小の河川の流れが始まる場所でもある。

そんな九州山地の中を流れる川は、うねりうねりしながら、蜘蛛の巣のようにのびた、V字形の深い渓谷の中を、大小さまざまな岩のまわりでしぶきを上げたり、岩を噛んだりしながら流れ下っている。その流れは、激しくもあり、清らかでもあり、涼やかでもある。球磨川の支流の中、もっとも流域面積の広い川辺川は、そんな川の1つである。

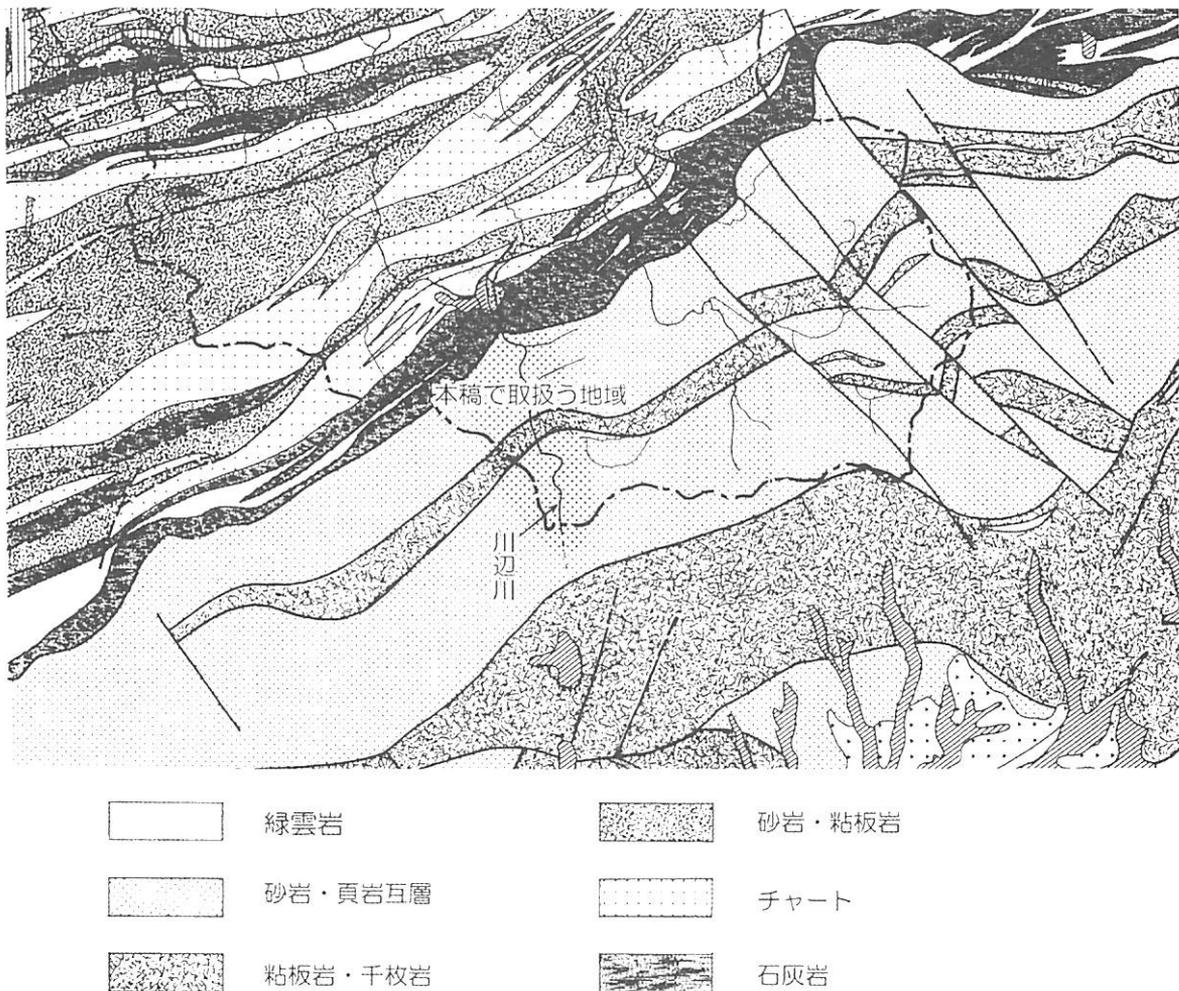
この川辺川は、九州山地中に大きく口を開けた人吉盆地内で球磨川と合流する（第1図）が、上流へと行くにしたがい、わずかばかりの沖積地をさらに狭めながら、壮年期の山容を呈するといわれる九州山地中に切り込んでいく。それがV字谷の五木谷である。

この五木谷一帯には九州地方を北東から南西へと延びる大坂間構造線が走っているが、これによって周辺の地質は、構造線の北側の秩父帯とその南側の四万十帯に区分されるという。秩父帯では砂岩や粘板岩、石灰岩、チャートなどが産し、四万十帯では砂岩や粘板岩が産する（第2図）。そうした五木谷一帯は、先史時代の人類にとって石器石材を供給してくれる、魅力的でありがたい石材産地であった。

ところで、こうした川辺川沿いの五木谷には、先史時代の人類にとって、豊かな森、清らかな水が流れる川、魅力的でありがたい石材産地に裏打ちされてか、約2万年前の先土器時代までさかのぼる人類の足跡があった。そのもっとも古い足跡が、



第1図 熊本県と五木谷



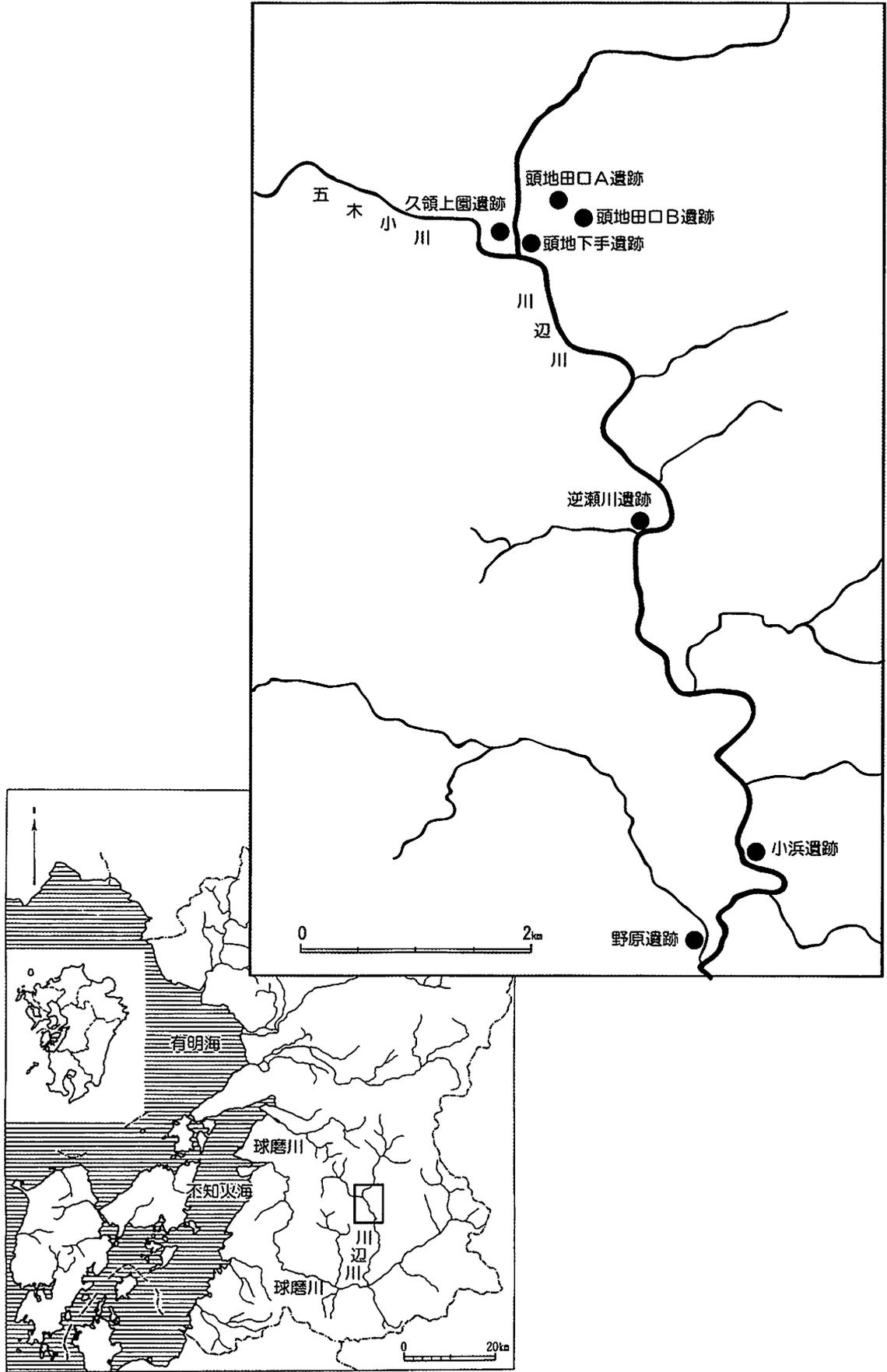
第2図 五木谷の表層地質図

ナイフ形石器が採集されている五木村野々脇遺跡（五木村教育委員会1995）である。

以後、五木谷では、原始、古代、中世、近世、近代、現代、と確実に人類の暮らしが繋がってきたが、その中でも縄文式土器時代（以下、「縄文時代」という。）は、五木谷において特に人類が活発に活動していた時代であった。特に、早期と中期・後期は、確実なムラ跡が発見されるなど、山間での縄文人の暮らしの一面を資料的に明らかにできる時期である。

熊本県立装飾古墳館では、平成16年1月18日（日）から3月21日（日）まで、平成15年度企画展示『肥後の至宝展Ⅱ 球磨楽展～球磨の考古と歴史に遊ぶ～』を開催した。この展覧会の中で、山間での縄文人の暮らしの一面を明らかにできる資料が揃う中期・後期を取り上げ、そこでの人類の暮らしぶりを紹介することができた（熊本県立装飾古墳館2004）。

そこで、筆者は、現状の縄文時代の研究がやや平地部での生活に偏りがちであることに鑑み、この展覧会の企画の中で知り得た考古学的情報とその解釈を、現状の考古学的知見に照らして再考し、説明しよう、と起稿することとした。平地部の研究ほどに情報が多くないとはいえ、比較的近距离で、かつ資料的にも検討に耐えうる内容を持つ遺跡の調査が進んでいる五木谷で



第2図 五木谷の位置と関係遺跡

ある。1つの地域研究の材料としても、また縄文時代の1つの側面を示すものとしても、興味深い地域である。十分な研究材料を提供してくれるものと期待できるだろう。

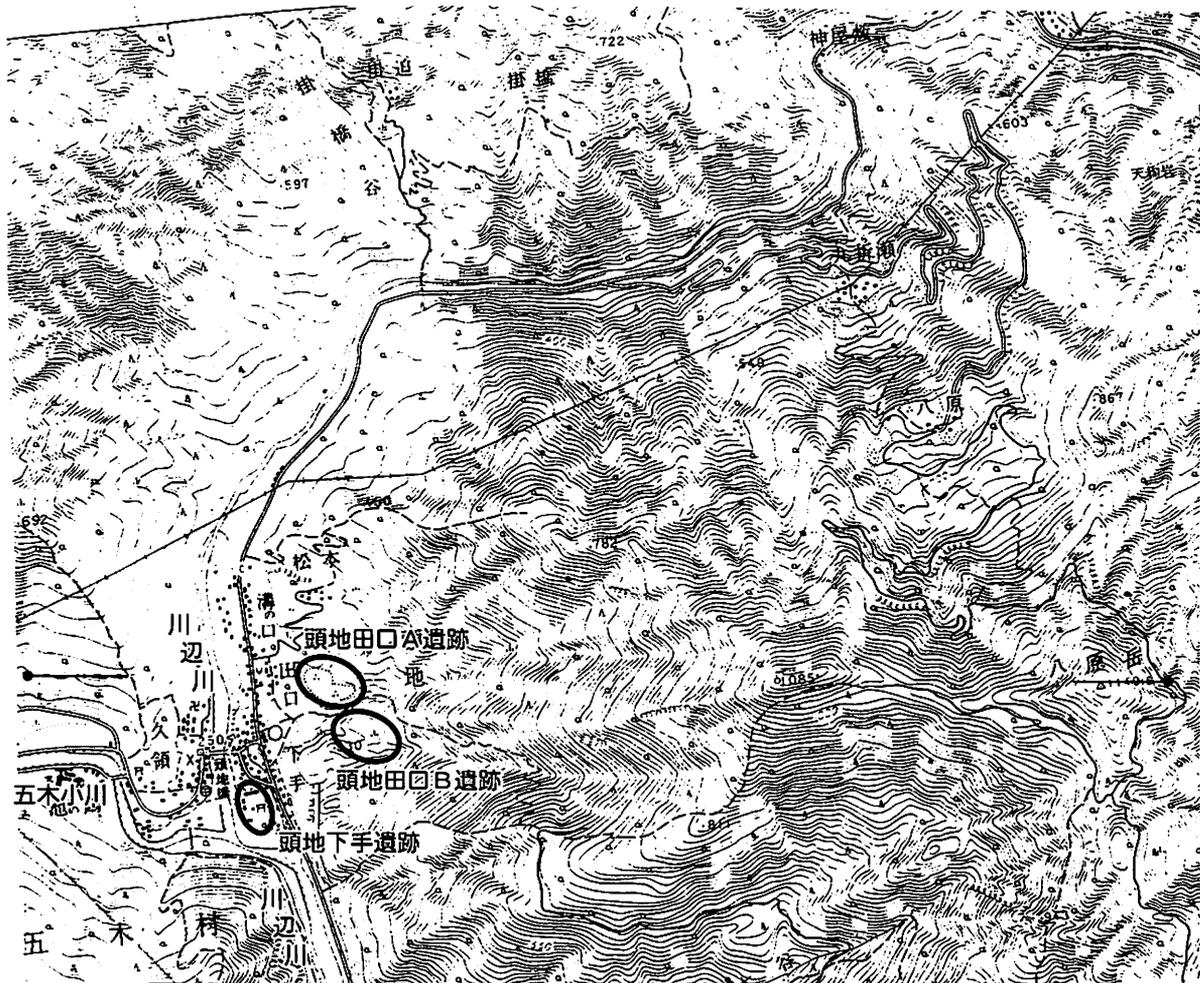
2 五木谷での縄文時代遺跡の調査

五木谷での縄文時代遺跡の調査は、古い。

1940（昭和15）年におこなわれた、小林久雄と高田素次による、五木村の頭地下手遺跡の発掘調査（小林1968）がそれである。この調査では、出水式土器（以下、土器を略して「〇〇式」という。）や市来式、北久根山式、鐘崎式等の縄文時代後期（以下、縄文時代を略して「〇期」という。）の土器と、それに伴う石鎌や磨製石斧、石錘などの石器が数多く見つかった。

1968（昭和43）年、相良村の野原遺跡が見つかった（田辺編1980）。その場所は、V字谷の急な斜面部であった。こういった立地環境の場所で早期や前期、後期の土器、石鎌や石斧、磨石、石皿などが発見されたのである。当然のことながら、その意外性が注目されることとなったのである。

建設省（現、国土交通省）が「川辺川ダム建設計画」を1966（昭和41）年に発表すると、五



第4図 頭地一帯の地形図

木谷を中心とする、自然分野や人文分野での学術調査を行う五木村総合学術調査団が組織された。その学術調査の一環で行われたのが、熊本大学考古学研究室による1977（昭和52）年の頭地下手遺跡の発掘調査であった（熊本大学考古学研究室1978）。

この川辺川ダム建設に係る発掘調査は、1990年代以降、活発化した。縄文時代関係の発掘調査では、五木村野々脇遺跡（1993年～1994年）、頭地田口A遺跡（1993年～1997年）、頭地田口B遺跡（1994年～1995年）、頭地C遺跡（1993年）、頭地松本B遺跡（1995年～1997年）、小浜遺跡（1996年）、逆瀬川遺跡（1999年～2000年）、大平遺跡（2001年～2002年）、頭地下手遺跡（2004年～）、久領上園遺跡（2004年）、相良村野原遺跡（1999年～2000年）などをあげることができる。この中で、今回検討を行なう中期、後期関係としては、中期と後期の土器が僅かに見つかっている頭地田口A遺跡（熊本県教育委員会2002）、中期の阿高式が見つかっている頭地田口B遺跡（五木村教育委員会1997）、中期から後期かけての土器と石器類が多量に、さらに竪穴式住居跡が見つかっている逆瀬川遺跡（五木村教育委員会2003）、中期の阿高式などが見つかっている小浜遺跡（五木村教育委員会1998）、中期から後期かけての土器と石器類が多量に見つかっている頭地下手遺跡、中期から後期かけての土器と石器類が見つかっている久領上園遺跡、中期から後期かけての土器と石器類が多量に、さらに竪穴式住居跡が見つかっている野原遺跡（相良村教育委員会2003）がある。

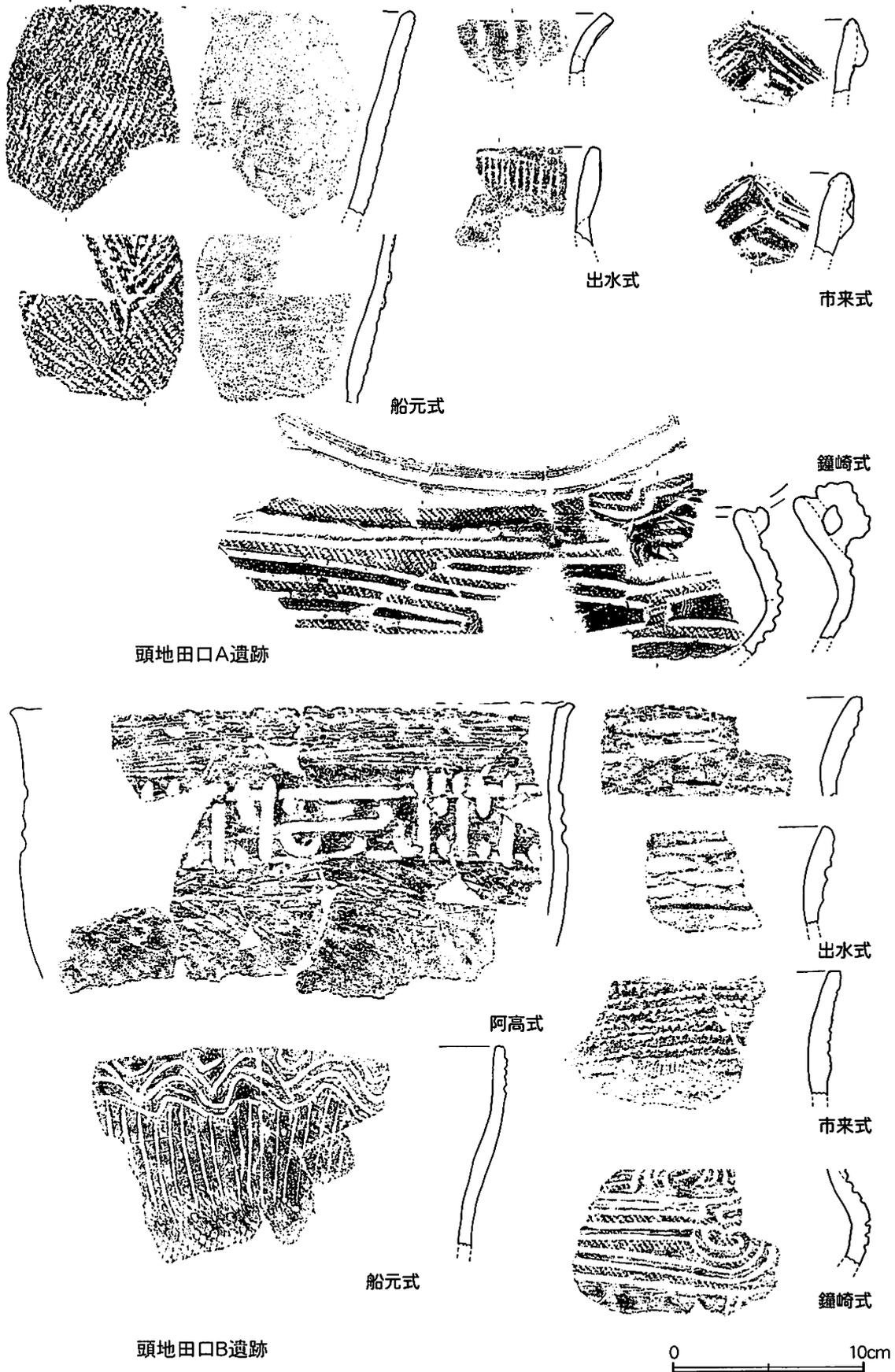
3 対象とする遺跡の概要

五木谷の中期から後期にかけての遺跡については、すでに紹介したとおり、頭地田口A遺跡、頭地田口B遺跡などの7遺跡がある。ここでは、その内容がある程度明らかな、頭地田口A遺跡、頭地田口B遺跡、逆瀬川遺跡、小浜遺跡、頭地下手遺跡、野原遺跡（第3図）を取り上げて検討する。そこで、まずはその遺跡の概要について見ていくことにしたい。

(1) 頭地田口A遺跡

五木谷には、川辺川とその支流の五木小川が合流する、川辺川沿いの中でも比較的開けた土地がある。そこは、頭地という五木谷の中心地である。この土地には、合流地点周辺の平坦地と、川辺川左岸山腹中に広がる緩やかな傾斜地がある（第4図）。五木村田口にある頭地田口A遺跡は、標高320～310m、そんな傾斜地の、2つの川の合流点を見下ろせる、川辺川からの比高差約80～70mのところであった。

中期から後期にかけての調査では、僅かながら土器や石器が検出された。中期の土器は、船元式であった。後期の土器は、出水式、市来式、鐘崎式であった（第5図）。いずれの時期の土器も、少量であった。石器については、所属が明らかなものは無い。



第5図 頭地田口A遺跡、頭地田口B遺跡の土器

(2) 頭地田口B遺跡

頭地田口B遺跡は、川辺川に五木小川が合流する、川辺川沿いの中でも比較的開けた土地にある、頭地田口A遺跡に隣接する遺跡である（第4図）。

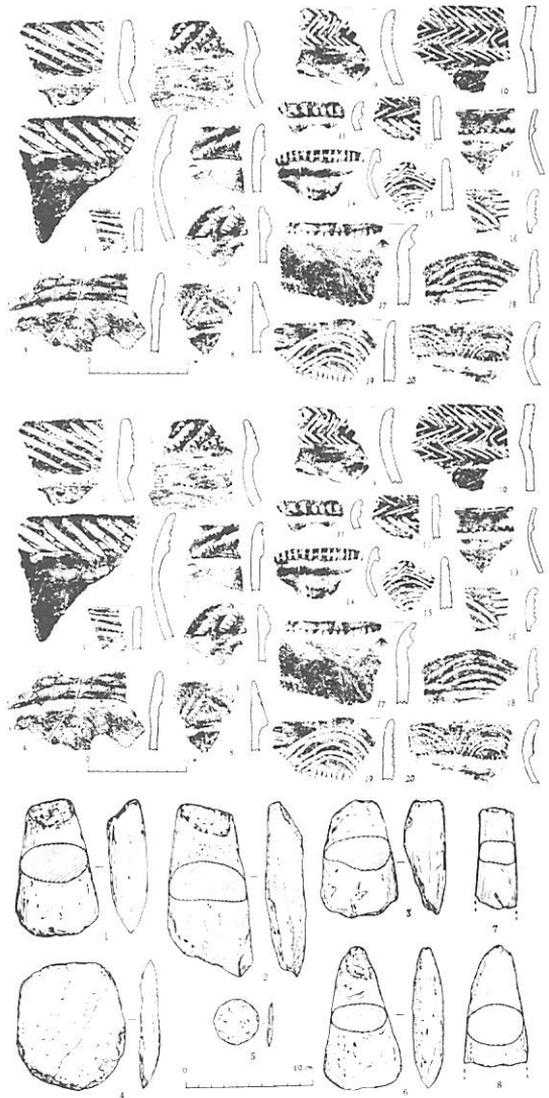
中期から後期にかけての調査では、僅かながら土器や石器が検出された。中期の土器は、阿高式と船元式であった。数点の出土量であった。後期の土器は、出水式、市来式、磨消縄文であった。出土量は、破片45点で、そのほとんどが市来式であった(第5図)。石器は、49点が出土した。その内訳は、磨製石斧13点、礫器1点、礫石錘18点、磨石・敲石14点、石皿・台石3点であった。出土分布では、集中箇所が見られ、5m×10mの範囲に集まる傾向が認められたという。

(3) 頭地下手遺跡

頭地下手遺跡は、川辺川に五木小川が合流する、川辺川沿いの中でも比較的開けた土地にある遺跡である。先に紹介した頭地田口A遺跡や頭地田口B遺跡の近隣の遺跡にあたるが、山地中腹の斜面地にあるこれらの遺跡とは異なり、川辺川と五木小川の合流点を間近に見ることのできる遺跡である（第4図）。標高240m前後で、川辺川からの比高差6～7mである。

小林久雄と高田素次によっておこなわれた、1940（昭和15）年の小規模な調査ということで、データは古く、調査面積も狭い。そのため、他の調査データと比較することは無理もあるが、貴重なデータでもあり、可能な限り紹介したい。

1940（昭和15）年の調査では、後期の土器とそれに伴う石器が出土した。後期の土器では、出水式や市来式、北久根山式、鐘崎式等がある（第6図）。すべての出土点数、土器型式毎の出土点数については、残念ながら明らかにされていない。石器では、報告に依ると、石鎌1点、磨製石斧8点、打製石斧2点、礫石錘11点、切目石錘1点などが出土していたようである（第6図）。また、磨石・敲石や石皿・台石が出土していないが、こ



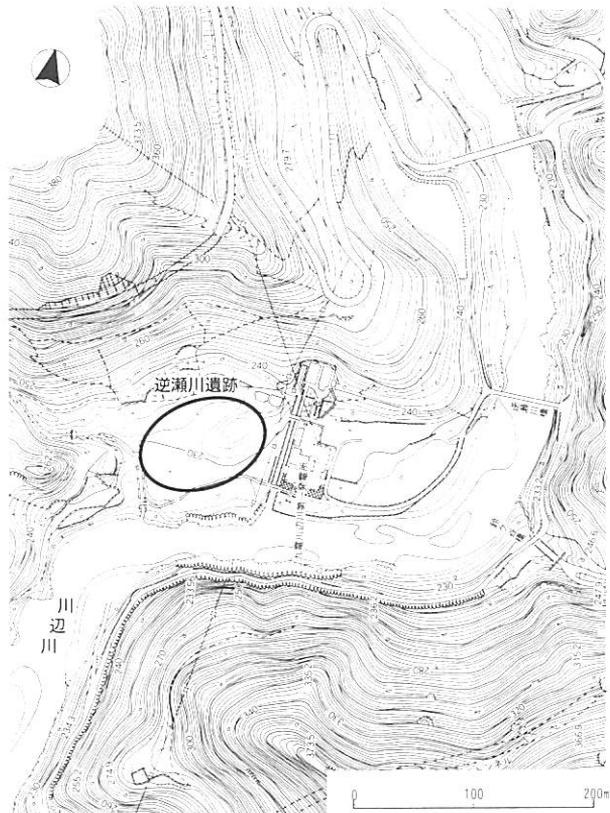
第6図 頭地下手遺跡の土器、石器

れが本来のものなのか、この調査の段階ではこうした石器が認識されていなかったのか、判断が分かれるところであろう。

調査面積については、長さ6m、幅1mの2本のトレンチが遺跡の中に入られていることから、12mということになる。極めて狭い面積からの出土量ということからすれば、かなり大規模な遺跡を想定せざるを得ない。

(4) 逆瀬川遺跡

逆瀬川遺跡は、五木村逆瀬川の、川辺川の右岸、V字谷の谷底の河岸段丘上にある(第7図)。標高230m、川辺川からの比高差約10mである。砂層や砂礫層が入り込んでいる地層の特徴から、当地が川の水に流されやすい土地であったことを窺わせる。



第7図 逆瀬川遺跡周辺地形図

調査では、竪穴式住居跡5基が検出された。いずれも直径4mの円形の住居跡で、中央に炉を置いた住居跡も認められた(第8図)。この他、直径2.8mの竪穴住居状の遺構も1基検出された。遺跡の中央部やや北側の微高地で検出されている。

遺物としては、中期から後期にかけての土器、石器が出土した。その総点数は、10000点であった。

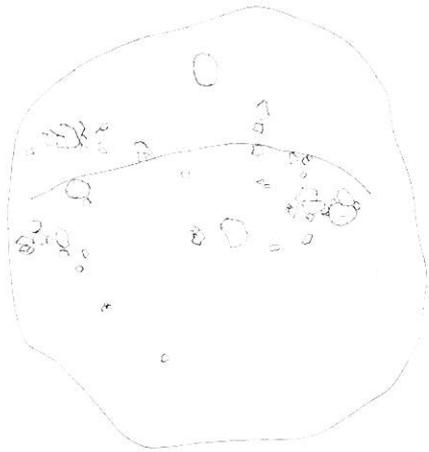
土器では、後期の出水式を中心に、中期の阿高式、船元式、後期の南福寺式や市来式、磨消縄文が出土した(第9図)。

石器は、1000点を越えている。その内訳は、石鏃269点、削器22点、石匙21点、石錐27点、楔形石器9点、磨製石斧134点、鑿状磨製石斧6点、打製石斧4点、礫器1点、礫石錘473点、切目石錘3点、磨石・敲石91点、石皿・台石65点、十字形石器1点、石製垂飾品1点などであった。

(5) 小浜遺跡

小浜遺跡は、五木村小浜の、川辺川の左岸、V字谷の谷底近くの河岸段丘上にある(第10図)。標高215m、川辺川からの比高差約16mである。

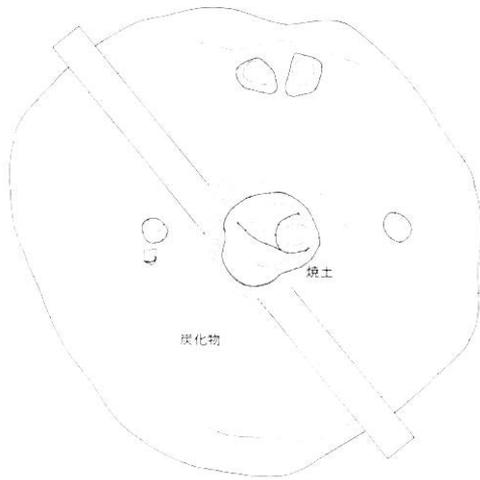
遺物としては、中期から後期にかけての土器、石器が出土した。その総点数は、5924点であった。



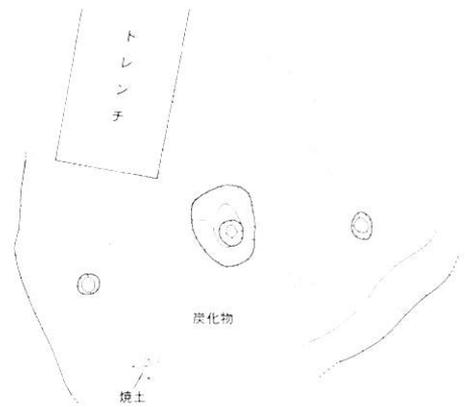
1号住居跡



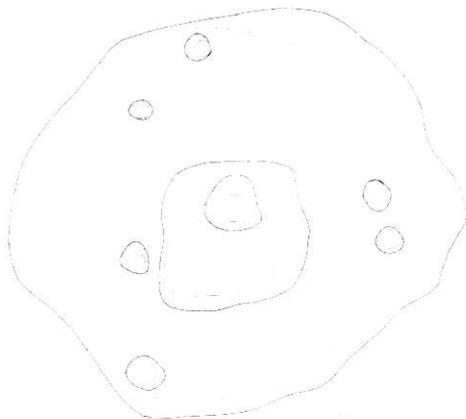
2号住居跡



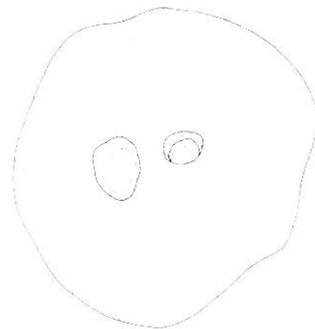
3号住居跡



4号住居跡



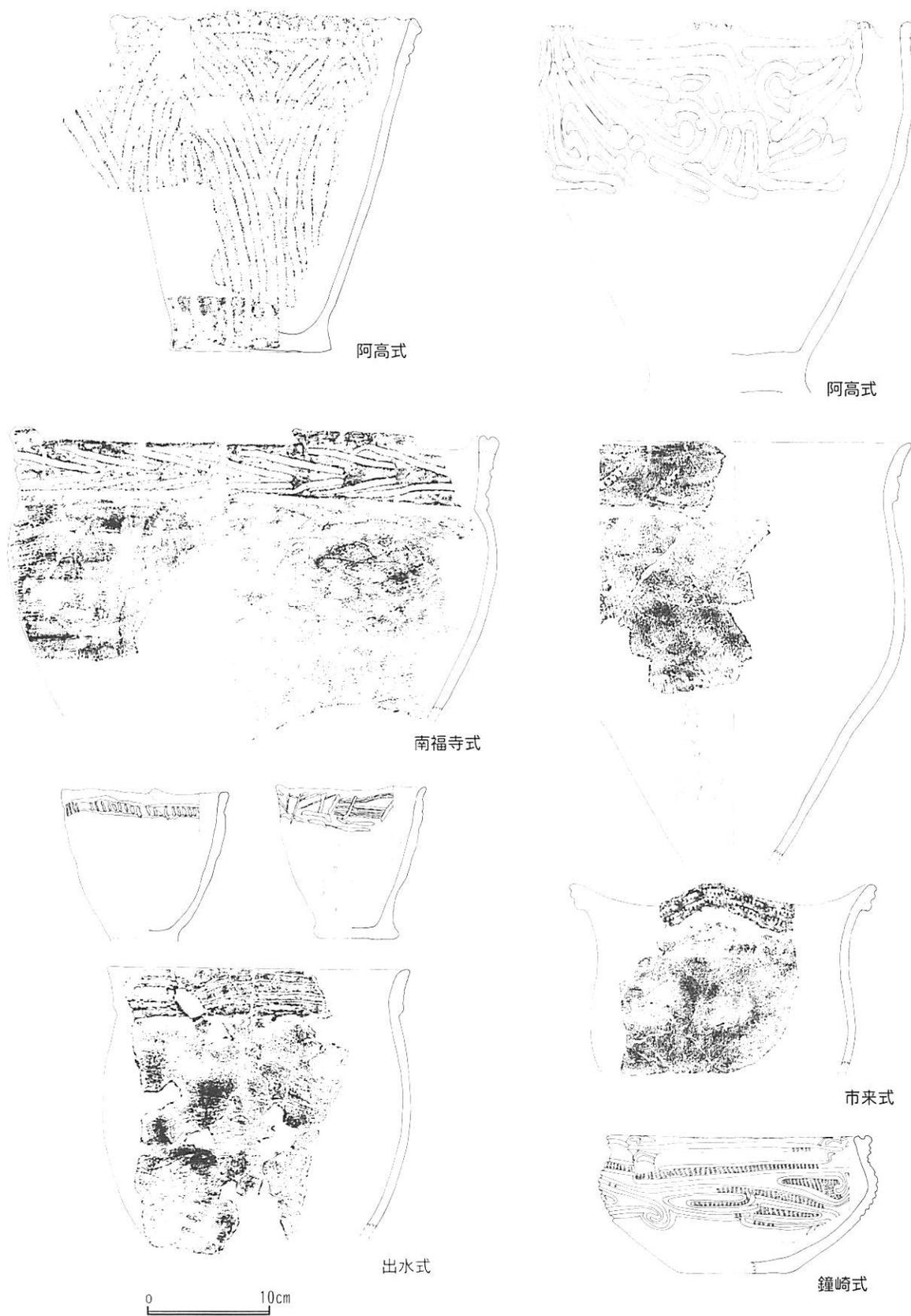
5号住居跡



住居跡状遺構



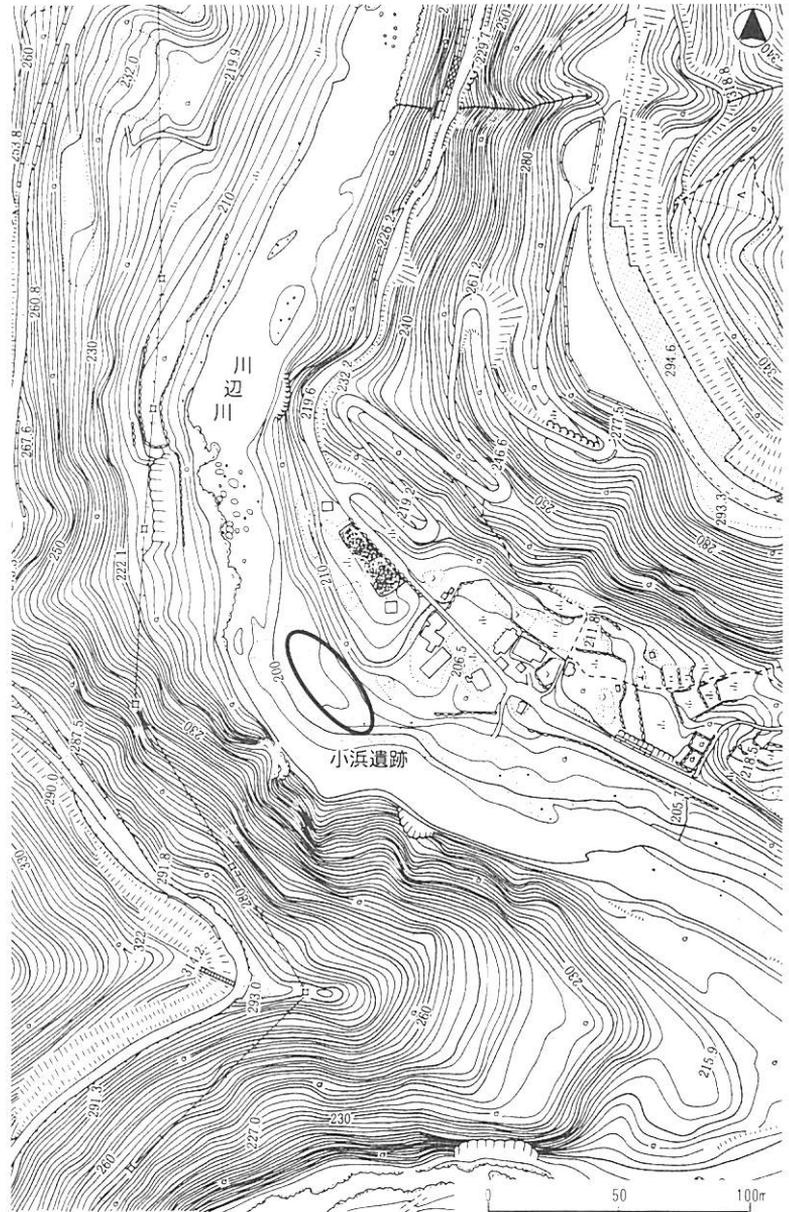
第8図 逆瀬川遺跡の竪穴式住居跡



第9図 逆瀬川遺跡の土器型式

中期の土器では、並木式、船元式、阿高式があった(第11図)。この中、並木式と船元式は文様で確認できたもので数点にすぎず、その多くは阿高式であった。しかも、完形に復元できた土器2個を含め、大型の土器片も出土するなど、安定した出土状況であった。ここでは、土器の型式を検討するものではないので詳述は避けるが、胴部上半部に凹線が付される土器がほとんどであった。後期の土器は、南福寺式が多く出土した(第11図)。また、数的には少ないが、御手洗A式、市来式、出水式などが出土している。

石器は、144点出土した。その内訳は、石鎌21点、削器14点、石匙2点、石錐2点、磨製石斧21点、石錘7点、磨石・敲石14点、石皿・台石3点などであった。



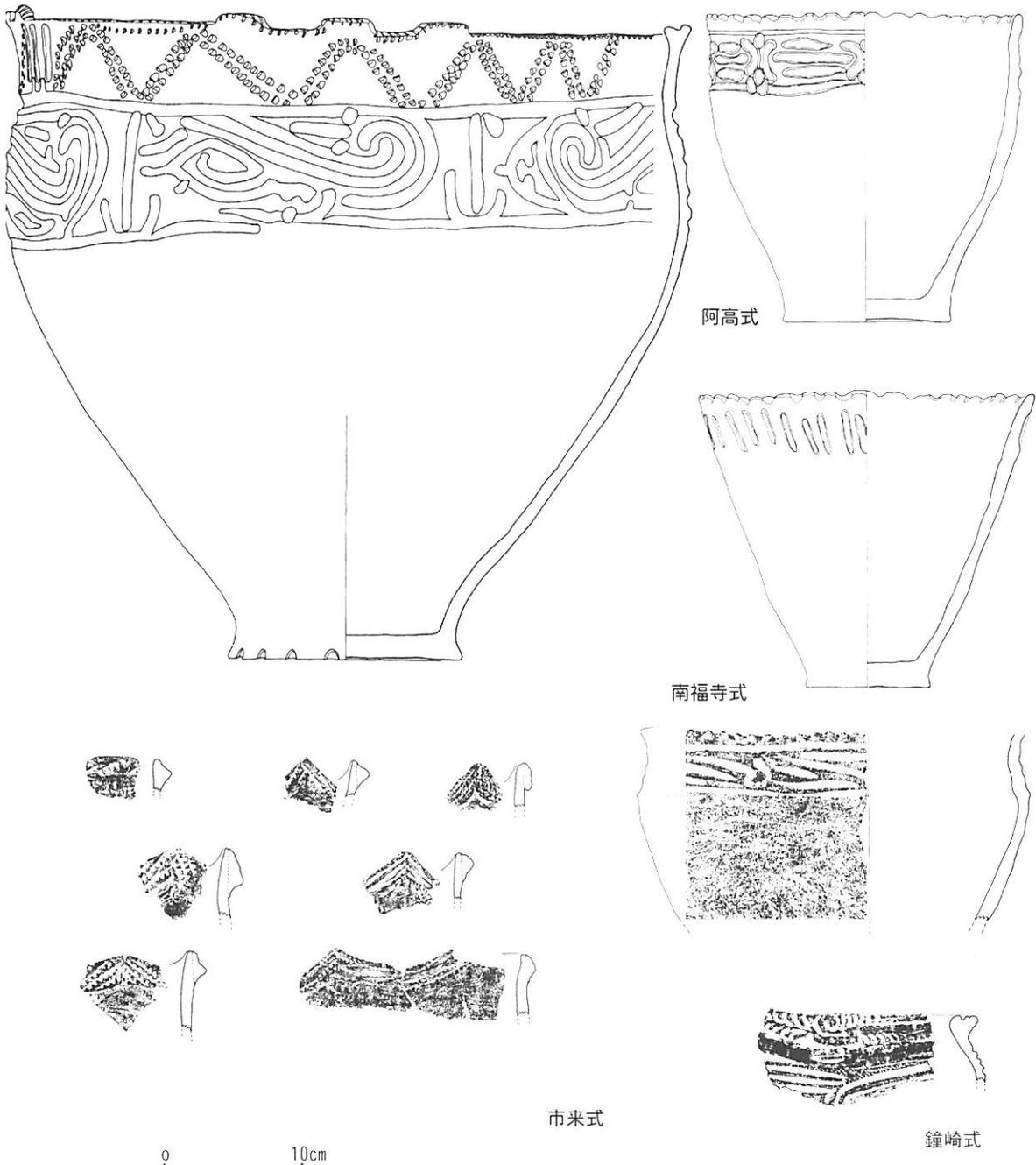
第10図 小浜遺跡周辺地形図

(6) 野原遺跡

野原遺跡は、相良村野原の、川辺川の右岸、V字谷を形成する山腹の一角にあり、その急な斜面の中でも少し傾斜を緩くした土地にあった(第12図)。標高は210~230mで、川辺川と遺跡中心域との比高差は約35~40mである。

調査では、竪穴式住居跡2基、土坑56基、土器捨て場2ヶ所が検出された(第13図)。

竪穴式住居跡は、1基が1辺3m前後の正方形を、もう1基が径4.1~3.5mの円形を呈していた。いずれも中央に炉を置いていた。25mの間隔をおいて遺構分布域の北端付近と南端付近で検出された(第13図)。



第11図 小浜遺跡の土器型式

土坑は、大小に違いがあるものの、基本的に円形を呈していた。竪穴式住居跡との切り合い関係は無いが、隣接しながら遺構分布域の全域に広がっていた。56基の土坑には、墓や貯蔵穴などを含んでいることが想定できるが、明確な機能を窺わせる証拠が少ない。

そうした中で126個の炭化種子が出土した6号土坑(第13図)は、注目され、重要である。出土した炭化種子が「渋抜きをすれば優良な食用となる」アカガシ(古環境研究所2003)で、これをもって6号土坑を貯蔵穴とすることも可能だからである。ただし、その出土位置が覆土の

中位にあり、原位置を留めているものではなく、これをもって貯蔵穴とすることはできないが、土層の堆積を検討すれば、興味深いことをわかる。それは、土層区分ができないものだったが、遺物が自然堆積を示すような出土状況を示しているからである。要するに、この6号土坑を墓壙とすることができず、貯蔵穴の可能性が高いと認識することができるだろう。

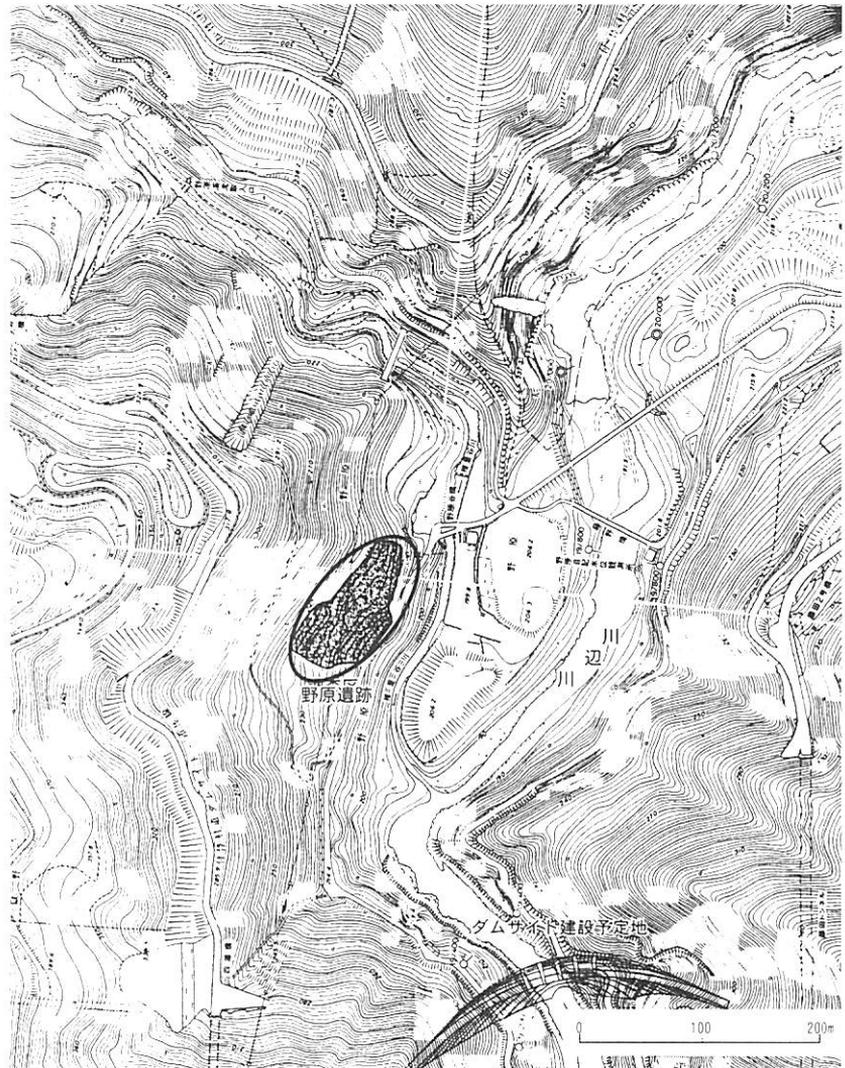
このように、土層区分ができないものを墓壙に、自然堆積を示す土層のものを貯蔵穴に振り分けることができる。また、土層区分ができないものでも、出土遺物が自然堆積を示すようなものを貯蔵穴に想定することができる。

報告では、「土器だまり」と「遺物集積部」とされていたものを、ここでは、土器捨て場として一括して取り扱いたい。1ヶ所は、遺構分布域の南端部近く、円形の竪穴式住居跡（2号）に隣接した、斜面部側に1ヶ所認められた。径3.8m～3.3mの範囲であった。もう1ヶ所は、遺構分布域から離れて、そこより5～10m下の急斜面にあった。前者は直接的な投棄場として認識でき、後者は投棄場から転落したものと認識できる。したがって、これら2ヶ所の位置関係から、1連のものである可能性も十分にある。

遺物としては、中期から後期にかけての土器、石器が出土した。その総点数は、20000点を越えていた。

中期の土器には、阿高式があった(第14図)。後期の土器には、南福寺式、出水式、市来式、北久根山式、磨消縄文などがあった(第14図)。これらの土器型式にはそれぞれに分布の傾向があるはずであるが、報告の中で図が示されていないので、その傾向を窺い知ることができないのが残念である。

石器類は、1031点が出土した。その中の石器の内訳は、石鏃40点、削器3点、

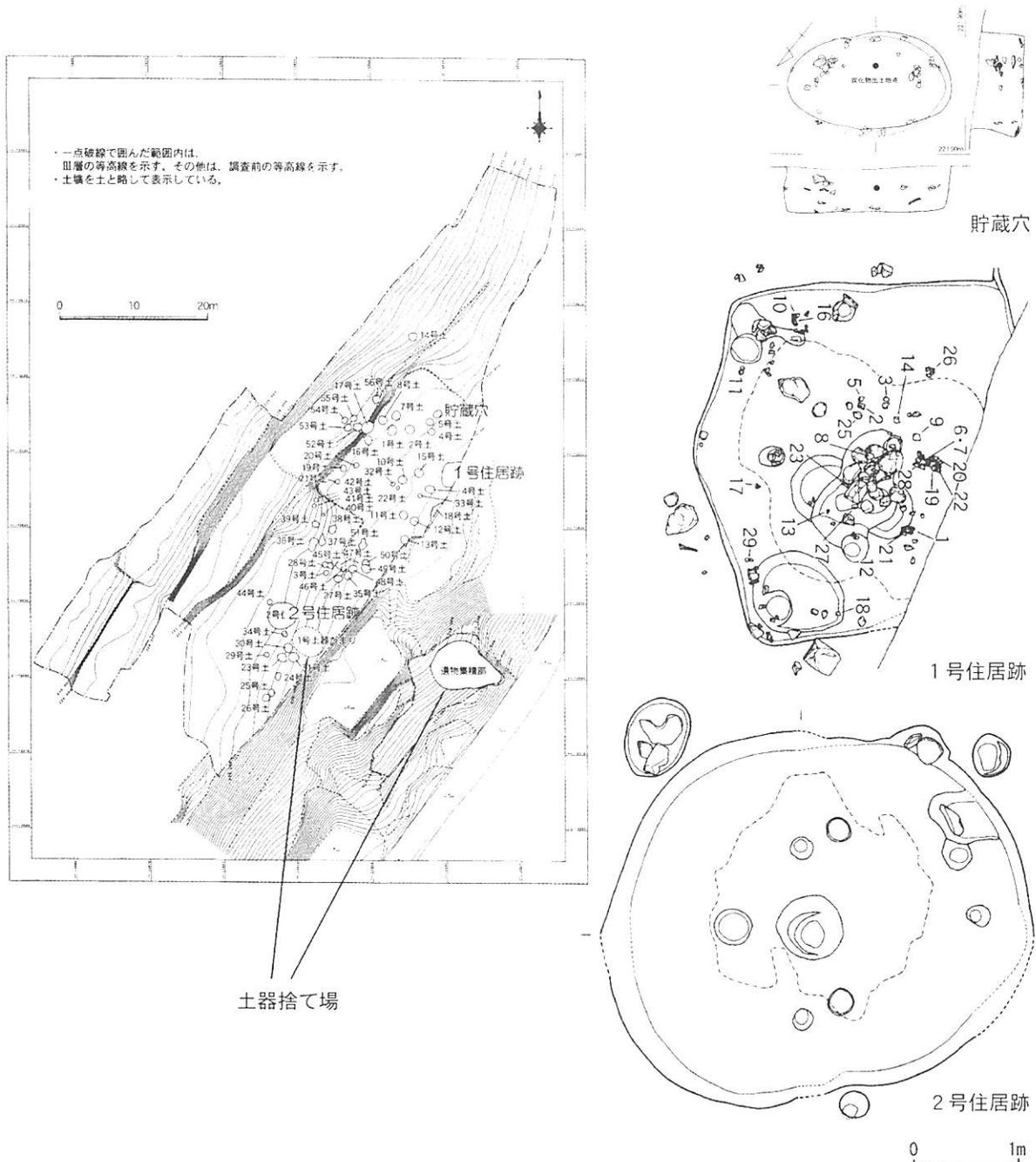


第12図 野原遺跡周辺地形図

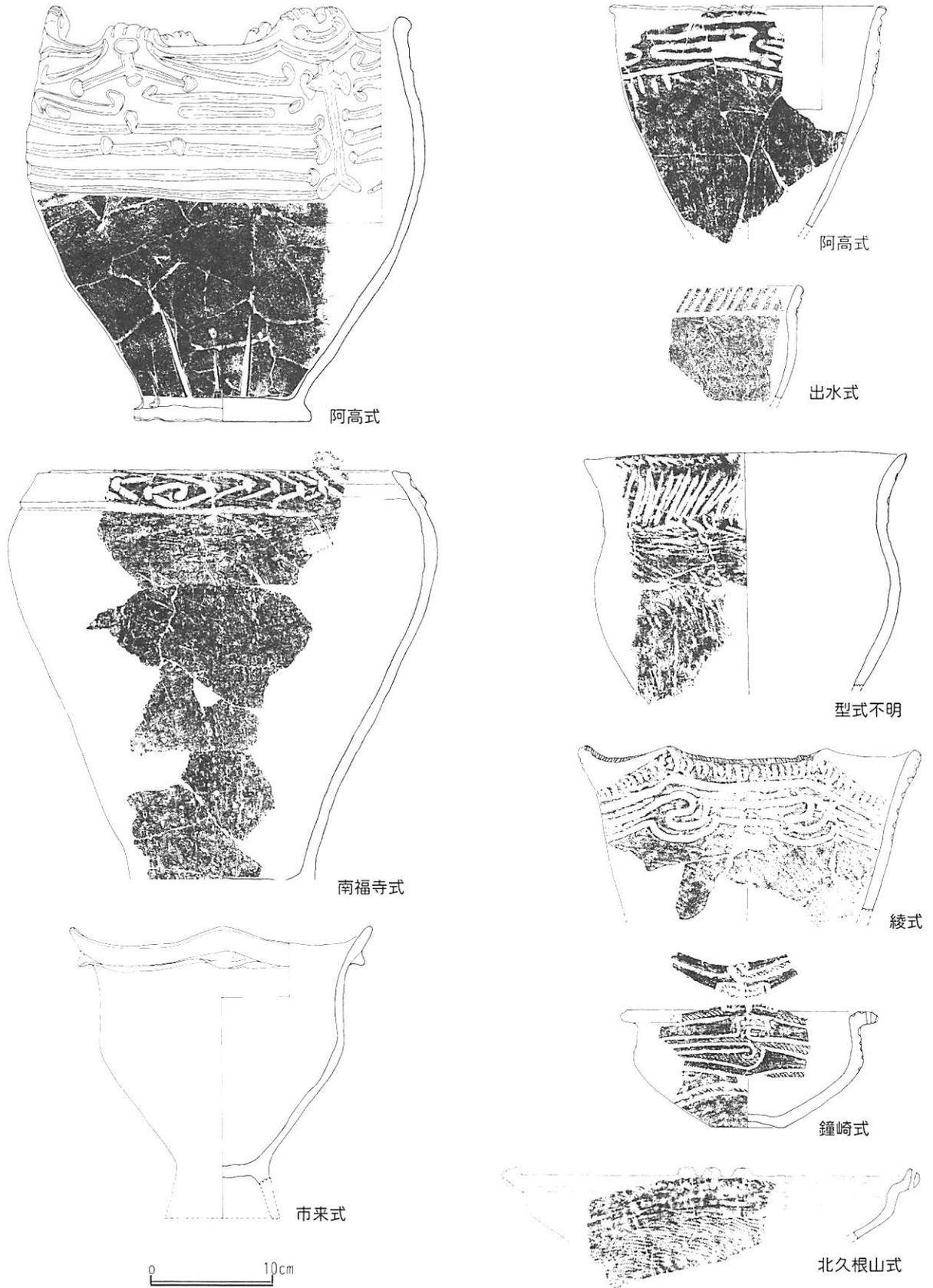
石匙3点、石錐3点、磨製石斧(環状石斧1点を含む)42点、鑿状磨製石斧1点、礫石錘121点、磨石・敲石792点、石皿・台石16点、円盤状石器8点、石剣状石製品1点などであった。

4 五木谷における中期～後期の石器相

これまで五木谷の中期から後期にかけての遺跡を概観してきたが、それによると、おおむね中期後半から後期前半にかけての、比較的限られた時期の遺跡であることがわかる。これらの



第13図 野原遺跡の遺構



第14図 野原遺跡の土器型式

遺跡が極めて近接した時期にあるのであって、遺跡比較という点で重要であることは明白である。本稿もこの点を重視しているのであるが、そこで、次には、それぞれの遺跡の石器組成の内容を検討することとしたい。ただし、その前提として、遺跡の規模と立地をみることを先に行った方が賢明であろうから、遺跡の規模と立地、それから見た遺跡の類型化、石器相の検討という手順で進めていくことにしよう。

(1) 遺跡の規模と立地

五木谷には、川辺川とその支流の五木小川が合流する、川辺川沿いの中でも比較的開けた土地がある。そこには、立地環境的に、合流地点周辺の平坦地と、川辺川左岸山腹中に広がる緩やかな傾斜地があり、それぞれに当該期の遺跡がある。合流地点周辺の平坦地の頭地下手遺跡、川辺川左岸山腹中に広がる緩やかな傾斜地頭地田口A遺跡と頭地田口B遺跡、という3つの遺跡である。

それらの規模と立地を見てみれば、大きく2種類の遺跡に峻別できる。

1つ目の遺跡は、山腹中の緩やかな傾斜地に立地する。頭地田口A遺跡と頭地田口B遺跡が該当する。川辺川からの比高差が80m程の高所にある遺跡である。土地の傾斜は、10%の勾配であった。ここで検出された遺跡の規模は、僅かな土器や石器が検出された頭地田口A遺跡や、阿高式と船元式が合わせて数点、出水式、市来式、磨消縄文が合わせて45点、磨製石斧(13点)、礫器(1点)、礫石錘(18点)、磨石・敲石(14点)、石皿・台石(3点)が合わせて49点出土した頭地田口B遺跡、というように小規模である。また、頭地田口A遺跡では遺物が散在する状態での出土で、明確な集落を形成しているようにはみえず、頭地田口B遺跡では集中箇所が見られるとはいっても、5m×10mの範囲という限られたもので、これもまた明確な集落を形成しているようにはみえない。しかも、他種類の石器が検出された頭地田口B遺跡であるが、磨製石斧、礫器、礫石錘、磨石・敲石、石皿・台石のみが存在するだけで、五木谷での中期や後期の遺跡で普通に検出される、石鏃や削器、石匙、石錐などの剥片石器や、それらを製作するための石核、剥片、碎片が検出されていないのである。これは、特筆すべきことで、山腹中の緩やかな傾斜地で行われた縄文人たちの行動パターンを窺わせてくれるものであろう。

2つ目の遺跡は、合流地点周辺の平坦地に立地する。頭地下手遺跡が該当する。川辺川からの比高差が6～7mと、川辺川と五木小川の合流点が間近にある遺跡である。そういう意味では、谷底に立地する遺跡ということになるだろう。調査そのものが古いことから、詳細な検討ができないのが残念であるが、12㎡という狭い面積での調査であるにもかかわらず、出水式や市来式、北久根山式、鐘崎式等の後期の土器が多数出土しているし、石器でも石鏃(1点)、磨製石斧(8点)、打製石斧(2点)、礫石錘(11点)、切目石錘(1点)などが出土している。この出土量や出土状態からすれば、かなり大規模な遺跡である可能性が高い。この中で、礫石錘

や切目石錘の出土量については、川に近い遺跡であるということからも見逃せないものである。

なお、2004年度の調査でその詳細が確認された久領上園遺跡もこの遺跡に該当する。ただし、詳細は未報告のため、ここでは検討の対象から外すことにした。

川辺川とその支流の五木小川が合流する土地を過ぎて下流に行けば、すぐに急峻なV字谷が現れる。そのV字谷は、細長く蛇行しながら、およそ16km続いていく。この急峻で細長く続く土地に、中期～後期の遺跡が点在している。その遺跡をあげれば、逆瀬川遺跡、小浜遺跡、野原遺跡がある。それらの規模と立地をみてみれば、大きく2つの遺跡に峻別できる。

1つ目の遺跡は、急峻なV字谷の山腹中の傾斜地に立地する。野原遺跡が該当する。川辺川からの比高差が40m程の高所にある遺跡である。その土地の傾斜は、10%の勾配であった。ここで検出された遺跡の規模は、竪穴式住居跡2基、土坑56基、土器捨て場2ヶ所の他、中期～後期にかけての土器、石器20000点が出土するほどの安定したものであった。幅が15mで、長さが50mという狭い面積の緩斜面地であったが、その内容は特筆に値しよう。特に、礫石錘が121点、磨石・敲石が792点、石皿・台石が16点あること、中でも磨石・敲石が792点もあることは、山腹中の緩やかな傾斜地で行われた縄文人たちの行動パターンの1面を窺わせてくれるものとして注意しておきたい。

2つ目の遺跡は、川辺川沿いのV字谷の谷底近くの河岸段丘上に立地する。逆瀬川遺跡や小浜遺跡が該当する。いずれも、川辺川からの比高差が16m～10mと、川辺川が間近にある遺跡である。この種の遺跡では、5基の竪穴式住居跡が検出され、また10000点に上る多数の出土物があった逆瀬川遺跡や、5924点の土器、石器が出土した小浜遺跡というように、安定した集落の存在を窺わせてくれる。それは、完形に復元できた土器2個を含め、大型の破片の阿高式が出土するという状況であり、また後期の南福寺式も多いという状況であった。石器では、石鏃(21点)、石錘(7点)、磨石・敲石(14点)とそれほど特徴的な偏りを見出すことができない。これに対して、逆瀬川遺跡では、石鏃(269点)、礫石錘(473点)、有溝石錘(3点)に偏る特徴が見られる。

(2) 規模と立地から見た遺跡の類型

これまで、五木谷の中期から後期にかけての遺跡について、便宜上、地形的に、合流地点周辺の遺跡と川辺川沿いのV字谷の遺跡に分け、さらにそれぞれの遺跡を山腹中の遺跡と谷底近くの遺跡に分けて、それぞれの遺跡の規模なり、石器組成の内容なりを紹介してきた。ここでは、こうした結果を踏まえ、五木谷の中期から後期にかけての遺跡の類型化を行なうこととする。

五木谷の遺跡は、大きく4つの遺跡に整理できる。それは、川辺川と五木小川との合流地点周辺の山腹中に立地する遺跡(以下、「合流地山腹遺跡」という。)、川辺川と五木小川との合流

地点周辺の谷底近くに立地する遺跡（以下、「合流地谷底遺跡」という。）、川辺川沿いのV字谷の山腹中に立地する遺跡（以下、「V字谷山腹遺跡」という。）、川辺川沿いのV字谷の谷底近くに立地する遺跡（以下、「V字谷谷底遺跡」という。）である。

合流地山腹遺跡は、頭地田口A遺跡と頭地田口B遺跡である。遺跡の規模は、僅かな土器や石器が検出されたに過ぎない頭地田口A遺跡や、5m×10mというごく限られた範囲に100点弱の土器、石器が出土した頭地田口B遺跡のように小型である。

合流地谷底遺跡は、頭地下手遺跡と久領上園遺跡である。頭地下手遺跡では、12m²という狭い面積の調査地区から大量の土器や石器が出土している。当地は、五木谷の中でももっとも広い河岸段丘に当たり、しかもその段丘の先端部、川辺川と五木小川の合流点を間近に見下ろすことのできる場所である。五木谷での中心的な集落を擁するに足る立地環境である。

V字谷山腹遺跡は、野原遺跡である。急峻なV字谷の山腹中の、10%勾配の少し緩やかになった、幅15m、長さ50mという狭い土地であるが、竪穴式住居跡2基、土坑56基、土器捨て場2ヶ所が検出されているように、安定した集落を形成している。

V字谷谷底遺跡は、逆瀬川遺跡と小浜遺跡である。V字谷沿いの狭い河岸段丘上であるが、5基の竪穴式住居跡と多数の出土物があった逆瀬川遺跡や、完形に復元できた阿高式2個を含む5924点の土器、石器が出土した小浜遺跡のように、安定した集落を形成している。

以上、4つの遺跡は、立地環境的にも、内容的にも、それぞれに特徴のある遺跡である。そうはいっても、こうした遺跡には共通項も存在する。そこで、共通項でそれらの遺跡を再整理してみると、次の2つの類型にまとめ上げることができる。

1つ目の類型は、合流地谷底遺跡、V字谷山腹遺跡、V字谷谷底遺跡である。立地環境に大きな開きがあるが、安定した集落を形成しているところでは共通している。ここでは、I類と呼んでおこう。この類型は、その立地環境を基に、さらに2つに細分が可能である。それをI a類とI b類と呼んでおく。I a類は合流地谷底遺跡で、I b類はV字谷山腹遺跡とV字谷谷底遺跡である。

I a類（合流地谷底遺跡）は、五木谷の中でももっとも広い河岸段丘の先端部にあり、川辺川と五木小川の合流点を間近に見下ろすことのできる、恵まれた立地環境にある遺跡である。12m²という狭い面積の調査で、大量の土器や石器が出土している頭地下手遺跡が該当するが、残念ながら古い調査のために、詳細が明らかでない。現在、熊本県教育委員会が調査を行なっているところである^{註1)}ので、今後、その内容が明らかになっていくものと期待される。

なお、久領上園遺跡も頭地下手遺跡の対岸にある遺跡である。頭地下手遺跡よりは狭い河岸段丘上にある遺跡で、その内容は興味深いものがある。これについては、五木村教育委員会が調査を行なっている^{註2)}ので、今後の報告に期待したい。

I b類（V字谷山腹遺跡、V字谷谷底遺跡）は、急峻なV字谷にある遺跡である。この類型

には、山腹中の狭い緩斜面とV字谷沿いの狭い河岸段丘、という異なる地形環境の遺跡が含まれている。ただし、狭い土地という点では共通しており、その内容も共通するものが多いことから、これらを地形環境だけで峻別する必要もない。竪穴式住居跡や土坑、多量の土器、豊富な石器類など、通常の集落であることはわかる。

2つ目の類型は、合流地山腹遺跡である。I a類の遺跡を見下ろすことのできる、10%勾配の、山腹中の緩斜面という地形環境にある。ここでは、II類と呼んでおこう。この遺跡については、集落というよりも別の役割が想定される。それは、僅かな土器や石器が検出されたに過ぎなかったり(頭地田口A遺跡)、土器、石器が100点程度で、明確な遺構を伴わず、また磨製石斧、礫器、礫石錘、磨石・敲石、石皿・台石のみが存在するだけで、その他の剥片石器、石核、剥片、碎片が目立たなかったり(頭地田口B遺跡)、という遺跡内容から判断されるのである。そういう意味で、この類型は、谷間の縄文人を考える上で極めて重要な類型の遺跡である、といえるだろう。

(3) 遺跡類型と石器相から見た遺跡類型の性格

五木谷での当該期の遺跡を整理すれば、3つの類型に峻別できる。そこで、谷間の縄文人の活動を考えるため、彼らの活動を示すと考えられる石器相の特徴を遺跡類型ごとにもう一度整理して、遺跡類型の性格をみてみよう。

① I a類

頭地下手遺跡がこの類型の遺跡であるが、出土した石器は、石鏃1点、磨製石斧8点、打製石斧2点、礫石錘11点、切目石錘1点などであった。磨製石斧や石錘の出土量が多いことは興味深いものである。

なお、これを見る限り、磨石・敲石や石皿・台石が出土していない。これについては、前記しているように、本来のものなのか、小林久雄の調査当時、その種の石器が認識されていなかったのか、判断が分かれるところであろう。これについては、現在進められている調査の成果に期待されるであろう。

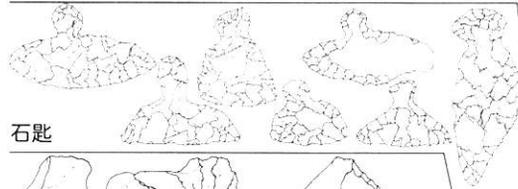
この遺跡類型の性格を知るための判断材料が限られている。このため、具体的な想定については控えることが肝要であろう。ただし、立地環境や遺物出土量から判断できることは、この類型の遺跡が五木谷における中心的な遺跡であることである。

② I b類

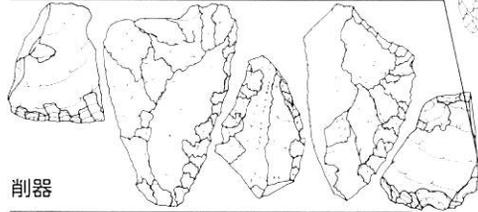
小浜遺跡、逆瀬川遺跡、野原遺跡がこの類型の遺跡である。

小浜遺跡で出土した石器は、84点を数える。表にその内訳を示しているが、石鏃(25%)、磨製石斧(25%)、磨石・敲石(17%)の出土点数が多い。これに対して、石錘は、8%と少ない。逆瀬川遺跡で出土した石器は、1126点を越えている。表にその内訳を示しているが、石錘

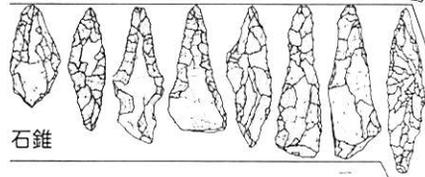
楔形石器 9・打製石斧 4・他 3



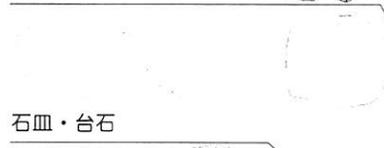
石匙



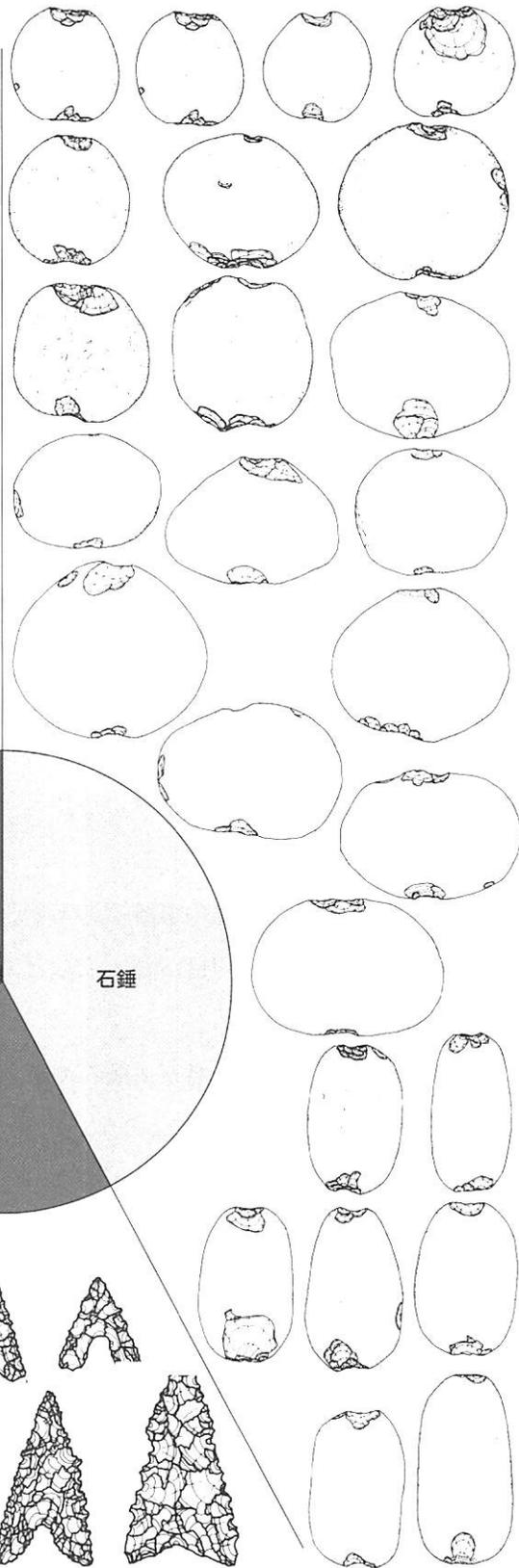
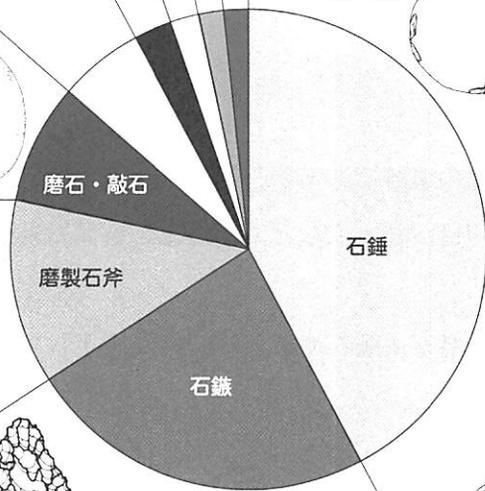
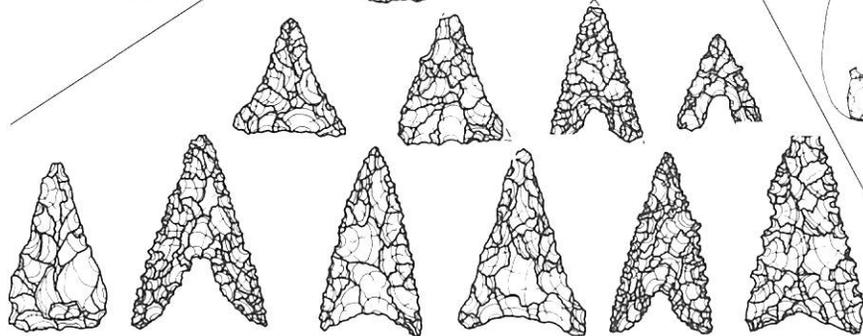
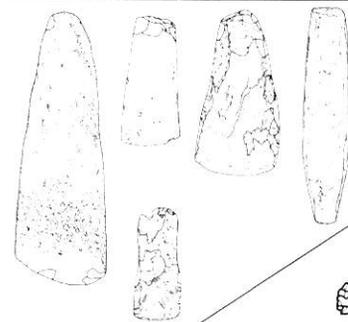
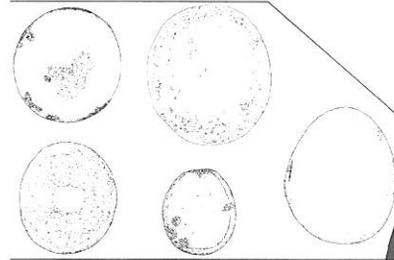
削器



石錐



石皿・台石

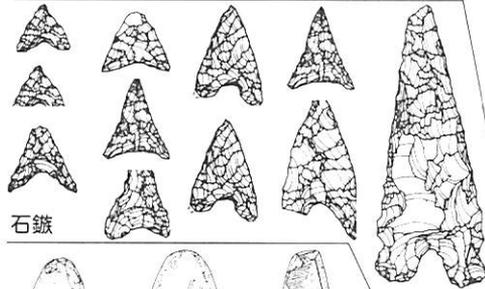


第15図 逆瀬川遺跡の石器組成

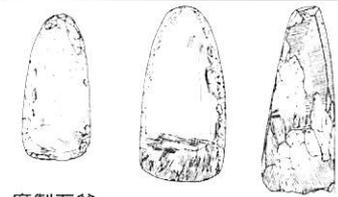
円盤状石器8・削器3・石匙3・他4



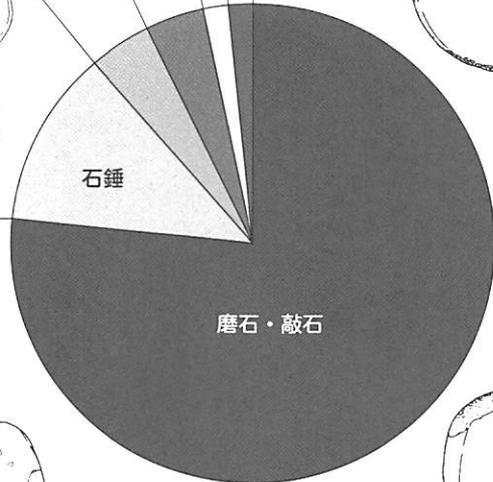
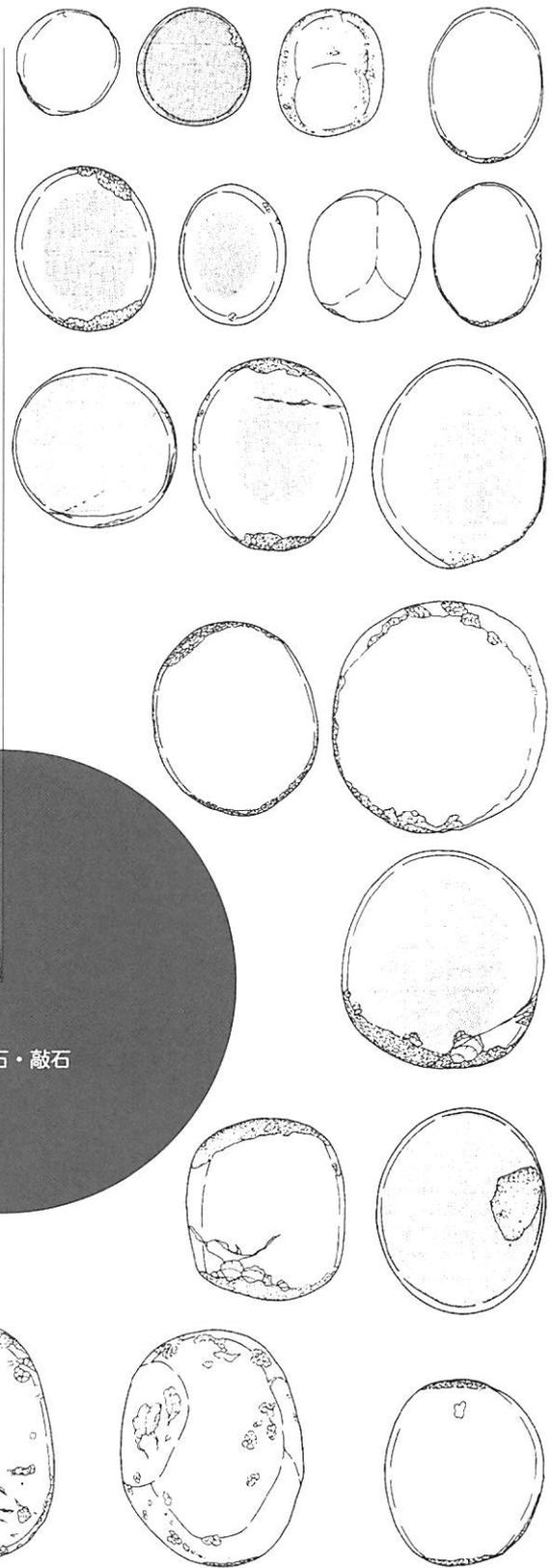
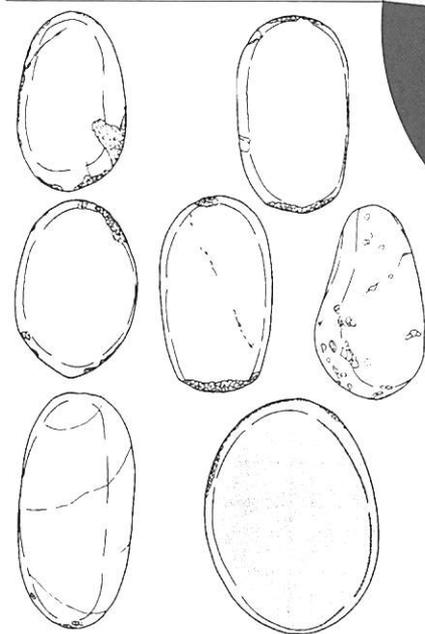
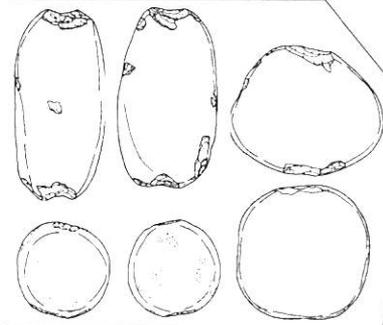
石皿・台石



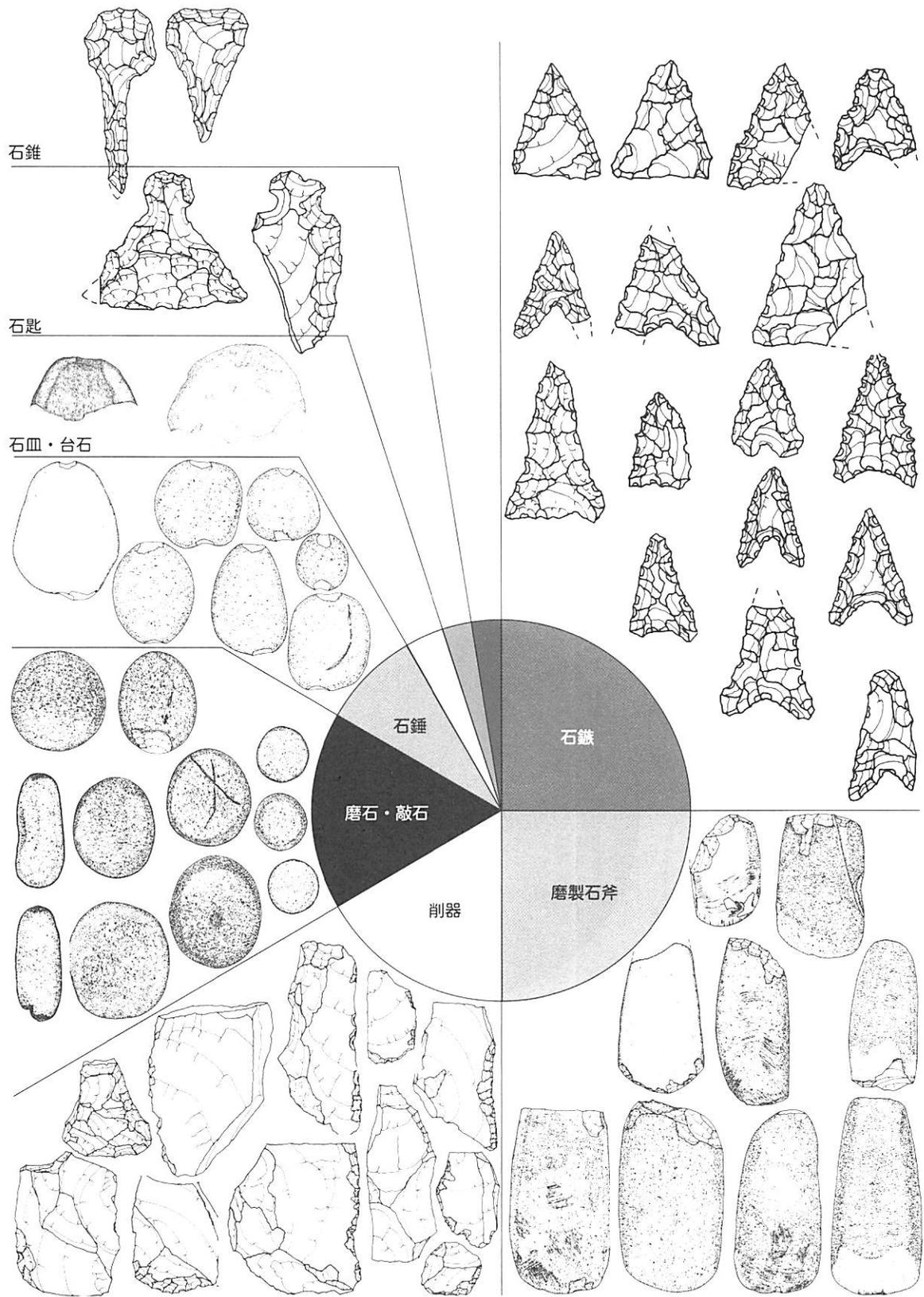
石鏃



磨製石斧



第16図 野原遺跡の石器組成



第17図 小浜遺跡の石器組成

表 関係遺跡石器組成表

遺跡名	計	石鏃	削器	石匙	石錐	楔形石器	磨製石斧	打製石斧	礫器	石錘	磨石・敲石	石皿・台石	十字型石器	円盤形石器
頭地田口B	49						13		1	18	14	3		
	%						27		2	37	29	6		
坂瀬川	1126	269	22	21	27	9	140	4	1	476	91	65	1	
	%	24	2	2	2	1	12	—	—	42	8	6	—	
小浜	84	21	14	2	2		21			7	14	3		
	%	25	17	2	2		25			8	17	4		
野原	1021	40	3	3	3		43			121	792	16		1
	%	4	—	—	—		4			12	78	2		—

(42%)の多さが際立っている。また、石鏃(24%)や磨製石斧(12%)の出土点数も多い。これに対して、磨石・敲石は、8%と極端に少ない。野原遺跡で出土した石器は、1021点である。表にその内訳を示しているが、磨石・敲石が78%と際立っている。石錘は、12%と少ない。

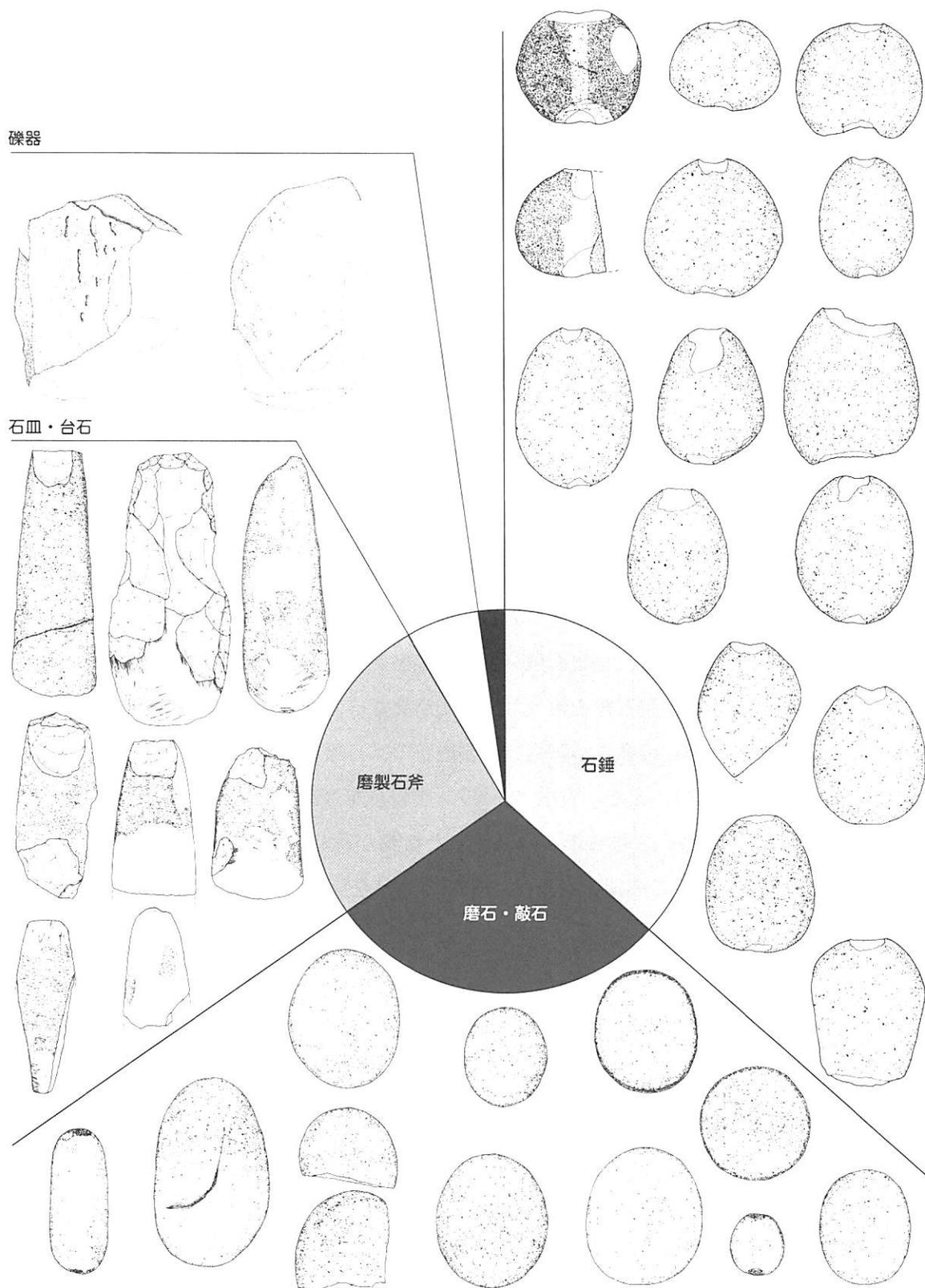
この遺跡類型は、立地環境や遺物出土量から、通常の集落であると考えられる。数基前後の竪穴式住居跡が検出されていることから、おそらくは基本的で単位的な集団が生活した遺跡であることは間違いない。しかも、その生活を暗示する石器組成の特徴が対照的に認められることは、この遺跡類型での活動に多様性があったことを示している、といえるだろう。例えば、石錘(42%)の多さが際立ち、また石鏃(24%)や磨製石斧(12%)の出土点数が多い逆瀬川遺跡では、石錘や石鏃、磨製石斧を使った活動が活発だった可能性が高い(第15図)。これに対して、磨石・敲石(78%)の多さが際立つ野原遺跡では、磨石・敲石を使った活動が活発だった可能性が高い(第16図)。また、石鏃(25%)、磨製石斧(25%)、磨石・敲石(17%)の出土点数が多い小浜遺跡では、これらの石器を使った活動が行われていた可能性が高いのである(第17図)。このように、この遺跡類型には多様な活動を反映した遺跡が含まれているわけであって、それぞれの遺跡にはどのような関連性があるのか、が注目されることであろう。

③ II類

頭地田口A遺跡、頭地田口B遺跡がこの類型の遺跡である。

頭地田口A遺跡では、明確な石器が出土していない。

頭地田口B遺跡では、49点の石器が出土した。表にその内訳を示しているが、すべて、製品のみで占められていた(第18図)。このことは、石器製作がその土地で行なわれておらず、製品のみが持ち込まれていたことを示すものである。また、剥片石器や、その製作に伴う石核、剥片、碎片の存在が認められない。このことは、剥片剥離から剥片石器の製作までが行なわれていなかったことを示すものである。さらに、磨製石斧(27%)、石錘(37%)、磨石・敲石(29%)がほぼ同率で存在していることも重要である。個別的な作業が同じ程度で行われていたことを想定せざるを得ない。



第18図 頭地田口B遺跡の石器組成

この遺跡類型は、Ⅰ類の集落とは明らかに違う遺跡である。その内容を考える限り、一般的な集落とは考えられず、派生的な活動地である可能性が高いのである。

5 五木谷における中期～後期の遺跡連鎖

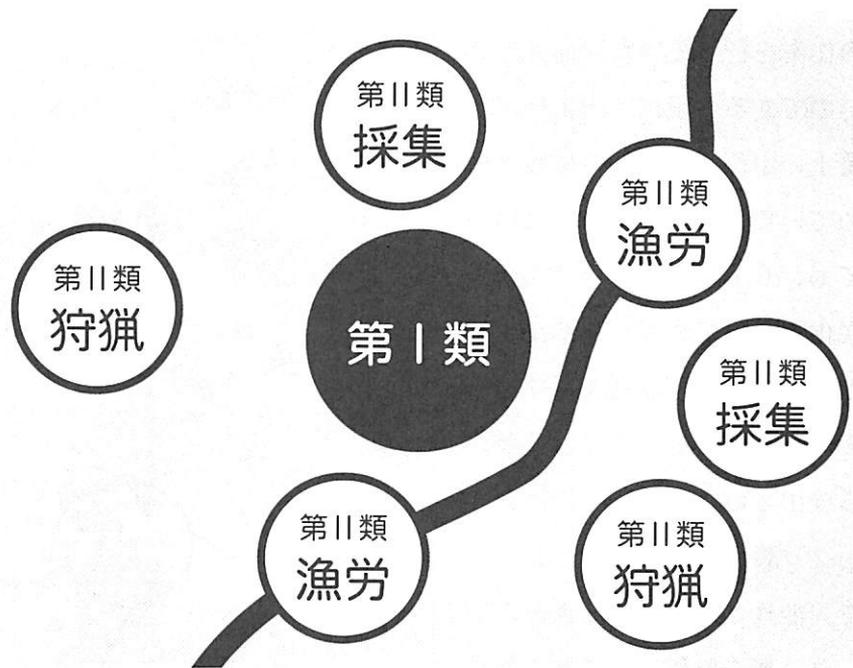
五木谷における中期から後期においては、Ⅰa類、Ⅰb類、Ⅱ類という遺跡類型が存在していた。Ⅰa類は、五木谷における中心的な遺跡であった。Ⅰb類は、一般的な集落であると共に、多様な活動を反映した集落が含まれていた。これに対して、Ⅱ類は、集落外の派生的な活動地であった。

それでは、これらの遺跡類型は、個々独立して存在したのであろうか。

遺跡類型を通観すれば、集落としてのⅠ類、集落外の活動地としてのⅡ類に大きく峻別できるが、これらの関係を、集落（Ⅰ類）とそこから出張った活動地（Ⅱ類）という関係で捉え直すことができるだろう。Ⅱ類が独立した集落として認められないことから、そのように判断するのであるが、縄文人の活動地を集落外に派生させていた仕組みは十分に想定できる場所である。したがって、それぞれの関係を図式化すれば、Ⅰ類（集落）を基点において、その周辺にⅡ類が配されていた、

という関係（第19図）を想定することができる。

次に、多様な活動を反映した集落が含まれていたⅠ類についても、Ⅰa類とⅠb類が存在していたし、Ⅰb類にも石器相の特徴において異なる性格を想定できる遺跡が存在していた。ただし、これらの類型なり、遺跡なりが



第19図 第Ⅰ類、第Ⅱ類の位置概念図

個々独立して存在していた、ということは想定しにくいところがある。例えば、Ⅰb類には、石器相において、

- ・石錘（42%）の多さが際立ち、また石鏃（24%）や磨製石斧（12%）の出土点数が多く、石錘や石鏃、磨製石斧を使った活動が活発だった可能性が高い逆瀬川遺跡
- ・磨石・敲石（78%）の多さが際立ち、磨石・敲石を使った活動が活発だった可能性が高い野

原遺跡

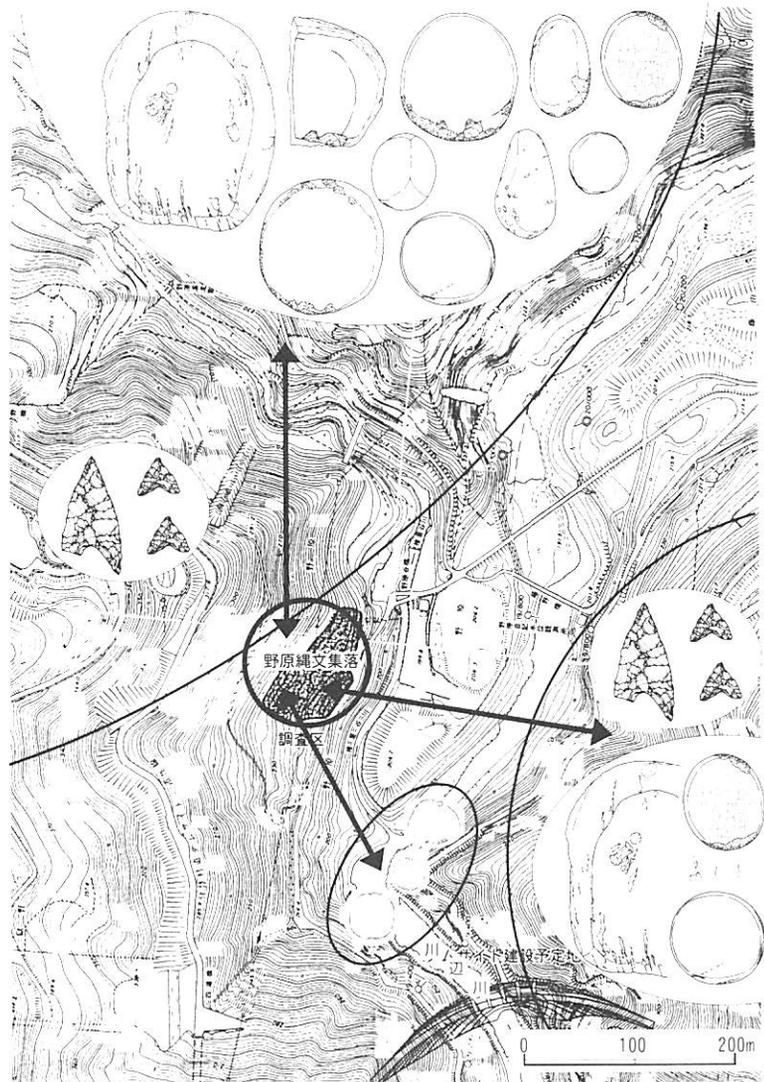
・石鏃 (25%)、磨製石斧 (25%)、磨石・敲石 (17%) の出土点数が多く、これらの石器を使った活動が活発だった可能性が高い小浜遺跡

というように、特徴が異なる遺跡が含まれていた。明らかに、遺跡ごとに、主となる活動内容が異なっていたのである。しかも、それぞれに活動は、季節性を帯びたもので、決して個々独立したものではなかったはずである。そうした意味で、I類には多様な活動を反映した遺跡が含まれているわけであって、それぞれの遺跡には遺跡間の連鎖的なつながりが想定されるのである。

それでは、どのような関連性が推察されるのであろうか。

まず、野原遺跡を取り上げなければならない(第20図)。それは、磨石・敲石 (78%) の多さが際立ち、磨石・敲石を使った活動が活発だった可能性が高い、というように極めて季節性の強い内容の遺跡だったからである。磨石・敲石の他、その受け台としての石皿・台石も存在し、ドングリ類の処理に使用されたものであり、集中的な処理を考えるならば、秋から冬にかけての作業を行っていた可能性が高いのである。現に、出土位置が覆土の中位にあり、原位置を留めているものではないといっても、6号土坑中から126個の炭化種子(アカガシ)が出土したことはその可能性を示すものであろう。おそらくは、遺跡から検出された土坑の中には、ドングリ類の貯蔵穴が含まれていた可能性が高く、野原遺跡がドングリ類を収穫し、それを貯蔵しながら、次々に製粉処理していった集落であった可能性を示しているのである。

次に、逆瀬川遺跡を取り上げなければならない(第21図)。ここは、石錘 (42%) の多さが際



第20図 野原縄文集落での活動

立ち、また石鏃（24%）や磨製石斧（12%）の出土点数が多く、石錘や石鏃、磨製石斧を使った活動が活発だった可能性が高い、という遺跡だった。石錘が多いことは、当地がV字谷の谷底である、という立地環境も勘案すれば、この集落のすぐ近くの川辺川で川魚漁が盛んに行われていた可能性を示唆しているようでもある。また、石鏃（24%）が一定比率で存在していることは、その集落の住人が狩猟をおこなっていた可能性を示唆している。そうであるならば、アユやマス、ヤマメなどの川魚漁では6月から9月にかけての夏場ということになるだろうし、狩猟ではそれよりも前の冬場ということになるだろう。

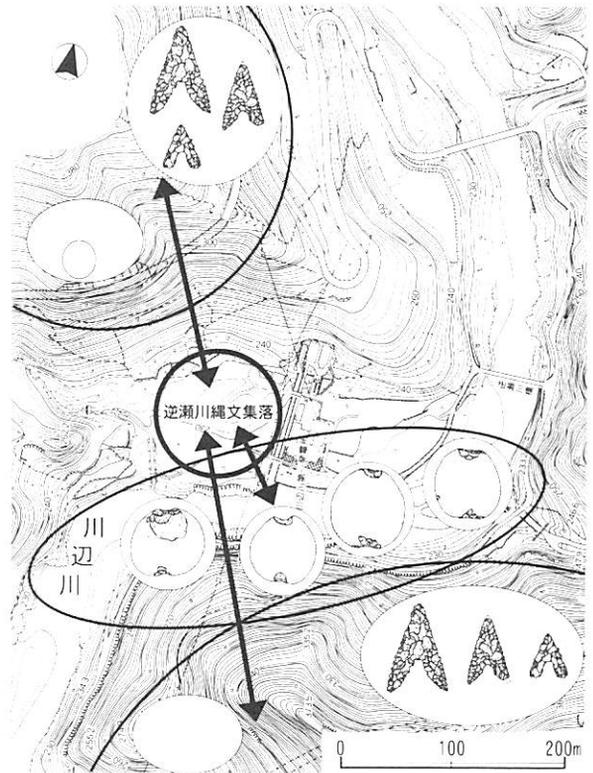
さらに、V字谷の谷底に立地する小浜遺跡

では、石錘（8%）が僅かであるのに対して、石鏃（25%）、磨製石斧（25%）、磨石・敲石（17%）が目立っているのである（第22図）。ドングリ類の処理が活発な秋から狩猟の季節である冬場の活動が行われていた可能性も高いのである。

このように、I b類の遺跡では、季節性を帯びた集落が含まれていた可能性を指摘できるように、複数の遺跡がセットとなって1年の活動が保証されていた、と考えられる。それは、それらの遺跡を縄文人たちが巡回していたことであり、その結果、石器相を異にするさまざまな遺跡がI b類として残された、と評価することができるのである。

さらに、I a類の遺跡では、その遺跡規模から判断しても、五木谷での中心的な集落であった可能性が高い。そこは、さらに川辺川の上流域に、さらに川辺川の下流域に、そして五木小川の上流域に、というように、3方向への活動展開の基点にでもなり得る位置にあっていた。残念ながらこれまでの調査で、川辺川のさらに上流域と五木小川の上流域で、当該期の遺跡連鎖を窺わせる資料は得られていない。それは、同じような立地環境を擁する良好な土地が川沿いに点在する、さらに川辺川の上流域と五木小川の上流域である。このような推測は十分に可能であろう。ここにおいて、I a類の遺跡が当時の中心的な集落として選択されていた可能性は相当に高いもので、そこは3方向に展開した各縄文人たちのグループが決められた時期の一定期間に集合していた集落であった可能性が高い、と評価しておきたい。

以上のように、五木谷における中期から後期におけるI a類、I b類、II類という遺跡類型は、五木谷において展開した縄文社会の構図を示唆する可能性が高いものとして評価できる。



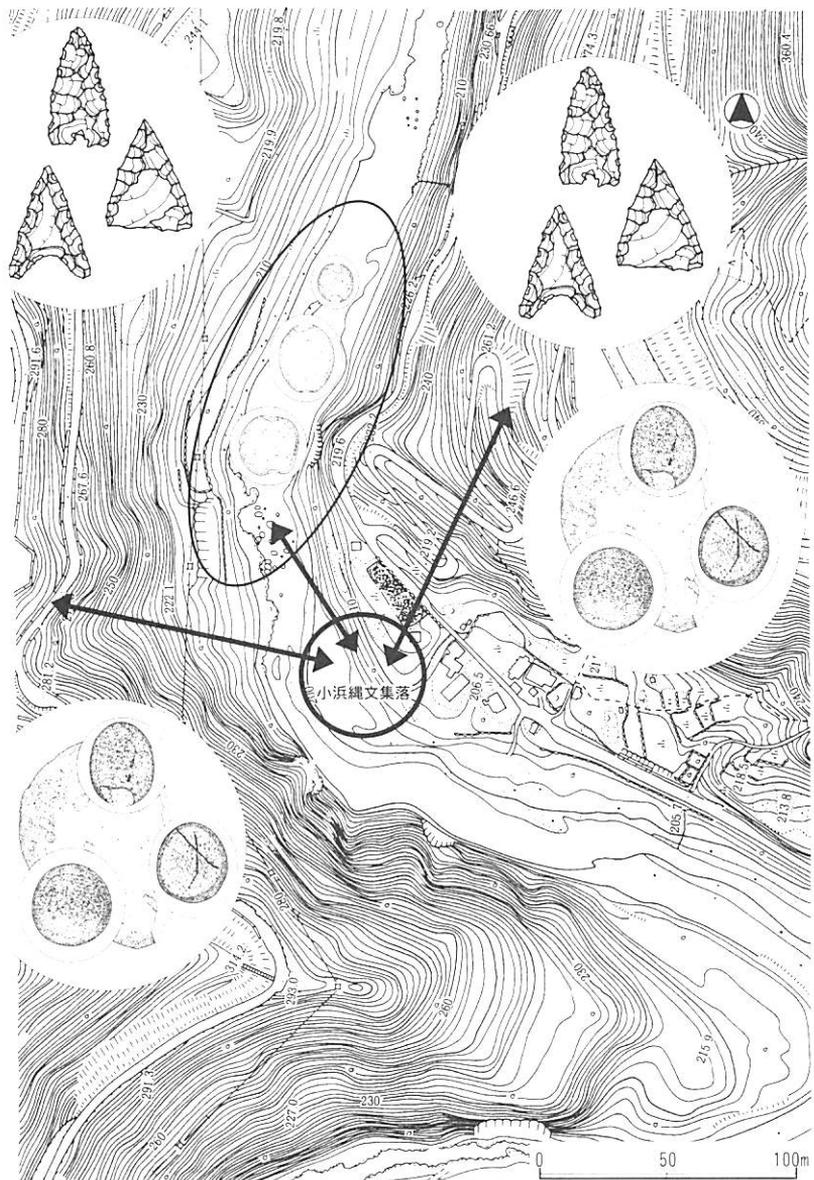
第21図 逆瀬川縄文集落での活動

その構図は、基点としての集落（I a類）から3方向に展開した縄文人たちが季節性を帯びた集落間の移動（I b類）を繰り返しながら、また基点としての集落（I a類）に回帰する、という季節性を帯びた移動と、それぞれの集落から出張っての活動（II類）によって成り立っていたと説明できる（第23図）。

5 五木谷における中期～後期の集団構成と活動

先に、五木谷において展開した縄文社会の構図を示唆する可能性が高い、I a類、I b類、II類という遺跡類型について、基点としての集落（I a類）と、そこから分散、展開した縄文人たちの集落間の移動（I b類）、そして基点としての集落（I a類）への回帰、それぞれの集落から出張っての活動（II類）によって成り立っていた可能性を説明した。では、このような五木谷の縄文社会の集団構成をどのように推察することができるだろうか。

野原遺跡では、2基の竪穴式住居跡が25mの間隔を置いて遺構分布域の北端付近と南端付近で検出された。この住居跡の関係であるが、これは、同時併存か異時独立か、という集落構成上の問題と大きく係わる問題である。決定的なことはいえないが、竪穴式住居跡の間に多数の遺構群が配置されていること、土器廃棄場として利用されていた谷部を介して南北方向に離れていることから、ここでは、それぞれ異時独立と理解しておきたい。つまり、この集落は、1つの竪穴式住居跡と複数の貯蔵穴、墓によって構成されていた、と考えられるのである。



第22図 小浜縄文集落での活動

逆瀬川遺跡では、5～6基の竪穴式住居跡が検出された。これらの竪穴式住居跡については、直径15mの範囲内に集中するもので、その位置関係からもすべて同時併存とは考えられない。決定的なことはいえないが、異時独立か2基程度の同時併存を想定することがもっとも自然であろう。

このように、I b類の集落は、遺構の数から判断するに、1～2基の竪穴式住居に居住する人数の縄文人たちによって構成されていたものと考えられる。おそらくは10人を越えない数であったに違いない。

一方、このI b類の集落の縄文人たちは、I a類の集落に回帰し、集合していた。先に推定したように、合流地点のさらに上流域の川辺川、さらに下流域の川辺川、そして五木小川、という3方向に分散、展開していた3つのグループがI a類の集落に回帰し、集合した場合、その集団の規模は、20人前後の数となったものと考えられる。そこで、これをもって、五木谷の中期～後期の基本的で単位的な集団であったと考えておきたい^{註3)}。

以上のことをまとめて、当時の集団構成と活動内容を再度整理しておきたい。

五木谷には、20人前後の規模の基本的で単位的な集団が活動していたものと考えられる。彼らの本拠としていた集落（I a類）は、川辺川と五木小川との合流点近くの谷部の広い河岸段丘上にあった。そこは、3つの谷が落ち合う場所である。彼らの目には、それぞれの川筋に広がる、縄文人たちの生活を保証する環境が映っていたはずである。

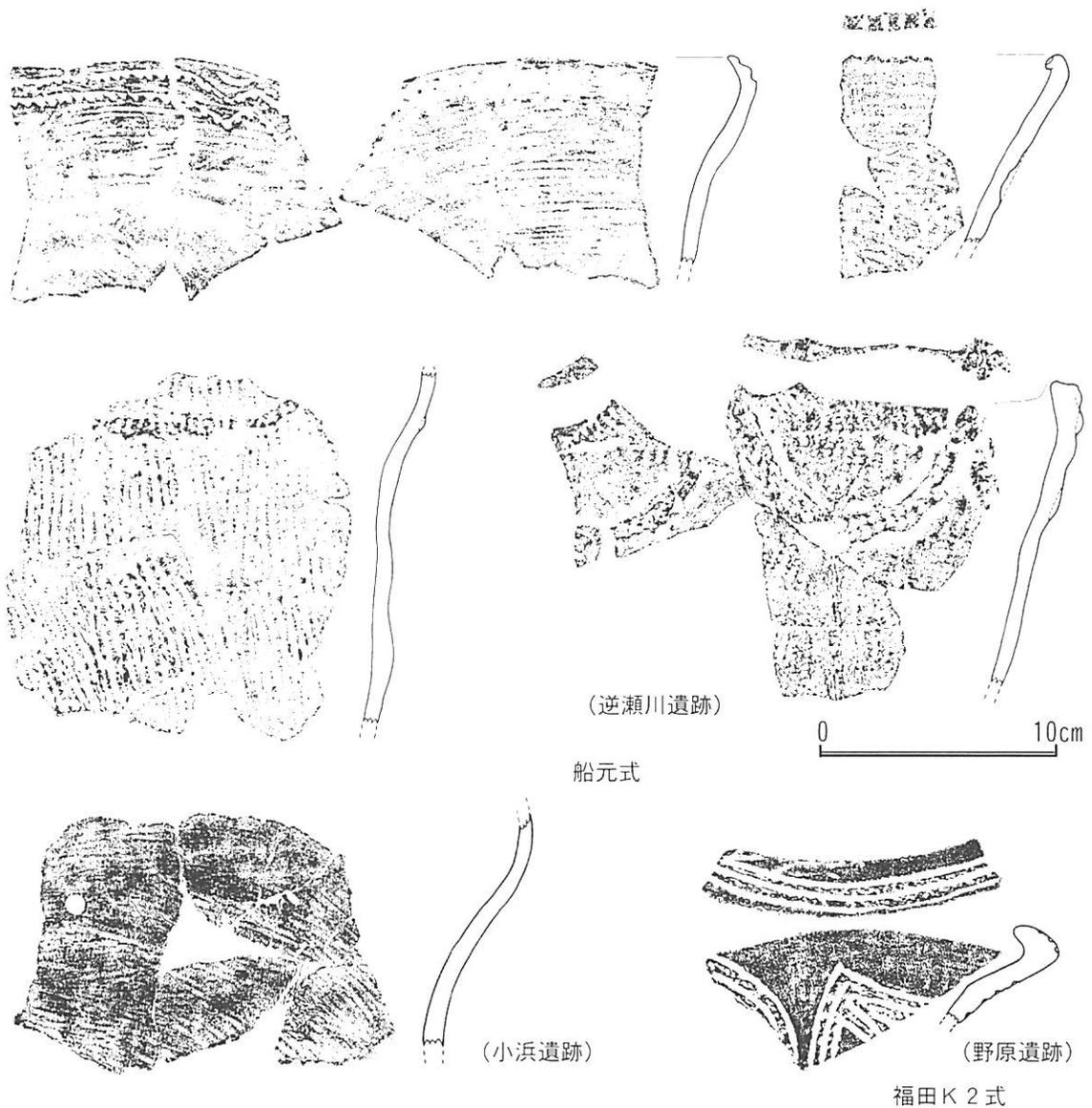
I a類の集落の縄文人たちは、3つのグループに分散して、そうした川筋を遡ったり、下ったりしていったのだろう。その3つのグループの規模は、1～2基の竪穴式住居で生活できる程度のもので、10人を越えないものであったと考えられる。それぞれの川筋の縄文人たちは、アユやマス、ヤマメなどの川魚漁、狩猟、ドングリ類の採集と製粉作業など、季節的な活動ごとに居住する集落（I b類）を変えながら暮らしていた。また、僅かな遺物しか出土しない遺跡があるように、彼らは、集落周辺の土地（II類）でそうした諸々の活動を行っていたようでもある。遺物が出土する、出土しないにかかわらず、そこそこが彼らの活動の場であったに違いないから、集落周辺にはたくさんの、そうした派生的な活動地（II類）があったのであろう。そして、彼らの活動が終了すれば、3つのグループは、再度、本拠としていた集落（I a類）に集合したのと考えられる。

少なくとも、彼らの集落は五木谷全域であった。彼らは、そこを周回移動する活動を展開していた。いわば領域内定住（木崎2003）という、九州石槍文化（木崎1996 a、b、c）で展開した活動を彷彿とさせるものである。少なくとも、1年を越えて、一定地に同じ集団が居住する定住という居住様式を五木谷の縄文社会には、当てはめられそうにないのである。「定住社会＝縄文社会」という一般論では決して片付けられない縄文社会が、五木谷で展開されていた可能性が高いことは、極めて興味深い。

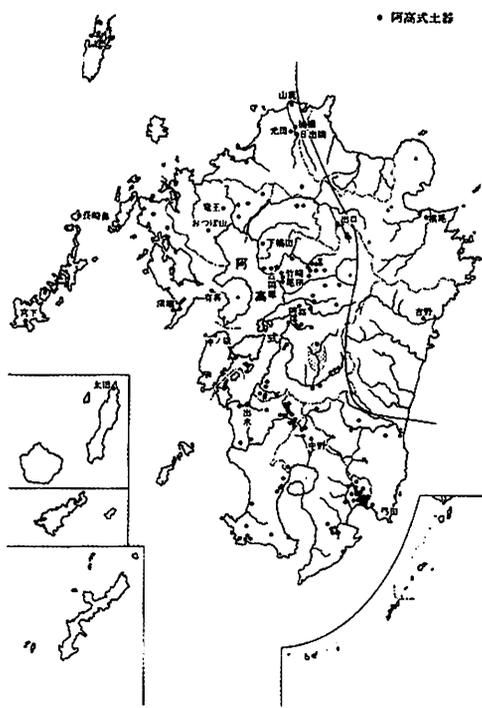
6 おわりに

五木谷全域を集落として、そこを周回移動する活動を展開していた、いわば領域内定住をしていた縄文人たちがいたと考えられる。彼らの生活は、とても狭い範囲に繰り広げられていたが、優れて機能的で、効率的なものであった。そのことを提起することが本稿の目的であった。

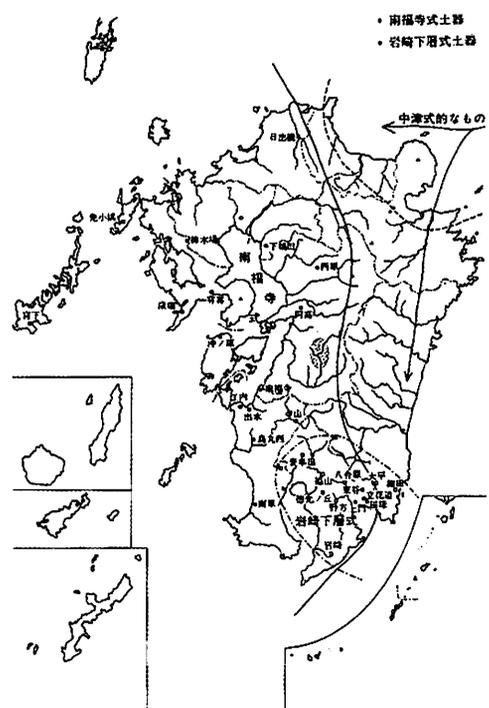
一方、五木谷の当該期の土器型式には、阿高式、南福寺式、出水式、北久根山式、市来式などの九州地方の土器の他に、船元式や福田K2式などの瀬戸内地方の土器（第24図）も僅かながら含まれている。広域的な文物の流入が認められるのである（第25図）。また、チャート、粘板岩、千枚岩、砂岩、頁岩、凝灰岩、泥岩のような、川筋の河原で容易に採取可能な石材の他に、鹿児島県出水市の日東周辺でしか採取できない黒曜石や、五木谷の上流の峠を越えた熊本県東陽村などで採取できる蛇紋岩などが石器石材に利用されているのである（第26図）。これら



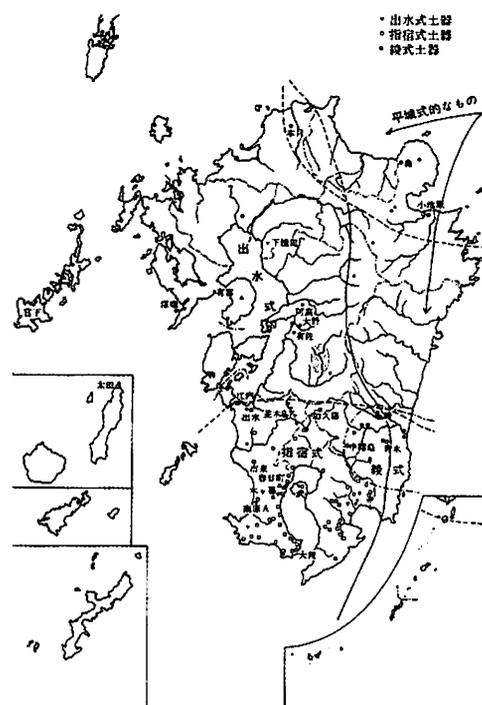
第24図 五木谷の瀬戸内系土器



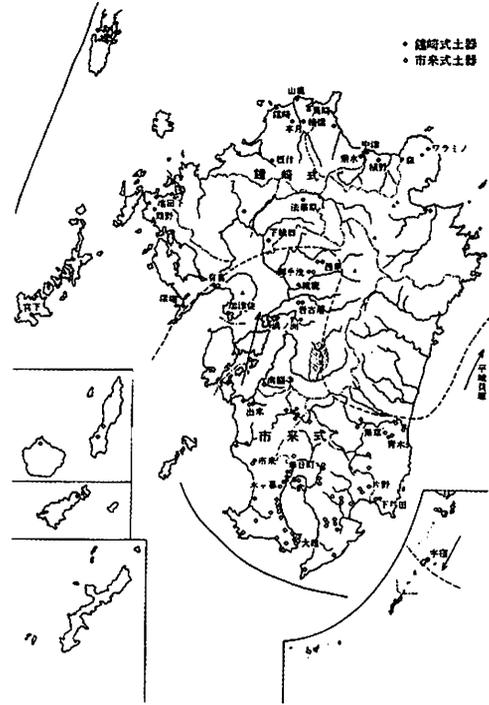
阿高式土器の分布



南福寺式土器の分布



出水式、綾式、若宿式土器の分布

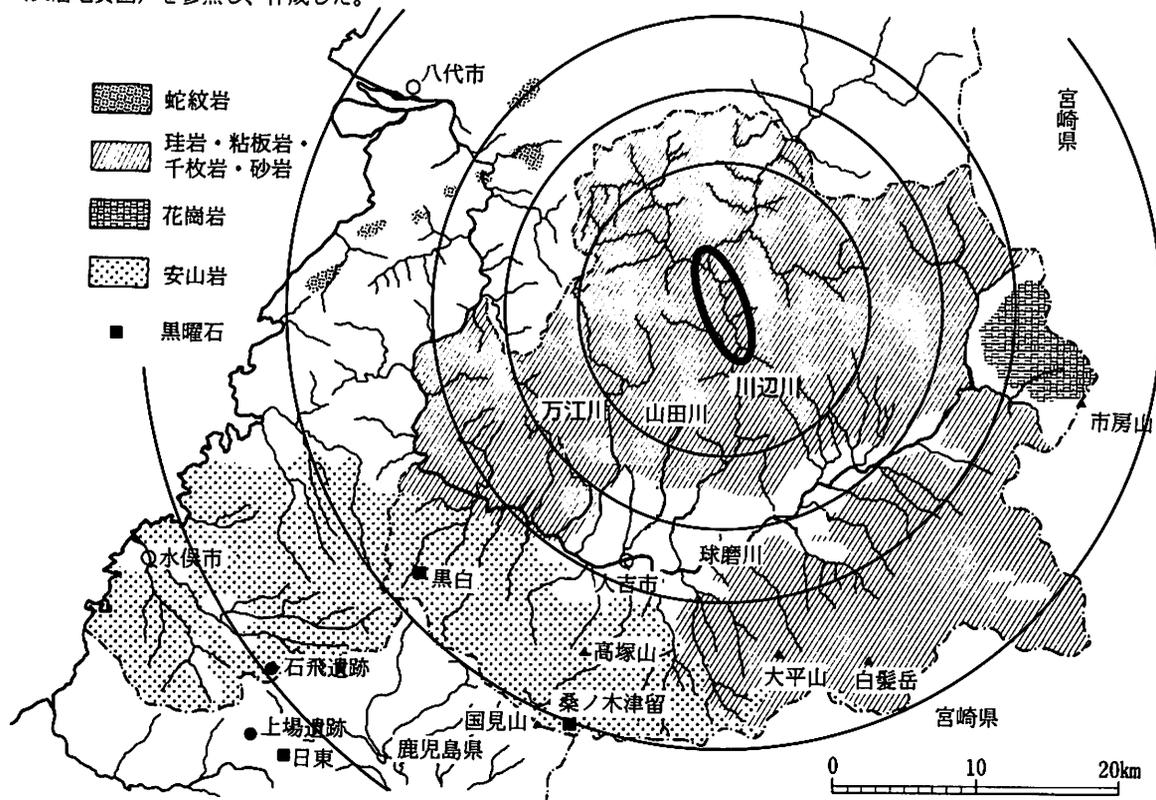


鐘崎式、市来式土器の分布

前川威洋『九州縄文文化の研究』(1979) 所収の挿図を基に、作成した。

第25図 中期後半～後期前半の各型式土器の九州内分布

熊本県発行の「球磨川流域地域環境利用ガイド」
(表層地質図)を参照し、作成した。



第26図 石器石材の分布 (熊本県教育委員会1987を一部改変)

は、五木谷という狭い範囲に領域内定住をしていた縄文人たちのネットワークが如何に広いものであったのかを窺わせてくれる、とても興味深いものである。

おそらくその上位にはさらに大きな単位の集団群の存在が想定される。こうした集団群の中で、五木谷の単位的な集団は、遠方の土器なり、石器石材なりを入手していったものと考えられる。さらに大きな単位の集団群の本拠地がどこにあったのかは依然不明であるが、縄文社会を考えるうえで、それに関する研究もまた欠かせないものであろう。

今後は、五木谷の当該期の土器相を技術論的に詳細に検討すると共に、そうした成果を近隣の地域のものと比較検討する必要があるだろう。また、石器石材の原産地と石器石材の利用傾向を詳細に検討すると共に、そうした成果を近隣の地域のものと比較検討する必要があるだろう。その中で、さらに大きな単位の集団群の範囲が具体的にどのように広がっていたのかが明らかになってくるものと期待される。

【謝辞】平成15年度企画展示『肥後の至宝展Ⅱ 球磨楽展～球磨の考古と歴史に遊ぶ～』の企画・開催という機会が与えられなければ、本稿を起稿することは無かった。本稿を閉じるにあたって、御芳名を掲げて、感謝の意を表したい。

北川賢次郎、清田純一、古屋松硬子、渋谷敦、高田睦子、高田剣、鶴嶋俊彦、出合光宏、

原田正史、福原博信、帆足俊文、前田一洋、和田好史、江本直、角田賢治、池田朋生、吉里美枝子、大友由紀、人吉市教育委員会、相良村教育委員会、五木村教育委員会、山江村教育委員会、あさぎり町教育委員会、城南町教育委員会（敬称略）

註1 熊本県教育委員会の帆足俊文氏の御教示による。

註2 五木村教育委員会の福原博信氏の御教示による。

註3 熊本県狸谷遺跡の報告や論文の中で、縄文時代早期における基本的で単位的な集団について、2～3の世帯によっていた可能性があることを指摘しておいた（熊本県教育委員会1987、木崎2004）。五木谷の中期～後期においても3つのグループによる基本的で単位的な集団であり、共通するところがある。

参考文献

- 五木村教育委員会1995『野々脇遺跡』
木村教育委員会1997『頭地田口B遺跡』
五木村教育委員会1998『小浜遺跡』
五木村教育委員会2003『逆瀬川遺跡』
木崎康弘1996 a 「九州地方の様相について－九州石槍文化の成立と展開－」『石器文化研究』6
木崎康弘1996 b 「九州石槍文化の展開と細石器文化の出現」(『九州旧石器』3 (1997) 再掲載)
木崎康弘1996 c 「石槍の出現と気候寒冷化－地域文化としての九州石槍文化の提唱－」『旧石器考古学』53
木崎康弘2003「ナイフ形石器文化集団研究序論－石器文化の類型とその評価－」『旧石器人たちの活動をさぐる－日本と韓国の旧石器研究から－』
木崎康弘2004「ナイフ形石器文化における定住化と祭祀」(現在、投稿中)
熊本県教育委員会1987『狸谷遺跡』
熊本県教育委員会2002『頭地田口A遺跡』
熊本県立装飾古墳館2004『肥後の至宝展Ⅱ 球磨楽展～球磨の考古と歴史に遊ぶ～』
古環境研究所2003「第IV章 野原遺跡における自然科学分析」
小林久雄1968「肥後国球磨郡五木村頭地下手遺跡」『九州縄文土器の研究』
相良村教育委員会2003『野原遺跡Ⅰ』
田辺哲夫編1980『熊本の上代遺跡』熊本日日新聞社

細石核・細石刃の製作記録

—鹿角縦叩き法と削ぎ落とし法の呈示—

江本 直

熊本県立装飾古墳館 副館長

1 はじめに

昭和43年頃、佐賀県の先輩に連れられて多久三年山遺跡や原遺跡を尋ねたことがあります。畑の中から円錐形をした細石核を採集することができました。また、平成9年の秋、阿蘇郡小国町の耳切遺跡を発掘を担当し、周辺の遺跡を見てまわっていましたが、大分県との県境付近で同様の細石核を採集しました。当時から、このような見事な細石核が自分で作れたら旧石器時代の生活や石器のことがより理解できるのではと思いつけていました。平成13年に職場が県立装飾古墳館となり、古代体験教室の石器作りに係わったり、昼休み時間などが利用できるようになり、手指に切り傷をしながら石器作りに挑戦しました。

いろいろな細石核・細石刃ができましたのでご紹介します。

2 石器を作り始める

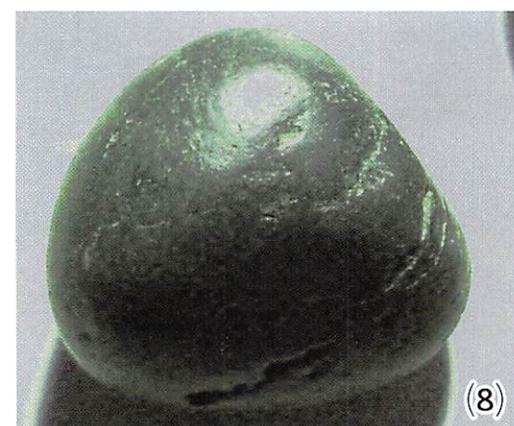
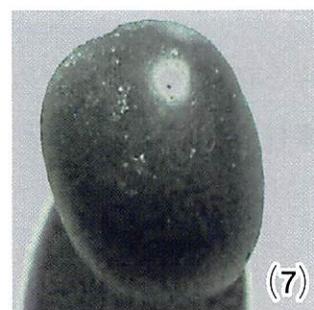
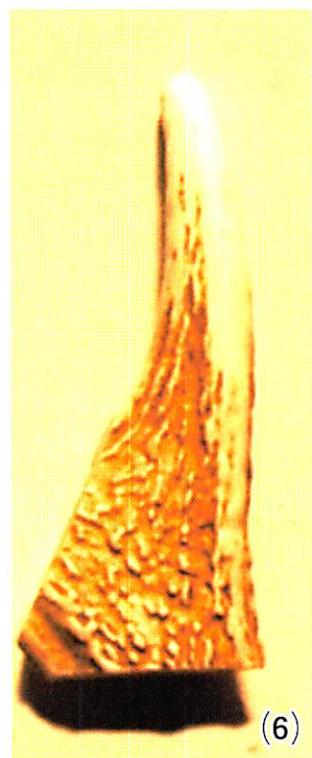
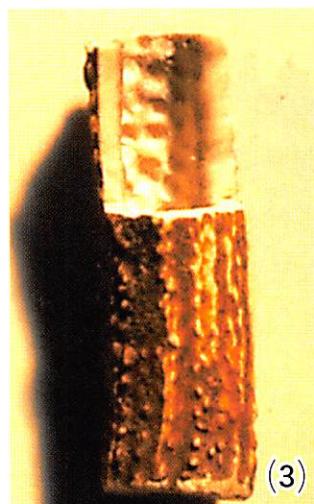
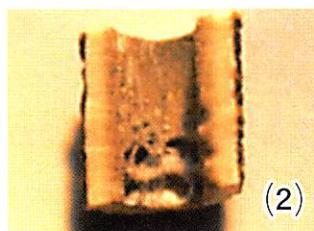
昭和50年ごろ、奈良国立文化財研究所の研修で松沢亜生先生から尖頭器の作り方の講義を受けたことがあり、そのときの強烈な印象を基礎知識としながらいくつかの石器づくりの書物や報告書を参考にして実施した。

黒曜石は北海道の白滝から入手でき、剥片を取ることはじめた。そのうち縦長剥片も取れるようになった。そして、厚手の剥片を素材として細石刃つくりチャレンジし始めたが、



かたくて、小さくて、石核をなかなか固定することができず、細石刃を取り出すことは非常に困難であった。

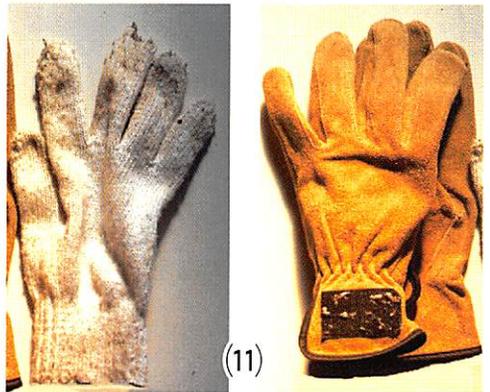
石器づくり道具



(1) 石器づくりの道具

鹿角（1～6）と叩き石：河原石（7～9）である。主な使い方として(1)は縦叩き法と削ぎ落とし法に(2・3)は小型の石器を作る時の手のひらでの固定として、(4・5・6)は2次加工、調整具として、先端の尖りは押圧技法に使用する。(7～8)は大きさに合わせて使う叩き石である。(8)は石狩川の河原での採集石。(9)は凝灰岩質のやや柔らかい石でたたいたときに剥片を壊しにくいもので、砂岩と共に重用される。(10)は今回重用したもので製図用の文鎮である。小さい石核等から細石刃を取り出していくと、新たな剥離場所を作ったり、不要な部分を取り除く作業が必要になってくる。その場合は強力な打撃力を必要とするので、重量感のあるこの文鎮を使用した。また打面の調整には横に擦るようにして使用したときに、思わぬ立派な小剥片や細石刃に近いものがぽろりととれ、鹿角削ぎ落とし法のヒントになった。(11)は軍手・革手袋（市販品）：軍手は細片が突き刺さったり、指先が擦り切れてしまうので注意。革手袋は皮が薄いと突き通してしまうので注意。このほか、できれば防塵用メガネを使ったがよい。思わぬ剥離で碎片が方々に飛ぶことがしばしばである。膝あてには皮製品を用意し、シートをしいたり、遺物箱を使って碎片が散らばらないよう注意する。ほうきやちり取りも準備しておく。切り傷のための医療用テープも必需である。

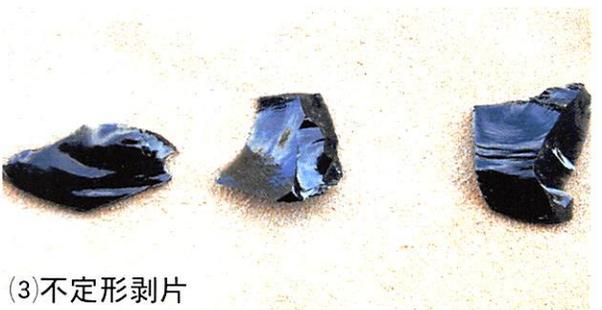
石器製作道具の紹介

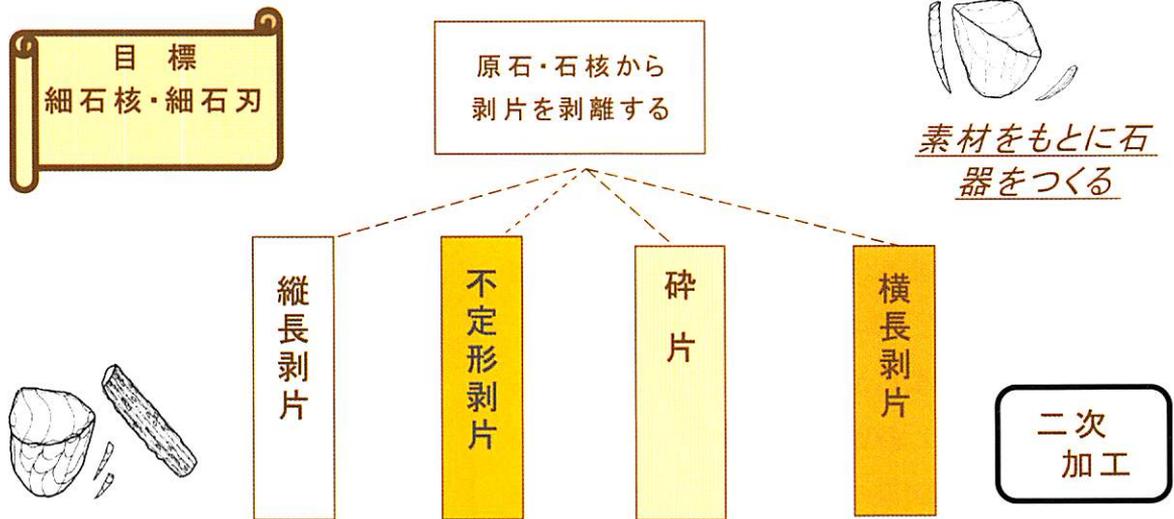


(2) 石器を作る

[石核から剥片を取り出す]

原石が石核になるが、うまく剥片が取れそうなところから取り出していく。打面の転移や調整を加える。縦長剥片を基本的な形状として取り出す。打面が断面が三角や楕円形に





なるが稜線のあるところが剥ぎやすい。適当なはぎ取り面がないときは粗割りをして新しい打面を作ることが必要である。

[剥片に二次加工]

ナイフ形石器や台形石器は剥片に形成された鋭い辺を刃部としてブランディングを施し仕上げていく。厚手で大きい剥片からは尖頭器ができる。

薄くて小さい剥片から石鏃や台形石器ができる。

[石器づくり]

石器を作り出して：ナイフ形石器や台形石器 スクーレーパーなどはやがて、作れるようになったが細石核・細石刃は非常に難しい。全国的な石器作りの名人である国土館大学の沼克彦先生、熊本の名人福田正文氏、福岡の名人山下実氏等からいろいろな技術を学ぶ。

製作した石器 ナイフ形石器(1)(2) 台形石器(3)



《円錐形や菊池郡七城町小野崎遺跡出土の小さな細石核・細石刃を目指して励む。》

3 細石核・細石刃づくりに挑戦

石材は北海道紋別郡白滝村産の黒曜石が入手できた。黒曜石は漆黒で非常に良質のもの、黒色であるがやや白っぽくざらざらしたもの、赤褐色のもの、茶色をしたもの、赤の縞状の模様が入るものなどの特色が見られた。原石からハンマーストーンで剥片をとりだし、厚手の剥ぎやすそうな剥片を選定し細石核とする。

《厚手の剥片やブランクを用意して》

鹿の角のとがった先端で突いて剥ぎ取る方法でやってみると、細石刃を取るために石核をしっかり固定する必要があり、手足を使うがなかなか困難であった、小さく短足のものが少しとれた。押すときになかなか力が入らない。失敗の連続、叩いて剥ぐとくづけたり、ステップ状剥離となったりで、お手上げ状態となってしまった。舟形のブランクで、時々うまくいくが円錐形になるように剥ぐことや、3センチ弱の小さな細石核からはとても取れるものではなかった。細石核が固定できないのが大きな原因と思えた。

《名人福田正文氏から学ぶ》技法

奇抜なアイデアで2枚の小板を使い石核を固定し、銅管を押圧具に使う縦長に剥ぎ取る名人である。(北海道紋別郡置戸安住遺跡関連で前田幸治氏の詳細な石器作りの紹介や報告がなされており、同様に木材を用いて石核を固定する方法が記されている。)彼らの名人芸を学びながら、各地の旧石器時代遺跡から多くの細石刃は出土しているので、このように名人だけに許されるだけのものではなく、普通の旧石器人にも、もっと簡単に作れる方法があったはずであるとときりと思いはじめた。

《大沼克彦先生から学ぶ》技法 (H16. 9 石器づくりシンポジウム in しらたき)

剥片素材を取り出すときに打面を調整し、稜線を見たり、調整して作り出すことが慣用であることの「コツ」を学ぶ。縦に長い端正な剥片ができる。その剥片の断面は三角や台形になる。そして鹿角の固定具を用意し、角の先で押して見事な細石刃とりだされていた。(47頁大沼先生の石器づくり写真参照)
固定具と押圧技法用道具

右の写真で、右の2本の材木は福田正文氏製作の石核固定具である。これに石核を固定して、先端を細工した銅管(径7mm、長さ120mm)を使って細石刃



を剥ぎ取っている。

中央の固定具は福田氏製作具や前田幸治氏がインターネットで報告されている固定具を参考に製作。この固定具に石核を置き、足（靴）で固定して作業する。この場合両手が剥ぎ取りに使えるので力が入りやすい。

左の2本は剥ぎ取り具である。先端に大小の銅棒を固定している。銅棒の先は円と四角を用意した。縦に長い細石刃を剥ぎ取るのに有効である。しかし、未熟な技術であるので、なかなか連続してできない。打面や打角の調整を頻繁に行う必要もあり大変である。剥片は飛び散るので注意。

新たなるトライ

さっそく、鹿角で（大沼先生が使われているような）固定具を作り固定することの訓練も行う。打面の調整に製図用文鎮を使用したりして工夫する。しかし、鹿角の鋭くとがった先端を使い、押して剥ぐのは力がうまくはいず、なかなかできないでいた。そのようななか、石核を手のひらに直接おき、または固定具を使って固定しながら、剥片がくずけないように、鹿角を縦に使いながら切り口面（鹿角小口と表現）の端部で、力をなるべく抜いて叩いているとそのうちぽろりと細石刃が取れたりした。また、鹿角を横にして擦りながら打面や側面の調整をしていると、偶然にも、ぽろりと細石刃がとれたのである。力もいらず簡単に細石刃がとれる。

これらの方法で剥ぎ取りを積み重ねていると細石刃も多くなった。

－縦叩き法－

手のひらで（皮手袋をしておく）石核を固定し叩く。鹿の角の先端で突いて剥ぐのではなく、鹿の角を棒状に輪切りしたもので（小口面の端で）そっと上から鹿の角を立てた状態で叩く。全周する剥離はなかなかできないが、数枚がつづけて取れる。角張ったり、稜線が形成されたところを主に剥いでいくが、続けていると打角がとれなかったりして、剥離できなくなるので、その場合は新たに粗割りをしたり、打面調整をして剥ぎはじめる必要がある。

小さいものは手のひらに鹿角の固定具や皮を使って固定する。叩くとき力が入りすぎると剥片が砕け碎片になったり、縦に長い剥片はとれない。また、角度が悪いと内側に喰いこみすぎて階段状の剥離や、逆に分厚く短足の剥片になってしまう。階段状剥離ができるとその部分はその後の剥離が絶望的になり、連続した剥離はできなくなってしまう。この方法によりそれなりの細石刃を剥ぎ取ることができるようになる。

《－鹿角縦叩き法－》と命名

－削ぎ落とし法－

打面の調整に文鎮（秘密兵器）で擦る方法を多用していたが、これでは細石刃のように細か

く縦に剥ぐ作業は難しい。この作業を鹿の角で横に滑らせるように作業をやっていたところ、ぽろりと、さかなのうろこが取れるような感触で、偶然に細石刃がとれ落ちた。(この方法がうまくできれば名人でなくて普通の人にも作れる)

力が要らない 力がスーッと抜ける感触 連続して剥ぎ取ることができる。これらの作業をとおして、鹿の角の表面にある小さな瘤(贅・小突起物)が適当な懸かりになり、都合よくうまく剥げたと分析できた。(そのため懸かりをつくるための、細かな打面の調整をあまり必要としない)

しきりと作業を続けているとやがて端正な小剥片もしっかりとれた。ばらばらと連続として剥片がとれるようになる。さらに固定具の工夫すると円錐形に近い形状や、非常に小さい形状も作れるようになる。オーバーに表現すると黒曜石の細石刃や石刃が竹を割っていくような感じで取れる。 《-鹿角削ぎ落とし法-》と命名 04.12.5

たとえば、以前使われていた大箱のマッチ箱で、マッチ棒を擦って火をつける要領に近いと思っている。力もそれぐらいでよい。

石核として厚手の剥片が使えるので、難しい円礫を割って打面とする方法は疑問に思えた。

側面調整はほとんどなくてもよい。打面の転移で剥ぎとった面が側面となることもある。

打面調整はあまりいらぬ 剥片の平坦面が打面 角度の見極めが必要。

鹿角の瘤がうまくひっかかる。鹿角の瘤が引っかかり絶妙の働きをする。

遺跡から磨り減った鹿角が出土することが期待される。

名人だけではなく、少しなれると多くの人が細石刃を剥ぎ取れるようになれよう。

〈写真説明〉

縦叩き法で細石刃をとる

縦叩き法(1)

小口面で叩いて剥いている

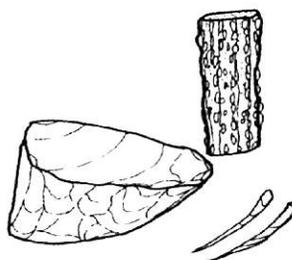
大きな石核であると手のひらで固定しやすく作業がしやすい。角張った、稜線が形成されているところがはぎやすく、長い剥片がとれやすい。ぽろりと落ちる感じで剥げるときがある。剥片は手のひらで受けられる。



縦叩き法(2)

石核を手のひらで固定して鹿角の小口叩き技法の端を使って上から力を抜いて叩く、打面や角度と稜線の都合よいことが必要。鹿角小口面の端で石核の端に加撃して取り出す。打角が合わないとは取れない。力が入りすぎるとくず





れてしまったり、ステップが生じてしまうので注意。

縦叩き法(3)

石核が小型(2~3cm以下)の場合は鹿の角に加工した固定具を使う。

手のひらで鹿の角の固定具、指、動物の皮等を使い細石核を固定する

縦叩き法(4)

薄手の細石刃がとれているところ。手のひらに刺さらないように注意。連続してはなかなか取れない



削ぎ落とし法

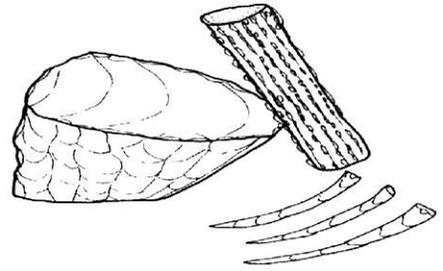
削ぎ落とし法(1)

石核の角の部分や稜線があるところが剥ぎやすい。一カ所がとれれば連続して剥げる。表皮を一度削ぎ取ってしまうと、柔らかく感じてくる。きれいに剥ぎ取れると金属音を発して落ちていく。

削ぎ落とし法(2)

角度を合わせながら削ぎ落としていく。剥ぎ取れ始めると連続した削ぎ落としが可能である。鹿角の瘤の大きさや高さで、剥片が幅広になったり、厚





みが変わる。

削ぎ落とし法(3)

削ぎ取りをしているところ。石核は厚手の剥片を次第に舟形にしていくと削ぎ取りやすい。



削ぎ落とし法(4)

小さめの石核を手を持ち削ぎ落としているところ。鹿の角の道具も次第に瘤が磨り減っていく。

削ぎ落とし法(5)

小さい細石核の場合は固定具を使って行うとよい。固定具と手で石核を押さえている。



削ぎ落とし法(6)

削ぎ落としたところ。剥ぎ取り面小さな細石刃が連続して取れている。小口面が取り易い。



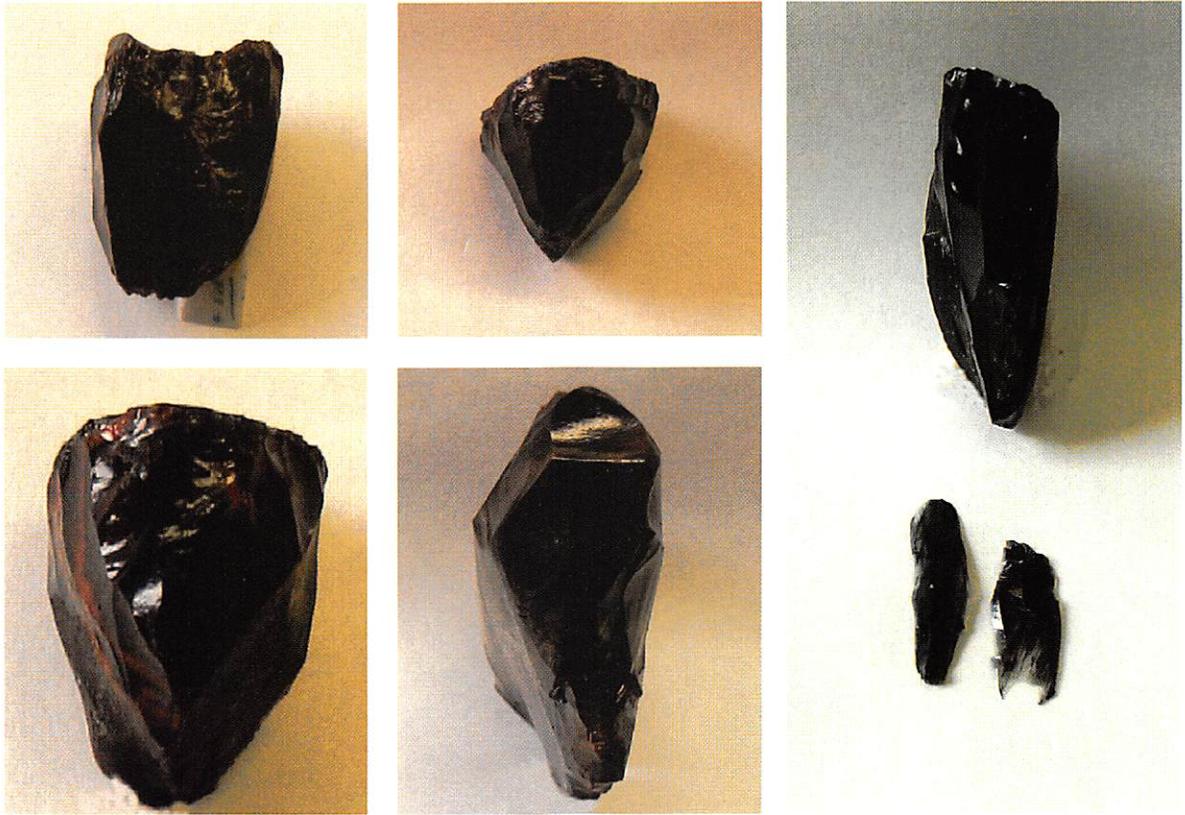
細石刃を削ぎ落とす 作業で細石刃・剥片、破片が数多く取れたところ。



製作した石器(1) 細石核



製作した石器(2) 細石核・細石刃



製作した石器(3) 細石刃



製作した石器(4) 細石刃



その他気づいたこと

2つの方法で小さい細石刃からやや大きい小石刃まで剥ぎ取ることができるので、小型のナイフ形石器や台形石器の素材もこの剥離方法で作りに出していた可能性も持たれる。

取り出した剥片の中にはリタッチをしていないのにブランディングに見えるものがある。先端部や胴部などの急角度に施された石器についてなど、今後注意して見るべきであろう。

細かな剥離を加えて、広範囲に平坦な打面を調整するのは非常に困難である。細石刃を剥ぎ取るその都度ごとに調整を行っていくことが多い。

角度が合わず剥離ができなくなることが多く生じる。その場合、新たな剥ぎ取り面を作出するために粗割りをしたりして都合の良い打面を作り出したりする。

打面調整や側面調整などで、小さい石核の一部を除去する剥離は集中した力を必要とする。敲打器は小さくて重量感のあるものが必要である。

押圧技法は適正な打面調整が必須である。打面の調整は一度に広範囲の調整は困難で、細かい調整を繰り返して行う必要がある。高度の技術であり、力がうまく抜けるので端正な細石刃が取れる。ステップフレーキングが生じることは少ない。逆にステップフレーキングは加撃力が強すぎたり角度が悪いときに力の抜けが悪くて生じる痕跡であり、製作者の技量をしめすパラメーターのひとつともいえる。

実験を通して押圧技法を使わずに細石刃が剥ぎ取れる方法があることがわかった。出土遺物との検証を必要とするが、熊本県内出土の細石核、細石刃の多くはこの方法でできそうであり、細石刃は少なくともすべて押圧技法の産物ではないとの可能性が呈示できよう。

今後、出土した石器資料や図面を見直したり、他の石材での剥ぎ取れるかの検証を行うべきと思っている。それぞれの特色をとおして、時期的位置づけや他地域資料との検討が進められよう。

「石器づくり体験ツアーに参加」

北海道白滝村教育委員会の職員の方々に案内いただいた。赤石山に登り原産地を見学。黒曜石は数ヶ所の林道に敷き詰められたかのようにあり、壮大な露頭もありました。大沼・松沢先生の

北海道の白滝で石器を作る H16.09.12



(製作の様子)



(石器製作の見学)



(製作中の写真)



(製作された石器)

石器づくりは魔術師のようでした。

貴重な黒曜石をふんだんに使わせていただきありがとうございました。(碎いてしまって申し訳ありませんでした)

北海道の赤石山や白滝遺跡群等が世界遺産として永遠に残されますことを祈ります。



今回の製作石器：細石核・細石刃

最後に

細石刃の剥ぎ取りは実験などにより押圧技法が主たるものと理解できますが、それよりも簡単にできる鹿角縦叩き法、削ぎ落とし法も存在したであろうとの呈示をしました。

難しくとても出来ないと思っていた小さな細石核・細石刃を少し作れるようになって、細石核・細石刃が大変親しみやすくなってきました。きっと旧石器人もこの方法を使っていた人がいたに違いないと今はしっかり信じた気持ちです。

石器の見方や製作技術の解明など、今後の旧石器研究の参考になれば幸いに思います。石器作りをしてはじめて気づくことが多々ありますが、それぞれに実験した石器や碎片の処理は責任を持って管理、処理に努めますこと誓います。

岩原古墳群

—集中豪雨被害箇所修復工事に伴う、

平成14年度緊急発掘調査報告—

熊本県立装飾古墳館

第1章

第1節 調査に至る経過

平成13年6月28日・29日、熊本県立装飾古墳館のある岩原台地一帯を集中豪雨が襲い、崩落が起きた。もともと岩原台地の基盤は阿蘇溶結凝灰岩であり、台地端部は脆く崩れやすい。その時の崩落箇所は、岩原古墳群のなかの馬不向3号墳の東側と、下原古墳の北側で双子塚古墳の前方部側から北東隅にあたる急傾斜地の2カ所であった。

平成13年度業務日誌によると、次のような対処がなされていた。6月30日、被害確認。7月4日、本庁文化課被害状況視察。同月5日、ぬかるんだ地盤が乾燥するのを待って、シート・ロープ等で危険箇所を覆い2次災害の予防措置。同日、管理主体である鹿央町教育委員会から、国史跡岩原古墳群の毀損届（文化財保護法73条の2）を熊本県教育委員会に提出。

これを受けて熊本県教育委員会は、平成13年11月、国宝重要文化財等保存整備費の補助金交付を申請した。また、具体的な修復は、鹿本地域振興局土木部と協議を重ねた結果、景観を保護することを前提に、馬不向3号墳東側ではブロック積工法で、双子塚古墳から北東隅の急傾斜地では安定勾配を確保した大型ブロック積工法で、施工することが決まった。この決定により、芝生養生面のみが崩落した馬不向3号墳では、復旧工事のみとすることが決まった。

さらに、双子塚古墳の前方部から北東隅の急傾斜地では、安定勾配を確保するため崖下の新たな土地買収と共に、台地縁辺部を削平する必要がでてきた。このため、熊本県立装飾古墳館では、平成14年度の土地買収完了を待って、削平予定箇所の緊急発掘調査に着手した。

第2節 発掘調査、整理作業等の経過

発掘調査（平成14年度）

10月11日 文化財保護法58条の2第1項により埋蔵文化財発掘調査の通知。

10月16日 重機による表土剥ぎ。

10月17～20日 県立装飾古墳館主任学芸員池田朋生、嘱託吉里美枝子、同大友由紀、他作業員1名により遺構検出。

10月21日 遺構数を確定、調査行程の検討を行う。

10月30日 作業員投入、本格調査に入る。

11月12日 分館主任学芸員矢野祐介、調査参加。

11月13日 地形測量終了。

11月14～20日 IV層下面で確認トレンチの掘削。

11月23日 調査機材撤収、調査終了。

11月24日 山鹿警察署宛、遺失物法第13条により埋蔵物発見の通知。

整理作業等（平成14年度・平成16年度）

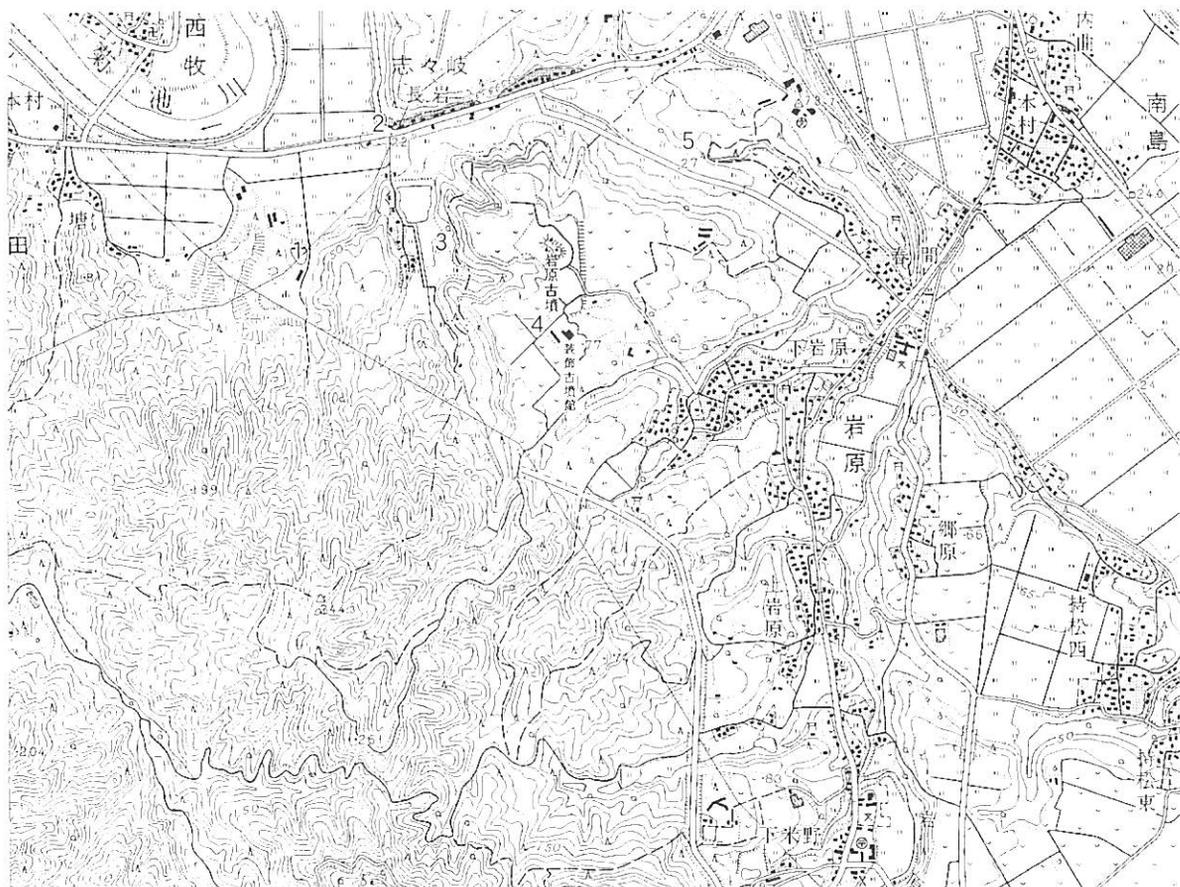
平成14年11月28日～12月4日 熊本県文化財資料室で、出土遺物の水洗・注記・土器接合。
縄文土器等の一部はバインダーによる硬化処理を行う。

平成14年1月 肥後の至宝展 I で資料公開。

平成17年1～2月 遺物実測・原稿執筆。

第2章 古墳群を取り巻く環境

岩原古墳群のある岩原台地は、基盤に阿蘇溶結凝灰岩が厚く堆積する、菊池川の支流岩野川沿いの洪積台地の一つである。この台地は、菊池川の中流的な景観と下流的な景観を分ける米野岳の東麓に位置する。標高77m前後。岩野川からの比高は、約50mを測る。周辺には同様な台地が八つ手状に拡がっており、壮年期の浸食地形が認められる。崩落箇所が大きくえぐれ、2次災害を招く恐れがあったため、遠方からの肉眼観察にとどめざるをえなかったが、断面観察によると腐食土層下部のローム層が大きく2枚に分かれて堆積していることが確認できた。さらにこの2枚の間には、薄いピンク色の土層堆積が認められた。薄いピンク色の土層を挟む



1小原浦田横穴群 2長岩横穴群 3岩原横穴群 4岩原古墳群 5桜の上古墳群
図1 周辺関連遺跡分布図

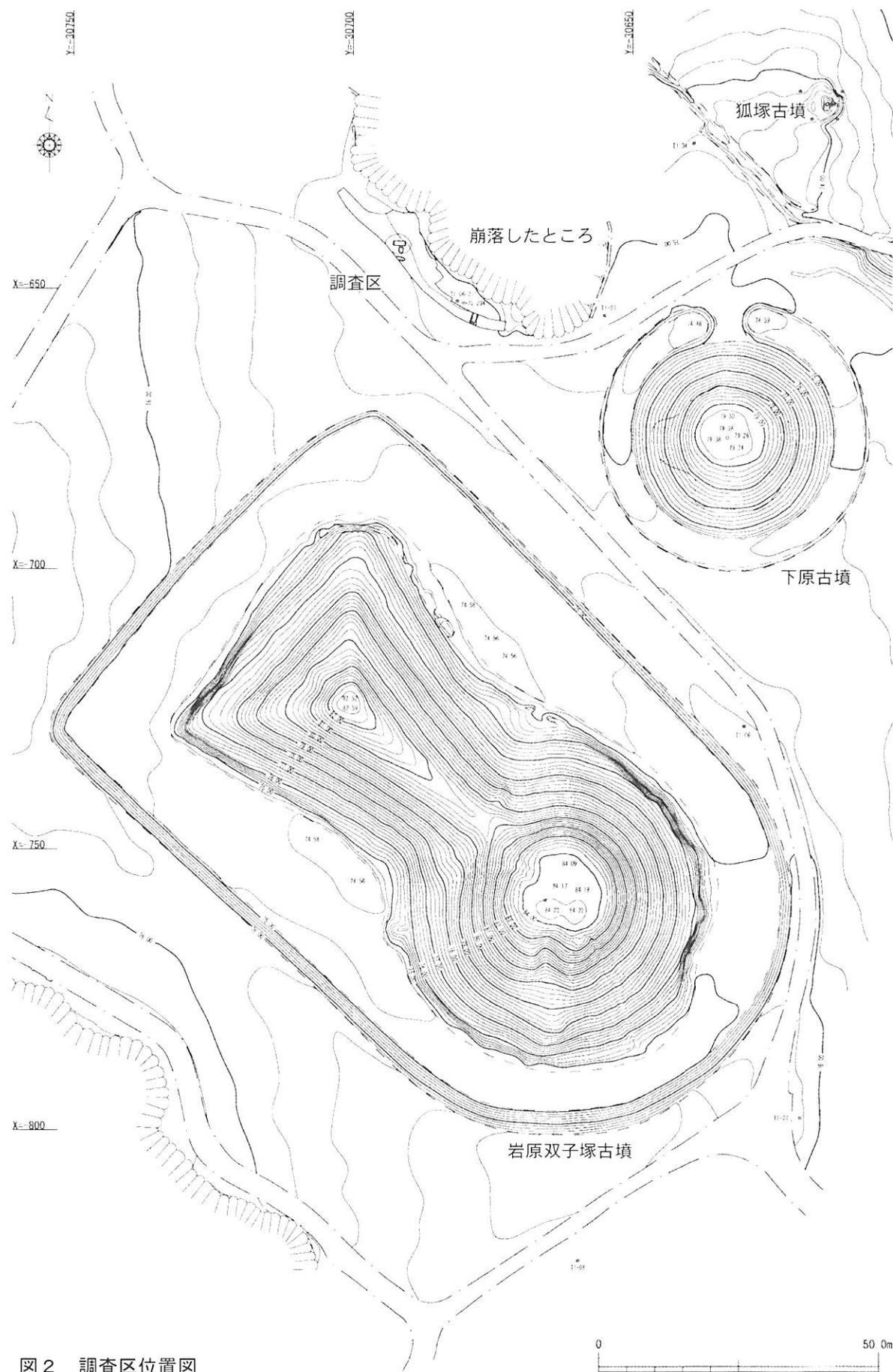


図2 調査区位置図

上下の厚いローム層は、従来から鳥栖ローム・八女粘土と呼ばれる、阿蘇4火山性噴出物の再堆積層、若しくは溶結凝灰岩上層の非溶結部分と考えられる。

周知の通り、岩原古墳群は、墳丘全長102mの双子塚古墳を中心に、下原古墳・寒原1号・寒原2号墳など、大小の円墳、円形周溝墓からなる熊本県下有数の古墳群である。そのほとんどは、昭和56年の周溝確認調査の結果を基に、「肥後古代の森鹿央地区」として整備され、盛り土で保護された。そのため整備以前のまの姿が見られる古墳は、双子塚古墳の墳丘の他は、昭和40年の農道建設時に露出した寒原2号墳(墳丘北側の主体部断面、墳丘は盛り土による復元)、「肥後古代の森鹿央地区」の外にある狐塚古墳(石室の一部が露出)などに限られる。

中でも、双子塚古墳は、電気探査により後円部に盗掘坑らしき横穴が認められたものの、主体部には達していないことが判明しており、数少ない未開封の主体部を残すものとして、その墳丘と共に貴重な存在である。今もなお、岩原地区の住民は、墳丘そのものを掘り返すことはおろか、石(葺き石?) 1個持ち帰ることすらタブー視している。このように、この地が神聖な場であることは今も変わっていない。

文化財保護の意識が高まる以前、千年以上の間、大きく削られることなく残ってきた背景には、例えば神の空間として守られる、神社のような「鎮守の森」的な思想があるのかもしれない。今後は、熊本を代表する前方後円墳がどのようにして残されてきたのか、「崇り」「畏れ」「敬い」の思いが語り継がれていくシステム自体を調査の対象とすることも視野に入れるべきであろう。

また、著名な古墳群でありながら、古墳時代の歴史的な意義付けをするには、その実態が今ひとつ不明瞭である。特に、双子塚古墳が造立された時期については、墳丘そのものの形状、採取された埴輪の所見などから複数の意見が出され、決着をみていない。主墳の時期についてコメント出来なければ、同時期の菊池川流域の古墳時代を粗描することさえも難しい。原因の一つは関連調査の報告、並びに周辺の古墳で採取されてきた埴輪片・須恵器片の整理報告が少ないことがあげられる。それは、周濠調査によって得られた資料についてもしかりである。かつては四十八塚と呼ばれ、周辺の畑地耕作の際に出土した石棺の話をよく耳にする。その意味で、熊本県立装飾古墳館が果たさなければならぬ役割は大きい。熊本県立装飾古墳館では、こうした古墳群そのものの広がりも可能な限り聞き取り調査を行ったうえで、今後も関連資料の紹介を続けていくこととしたい。

第3節 岩原古墳群調査略歴

調査年度	調査内容	調査主体	内容	備考
昭和27・28・29	測量調査等	玉名高校考古学部・山鹿高校考古学部	岩原古墳群	熊本史学12号
昭和40年	緊急調査	山鹿高校考古学部等	寒原2号墳	熊本史学29号
昭和56年	周溝確認調査	熊本県教育委員会	双子塚・下原・馬不向・寒原・寒原2・参考地A/B/C※1	熊本県文化財調査報告第55集
平成元年	緊急調査	熊本県教育委員会	寒原4/5等	本館建設予定地

平成3年	周溝確認調査	熊本県教育委員会	双子塚※2	前方後円墳集成に記載
平成4年	緊急調査	県立装飾古墳館	時期不明土坑1基	横山古墳移転予定地
平成5年	緊急調査	県立装飾古墳館	近世溝2基	実習棟建設予定地
平成5年	緊急調査	県立装飾古墳館	寒原3号墳	本館常設展示
平成10年	測量調査	県立装飾古墳館	双子塚・下原・狐塚測量	本報告中の地形図
平成11年	電気探査	九州大学工学部※3・ 県立装飾古墳館	双子塚墳丘	研究紀要第4集
平成11年	磁気誘導探査	国立奈良文化財研究所 ※4・県立装飾古墳館	双子塚墳丘	平成11年度調査研究事業
平成14年	緊急調査	県立装飾古墳館	双子塚古墳北東側丘陵際	本報告

※1 参考地A/B/Cは、整備後、馬不向2号、馬不向1号、塚原古墳とそれぞれ呼称。

※2 正式名称は「岩原双子塚古墳」

※3 九州大学工学部地球環境工学科 牛嶋恵輔教授、水永秀樹助手による。

※4 現独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 西村康遺跡調査技術研究室長（当時）による。

第3章

第1節 調査の方法と成果

調査区設定に先立ち、削平箇所を工事設計業者の測量を基に確定した。当然史跡内であるため、全域を調査範囲として掘削を行った。なお、前述の通り崩落が予想される崖際は2次災害を避けるため調査を断念せざるを得なかった。

表土剥ぎに当たっては重機を使用した。重機ではⅠ層（芝生養生面・整備時と見られる盛り土）とⅡ層（旧耕作土）までの、約60cmを剥ぎ取った。

続けてⅢ層包含層掘削、さらに遺構検出を行った。この遺構の数を基に、調査に必要な期間や作業量、作業員数を算出。また、平成10年度に設置された基準点を基に5m間隔で、遺構を避けながらメッシュ杭を設置し、グリッド法による調査を行った。

なお、遺構についてはⅢ層中では検出できなかったものの、遺物については極少数ながら円筒埴輪片などが含まれていた。ただし、これらの遺物は、Ⅲ層の堆積時期を判断させるものではなかった。また、Ⅳ層上面で検出した遺構の状況から、Ⅲ層とⅣ層の境は不整合面であり、大半の遺構は上面が削平されていると見られる。

遺構番号は、検出順に1から付した。ただし、調査が進展するなかで遺構ではないことが判ったものもあり、その場合の遺構番号は、抹消して欠番として扱った。遺構の調査終了後、可能な限りトレンチを入れ下部遺構の有無を確認した。その結果、遺構検出面はⅣ層上面の1面のみであり、さらに、遺構は埋土の状態から全て岩原古墳群に伴う時期のものと判断した。

出土遺物から、岩原古墳群に先行した時代の遺跡があったことも判明した。縄文時代晩期の刻目突帯文土器様式の段階では、生活の場として岩原台地の活用が始まっている。続く弥生時代の状況については、出土した土器片が壺の胴部片のみであることからそもそも弥生土器か否かも判別しにくい。今後の課題である。

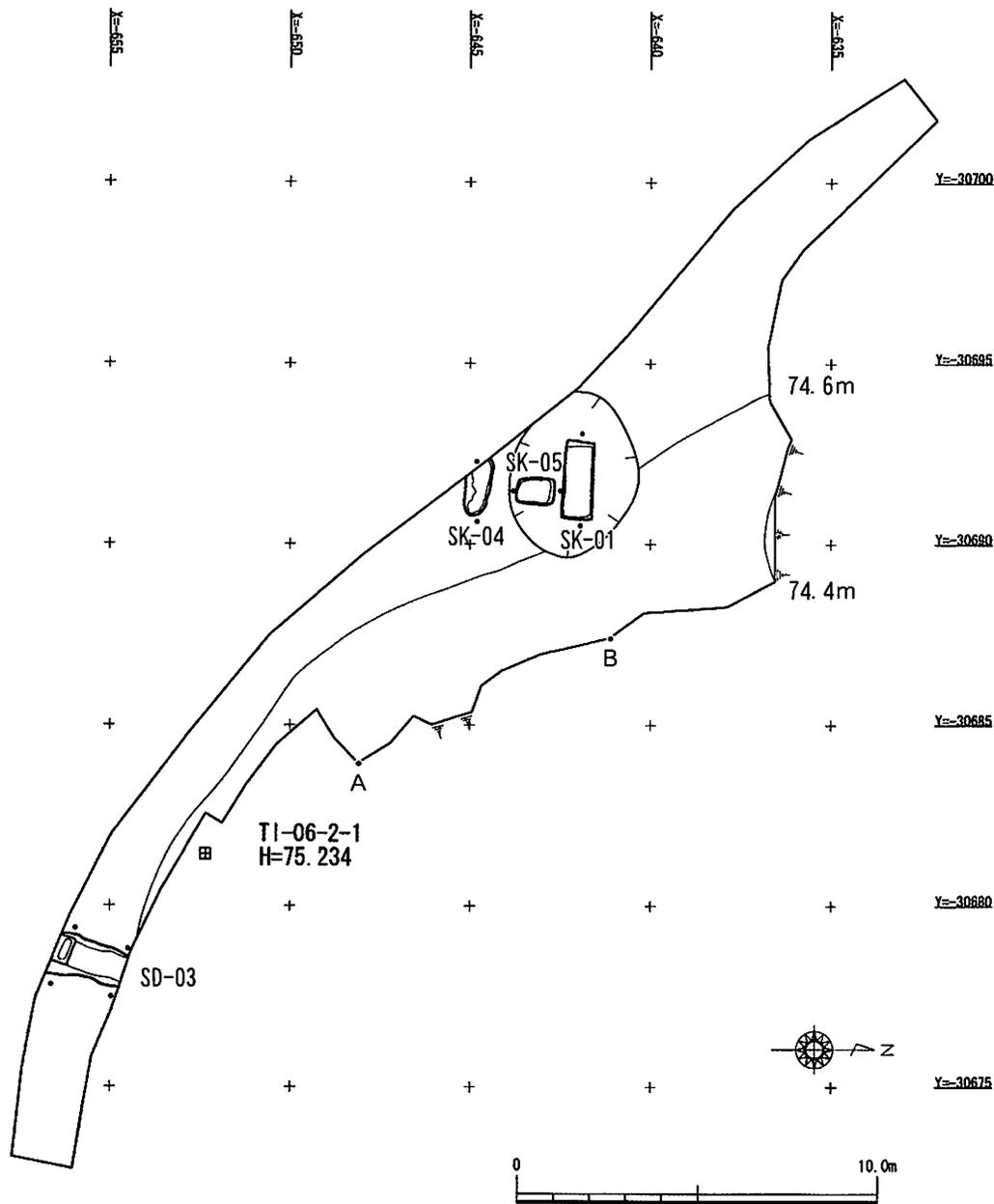


図3 遺構配置図

第2節 層序

I層：表土層、芝生養生面と整備時の盛り土で構成される。

II層：旧耕作土層、軟らかい乾いた土質で樹根が多く含まれる。肥後古代の森鹿央地区管理組合会長立山義晶氏（以下立山氏と略す。）からの聞き取りにより、樹

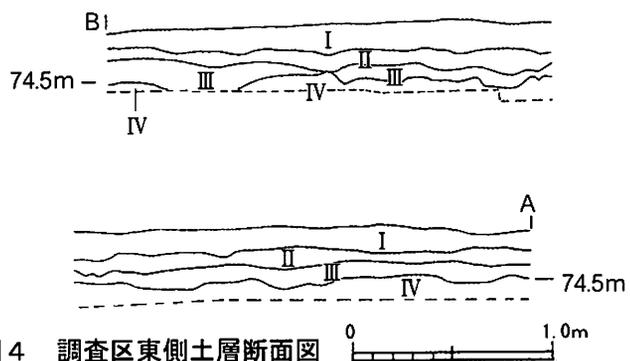


図4 調査区東側土層断面図

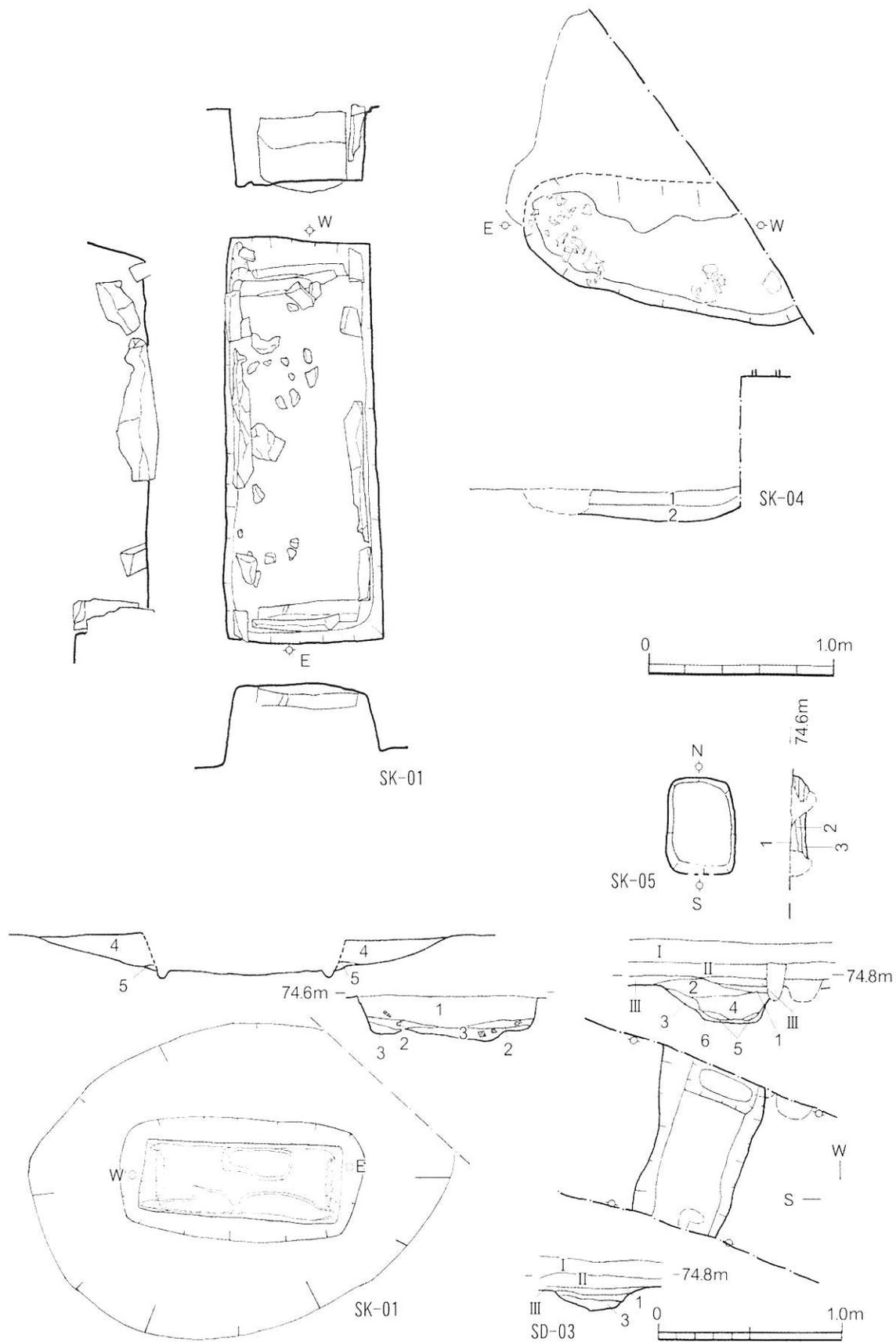


图5 遺構図

根の多くは桑であり、かつての桑畑の耕作土と判る。

Ⅲ層：暗褐色土層、昭和57年調査報告のⅢ層暗褐色土と同一か。先行調査同様、円筒埴輪片が認められた。それ以外にも若干の遺物を含む。

Ⅳ層：黄褐色土層、ローム層と見られる。無遺物層。

第3節 遺構

SK-01 棺身上部が破壊された箱式石棺とみられる。蓋は残っておらず、副葬品・骨片も見あたらなかった。棺内には、棺身の一部と見られる石材片が多数投げ込まれていた。立山氏からの聞き取りによれば、当該調査区内で桑畑開墾時に1基の石棺が偶然見つかったことがあったと言う。その時は鍬で砕けてしまった石片を、ちょうど空いた穴の中に埋め戻したらしい。この遺構は恐らくこの時の石棺であろう。

使われた石棺材は全て凝灰岩である。凝灰岩のなかでも軟質の部類に属し、地元石工の言葉を借りれば「一尺角重さ30kg 程度」の硬さのものである。ちなみにこの程度の重さだと、手で触ると石表面がザラザラと崩れる、所謂菊池川流域で採れる「灰石」である。同様な重さの石材利用は、例えば嘉島町井寺古墳の石室壁面などで見られる。井寺古墳のそれは、宇土市網津の所謂「阿蘇ピンク石」と呼ばれる馬門石であるが、硬度は全く同じものである※5。

※5 平成16年度前期企画展「彫る・刻む阿蘇の灰石展」調査成果による。

墓坑内埋土の状況

1～3層全て、脆い凝灰岩の岩屑を含んでおり、石棺の破碎片と見られる。

埋土1層：やや淡い暗褐色土

埋土2層：黄褐色土混じりの暗褐色土

埋土3層：赤褐色土混じりの黄褐色土

掘込み内の埋土の状況

4・5層とも出土遺物は検出されなかった。

埋土4層：やや淡い黄褐色土

埋土5層：赤褐色土混じりの黄褐色土

SD-03 下原古墳に最も近い。小規模な円墳、或いは円形周溝墓の周溝の一部の可能性もあるが、調査範囲が狭く判断しがたい。円筒埴輪片が埋土中から出土している。位置関係から、SK-01に関連する周溝とは考えられない。SK-01・SK-04と埋土の特徴が同じであることから、古墳時代の遺構と判断した。遺構の東側は恐らく崖の崩落により破壊されている。遺構西側は、底面で一段さらに落ち込み、調査区外に続いている。出土した円筒埴輪は、著しく摩滅していた。埴輪そのものの焼きの悪さもあるが、調整痕の残り具合からみて、流れ込みの遺物と判断できる。ただし、供給源までは特定できない。

埋土1層：やや淡い暗褐色土

埋土2層：黄褐色土混じりの暗褐色土

埋土3層：暗褐色土、埴輪片が出土。

埋土4層：柔らかい暗褐色土

埋土5層：暗褐色土混じりの黄褐色土

埋土6層：柔らかい黄褐色土

SK-04 SK-01の掘込みの上で検出した。桑の根による攪乱を受けており、円礫が出土したのみで時期・性格ともに不明である。

埋土1層：やや淡い暗褐色土

埋土2層：黄褐色土混じりの暗褐色土

埋土3層：暗褐色土混じりの黄褐色土

SK-05 調査区外に伸びる楕円形の土坑。遺構上面の約半分は桑の根によって壊されていたが、幸い底面のプランは確認できた。一部は、調査区外に伸びるが、埋土がレンズ状の堆積状況をしていることからそれほど大きく拡がらないだろう。外形と大きさから見て土坑墓の可能性も考えられるが、遺構の上部は削平されており、決め手に欠ける。特筆すべきこととして、底面からほぼ完形の須恵器壺を検出した。また土層断面から土器片が抜き取れた。SK-01の掘込ラインに近い位置であることから、切り合っていないものの同時期の所産ではないだろう。但し、両者の時期的な前後関係は不明である。

埋土1層：やや淡い暗褐色土

埋土2層：黄褐色土混じりの暗褐色土

いずれの埋土にも須恵器壺の破片を含む。

第4節 遺物

- 1 円筒埴輪片：SD-03埋土3層より検出、焼きは悪く、赤褐色。外面タテハケ、内面はヨコハケ並びに指頭圧痕が見られる。残存部位の範囲では黒斑は認められない。
- 2 円筒埴輪片：タガの上部に僅かにヨコハケが認められる。1に比べ調整痕の残りが良く、色調もやや薄い赤褐色。Ⅲ層より検出。タガには指によるツマミ、ナデの痕が明瞭に残る。1・2とも別個体と判別できるが、色調・焼成の悪さ・摩滅した状態にそれほどの大差は無い。残存部位の範囲では黒斑は認められない。
- 3 須恵器壺：SK-04から出土。頸部に精緻な櫛書きを施す。内面の調整は、指ナデの他に、底部付近に指圧痕と外面タタキの際についた当て具の擦痕がわずかに見られる。外面の調整は、タタキのあと胴部上面をナデている。胴部下面は、明瞭にタタキ痕が残る。焼成はやや悪く明灰色を呈す。この他、特徴的なものは胎土で、1mm以下の黒色粒が含まれている。口唇部内面の立ち上がりやや甘いことから、TK23或いはTK47段階のものか。
- 4・5 土器片：2点とも調査区の際、SK-04の埋土中より抜き取った。壺の胴部片と見られる。弥生時代終末～古墳時代の所産と見られ、焼きは良く摩滅していない。外面の整形では、タ

タキの後にナデを行い、内面ではハケによる整形を行っている。

6～8 土器片：浅鉢6、深鉢7、素口縁の粗製深鉢片8と見られる。6・7の特徴から、縄文時代晩期後半、刻目突帯文土器様式の範疇に収まるものと見られる。中でも深鉢7は、山の寺式土器の特徴を示す突帯の付き方である。調査区西際の断面、IV層上面に噛む状態で纏まって出土した。追認のためトレンチを入れたが、IV下面からの出土は無かった。調査区の断面には、なおも複数の土器片が深く刺さっており、調査区外に広がっているものと見られる。器壁の調整が剥落するほど残存状態は悪く、薬品による強化処理を施した。

第4章 総括

以下、発掘調査の成果、及び調査時の聞き取りによる情報提供も踏まえ、可能な限り岩原古墳群について述べる。

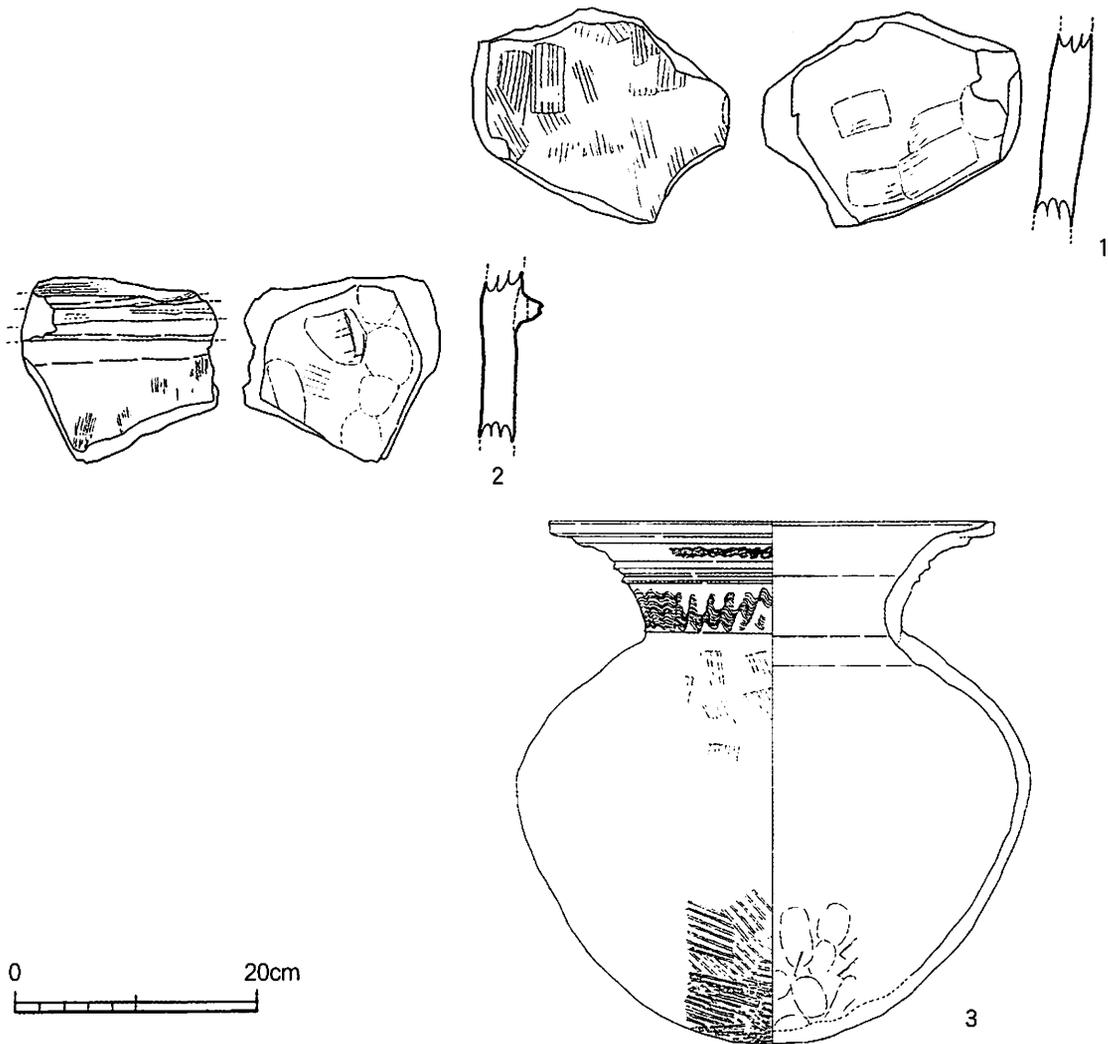


図6 遺物実測図

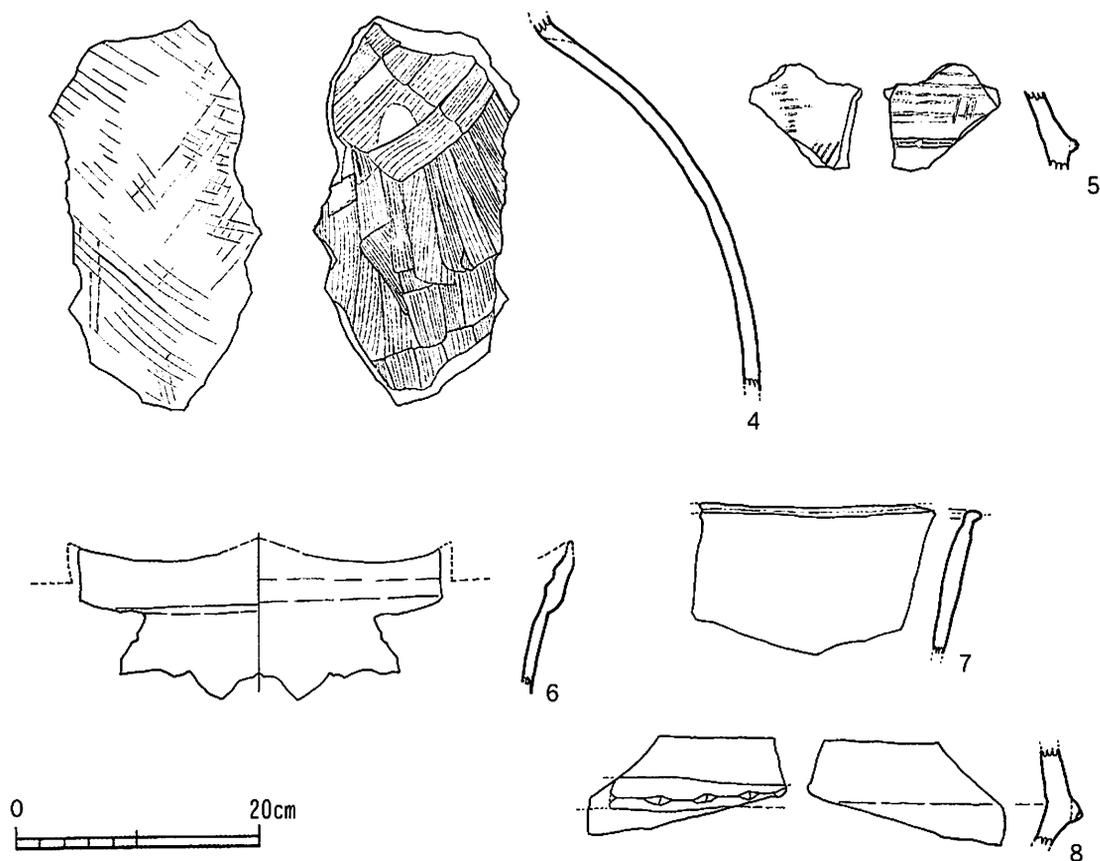


図7 遺物実測図

まず、今回の調査成果として、SK-01のような周溝を伴わない箱式石棺の検出がある。立山氏からは、この種の石棺が集中する範囲は双子塚古墳の西側、岩原横穴墓第VI群のあるV字谷より南側あたりで、今回の調査区周辺ではあまり覚えがないとのことであった。箱式石棺の広がりさらに別地点にあることを窺わせ、今後の検討材料の一つになるはずである。

次に、調査区南側の溝SD-03については、調査面積が狭く、古墳時代の遺構と推定できた他は、遺構の性格など詳しいことは判らなかった。出土した埴輪片についても接合も出来ないほど摩滅を受けたものであり、供給源が双子塚古墳なのか、下原古墳なのか、未発見の古墳なのか見当も付けがたい。

また、今回の調査区東側の崖面では、水平な土層の堆積が認められ、かつては東側に平坦地が伸びていた様子を窺うことができた。SD-03の検出状況からも、過去に崩落した箇所にも古墳などが広がっていた可能性は否定出来ない。今後、計画的に地元関係者への聞き取り調査を行い、その広がりの範囲をさらに明らかにしていくことが必要だろう。

さらに、今回検出したSK-01のような周溝を伴わない箱式石棺、或いはSD-03のような遺構の検出は、岩原古墳群全体の範囲がより明らかになっただけでなく、円墳、前方後円墳の周囲で構築される墓の規模と範囲を知る手がかりとなる。そういう意味において、小規模な墓が集中するエリアが、双子塚古墳を挟んで反対側の台地西側にあったということは意義深い。

一方、これまでは、周溝を持つ箱式石棺あるいは土坑墓は、県立装飾古墳館エントランスホール前の寒原4号・5号などの一群が知られていた。装飾古墳館建築に先立って行われた調査や、体験学習棟建設の際行われた調査成果を踏まえて、その南限を示そうとするならば、寒原4号・5号付近ということになる。今回の調査ともあわせて、「墓が出た話は余り聞かない」台地北東側のエリアとの違いは何なのか？等々、興味深い課題も生まれた。

古墳群が構築された時期についても、これまで表面採取された埴輪、須恵器片によってしか推定できなかった。SK-05で検出した須恵器によって、古墳群があった具体的な時期について示すことができるようになった。

今後、岩原古墳群を構造的に理解し、菊池川中流域の古墳時代研究に繋がる資料として今回の成果が活用されることを期待したい。

例言・凡例

- 1 調査箇所は、熊本県山鹿市鹿央町岩原字下原2247-1番地、調査面積は約150㎡である。
- 2 現地での発掘調査は、江本直主幹兼学芸課長（当時）の指導の下、池田朋生（主任学芸員）が担当し、吉里美枝子・大友由紀（同嘱託）がこれを補助した。
- 3 四級基準点設置、古墳を含む周辺地形測量、地形図版下作成、並びに、須恵器の実測については（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 4 本報告の遺物トレース・執筆・編集は、学芸課で行い、池田が担当した。
- 5 出土資料は、全て県立装飾古墳館で保管している。
- 6 本報告に使用した方位・座標軸は、国土座標を用いている。
- 7 土層図・遺構図の縮尺は20分の1で、一部の遺構については10分の1で掲載した。
- 8 土層図・遺構図の縮尺は60分の1で、一部の遺構については30分の1で掲載した。
- 9 樹木根などの攪乱の範囲は破線で、調査区の境界線は一点破線で標記した。
- 10 遺構の記号は、溝はSD、土坑はSKとした。
- 11 出土遺物の縮尺は、3分の1で掲載した。

主要参考文献

- | | | |
|-----------|-------|---|
| 田辺哲夫 | 1957年 | 「岩原古墳」熊本史学12号 |
| 隈昭志、杉村彰一 | 1965年 | 「岩原古墳群を巡る文化財問題」熊本史学29号 |
| 緒方勉 | 1982年 | 「清原古墳群及び岩原古墳群の周溝確認調査」熊本県文化財調査報告第55集 |
| 隈昭志 | 1992年 | 「肥後」前方後円墳集成 |
| 牛嶋恵輔、水永秀樹 | 2000年 | 「熊本県鹿本郡鹿央町岩原双子塚古墳の電気探査」熊本県立装飾古墳館研究紀要第4集 |
| 竹中克繁 | 2003年 | 「円筒埴輪の地域性—熊本県地域の埴輪—」先史学考古学論究4 |
| 杉井健 | 2004年 | 「熊本県地域における古墳時代中・後期の首長墓系譜変動にかんする覚書」西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究 |

調査協力者（順不同・敬称略）

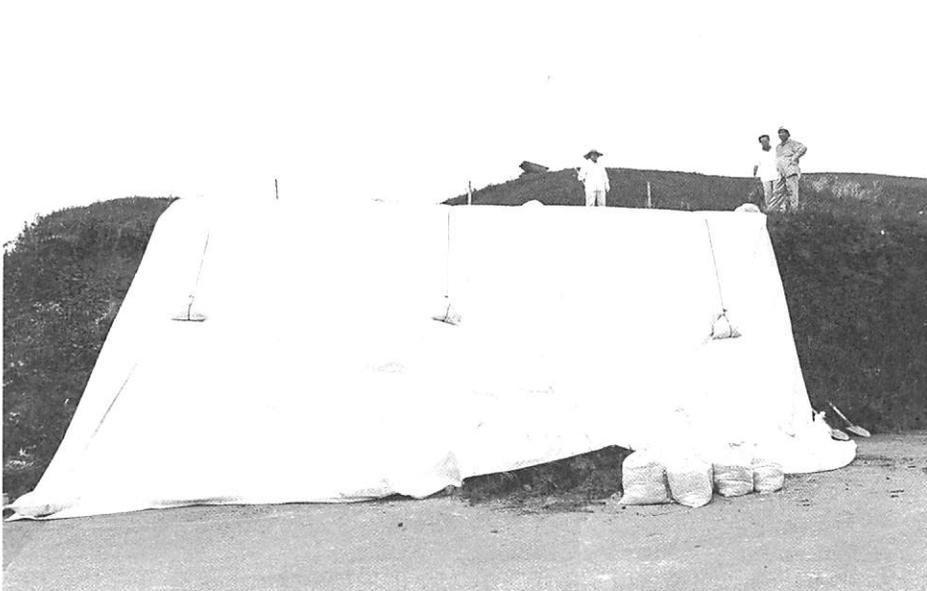
立山義晶、森廣行、隈昭志、前田軍治、小山正子、木村雅子、村田百合子、松本裕子、中原幹彦、野田拓治、中村幸弘、亀田学、宮崎敬士、増田直人、水本寿美子、濱田教晴



図版. 1
集中豪雨による崩落地
地
(発掘調査地)



図版. 2
崩落地
中央奥 岩原双子塚
古墳後円部



図版. 3
崩落地
馬不向古墳東側



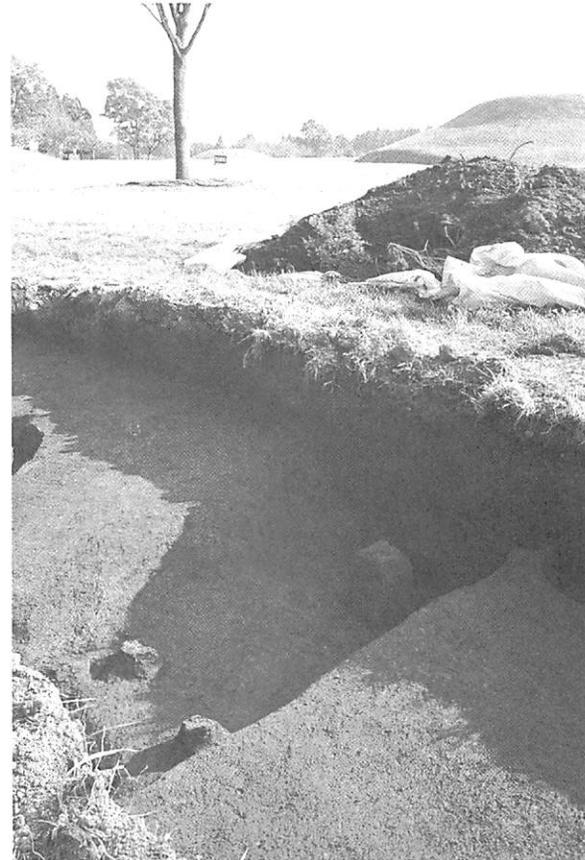
図版. 4 岩原双子塚古墳よりみた調査区



図版. 5 調査区北側検出した遺構(左下 SK-01)



図版. 6 調査区南側手前 SD-03 奥 下原古墳



図版. 7 SD-03円筒埴輪出土状況

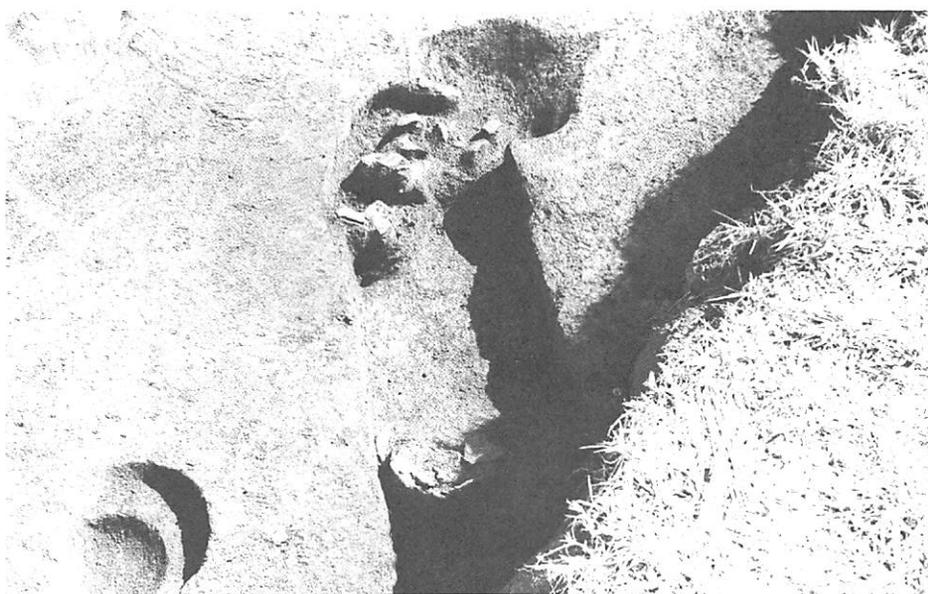
図版. 8
調査区からみた岩原
双子塚古墳

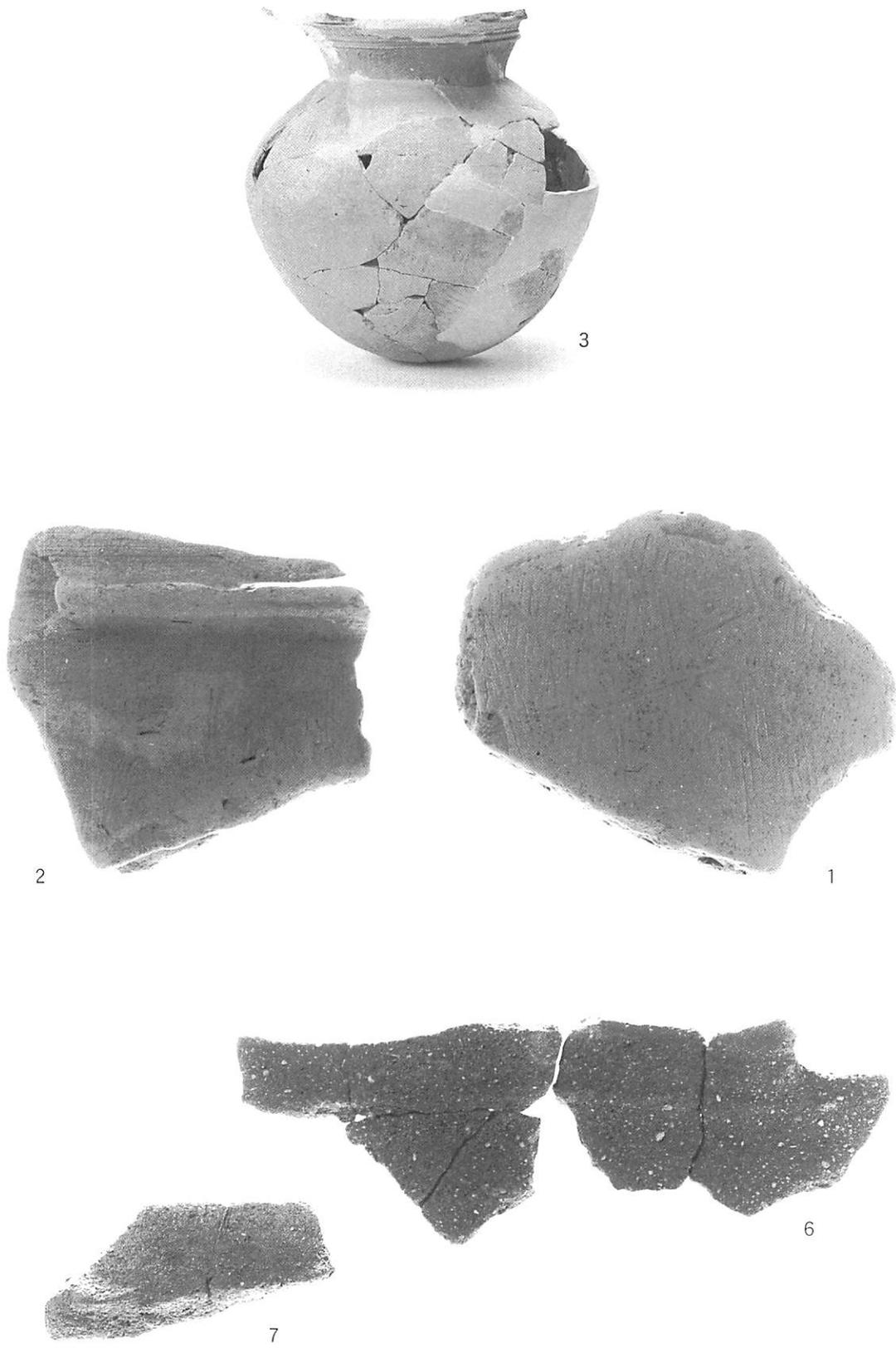


図版. 9 SK-04



図版. 10
SK-05須恵器出土状
況





図版. 11 出土遺物写真

点描：石清水式土器

木崎 康弘

熊本県立装飾古墳館 主幹（学芸課長）

1 はじめに

1998（平成10）年、筆者は、中九州西部の押型文土器編年を取り上げる中で、沈目式土器と石清水式土器の再評価を行なった（木崎1998）。その中で、筆者が主張したかったことは、沈目式土器と石清水式土器を再評価することによって、中九州西部の押型文土器の移り変わりを明確に説明できる、ということであった。今後の中九州西部での縄文時代研究において、この視点については、十分に考慮するべきものと考えている。

さらに、熊本県立装飾古墳館では、筆者が主査となって、平成16年1月18日（日）から3月21日（日）まで、平成15年度企画展示『肥後の至宝展Ⅱ 球磨楽展～球磨の考古と歴史に遊ぶ～』を開催した。この展覧会の中で、新たに深田村（現、あさぎり町深田）灰塚遺跡を取り上げ、その土器型式の設定意義を再度確認したのであった。

本稿は、こうした問題提起を受けたものとして、新たな資料の追加を試みるものである。特に、ここで紹介する灰塚遺跡の石清水式土器は、石清水遺跡で発見された標式資料に酷似するものである。その意味でもここで提示する資料の重要性は明らかである。

2 石清水式土器の発見と提唱、その再評価

(1) 発見と提唱の経緯

戦前の縄文時代研究を牽引した小林久雄は、1934（昭和9）年に押型文土器に関する研究を行なった。「所謂楕円捺型文土器に就て」がその論文である。これは、八幡一郎が1932年に発表した「楕円捺型文土器」発表を受けてのものであった。その時に紹介されたのが、豊田村（現城南町）から採集された資料であった。

この中で、小林氏は、土器の色調、胎土、焼成、器厚、口縁形状、胴部形状、底部形状、器形、文様帯、文様についてその特徴を紹介した。そして、その編年的な位置付けを「御領貝塚に於て楕円捺型文土器が御領固有の平行直線文土器と併出する以上」、楕円捺型文土器を「肥後縄文末期土器の一形式と見て差支えないであろう。」とし、さらに、「此事實は楕円捺型文土器の多くが古式縄文土器と見做されてゐる今日、肥後縄文土器の一面を語る興味ある問題」とも述べた。

後に、沈目式土器として型式設定された関係資料である。

一方、ある土器が、その翌年に見つかった。少々長い引用となるが、その経緯を発見者、高田素次の文章「一尺の差」（『嘘のような本当の話』所収）の中から紹介することとしよう。

「木上村から川村の柳瀬を通過して、観音寺の裏に真直に通ずる県道が、頂度その頃工事中のことだったから、さうさうあれからもうかれこれ三四年は立っていよう。

丁度その頃腎臓炎で入院していた妻を見舞うべく、久しぶりで自転車に乗って、私は人吉へ出かけて行ったのだったが、その途中、その工事場を通りかかったのだった。

柳瀬から真直にきた新道が、旧道と落合って湯前線の陸橋を渡ろうとする僅か手前の所まで来た時である。北側の断層—と言っても、実は畑だった所が一間半程掘りさげられたために出来た一種の地層の断面なのである—に、土器の破片みたいなものが、ちらちらッと眼に映ったのであった。

自転車の上からのことではあったが、ほんの一瞬、それが土器であることを直感して、自転車を飛びおり、竹べらを拾って掘ってみると、それがまたすばらしい、これまでに郡内ではまだ一片も見つかっていなかった山形押型文の、然も完形を復元し得るだけの大きなしろものであったのには、何とも言い様のない驚ろきと喜びでいっぱいだったのだった。そのため、妻との約束の時間を三時間もおくらしてしまつて、さんざん叱言をくったあとで、そっとハンドバックをひらいて、土器のかけらを山ほど出して見せた時は、心から喜こんでくれた妻だったが、今になって考へてみると、あの時のあの嬉しそうな顔が妻の最後の顔だったのである。

ところで、なぜそう三時間もかかったかということ、第一壊れない様にと入念に少しづつ竹べらで掘りにかかったのだったが、地表下三尺五寸ほどのかたい粘土みたいな層の中にうまってるのではあり、シャベルなしでそれを掘り取るといふことは、ずる分無暴でもあったのであった。もしもあの時あの令嬢が一前に言ふのを忘れたが、実はこの時丁度道を通りかかった名も知らない令嬢があつて、一生懸命竹べらで掘って加勢してくれたのだった—加勢してくれなかったら、私はもっとおくらせて夕方頃しか病院へは行けなかったのだったかも知れない。

妻を亡くしてすでに三年になるが、この頃余計に私はあの時の令嬢が思い出されるのである。

それはさうと、あの県道がもしも今一尺南寄りに測量されてゐたならば、恐らくあの鉢型土器は完全に掘りとられ、あの様に真半分が切りとられはしなかったかも知れないと同時に、また一生我々の眼にはつかなかつたのかも知れない。がまたもう一尺北に寄つてゐたとしても、それこそ恐らくあの土器は一かけも残らず道路の下に掘り込まれてしまつてゐるかも知れない。一尺どちらに寄つても我々は結極はあの土器を見ることは出来なかつただらう。丁度あの土器の埋つてゐた場所が半分でも道路にかかつたお蔭で、半分でも残されたのだったといふことを泌々と考へたのだった。」

このように、高田素次は、1935（昭和10）年、熊本県人吉町（現、人吉市）石清水の道路工事現場で土器片を見つけた。この発見にいち早く注目したのが、『考古学』誌上に「所謂楕円捺型文土器に就て」を發表して間もない小林久雄であった。小林は、この土器の器形の特異性

に注目したのであった。1939（昭和14）年のことである。『人類学先史学講座11』に所収されている「九州の縄文土器」（小林1939）がその掲載論文であった。

その中で、小林は、この土器を「口縁に近く環行する横直線がある外は、口縁より底部に至るまで一面に山形連続文が施され、内面にも口縁に近い部分に同種文様が附せられ」、「形態は稍大きな深鉢形で口縁は外曲し、胴部には上下二個所に膨みがあり、底部は平底で上げ底になつてゐる」と説明した。また、その編年的な位置付けについては、御領式土器の底部に類似している上げ底状の平底であることから、その時期であるとも匂わせていた。「石清水式土器」の登場である。

(2) 再評価と型式的特徴の抽出

「石清水式土器」は、今日に至ってもその取扱いは未成熟のままであった。このことについて、筆者は、憂慮すべき事態である、とも評したところで、こうした現状を批判し、「石清水式土器」の再評価を試みたのである（木崎、1995、1998）。



第1図 沈目式土器と石清水式土器

「石清水式土器」を、小林氏は次のように説明した。多少表現をかえて再度紹介してみよう。

- ・口縁に近くに横直線があるほかは、口縁より底部までの全面に山形連続文が施され、口縁内面にも同種文様がつけられている。(第1図)

- ・形態は深鉢形で口縁は外反し、底部は平底で上げ底。(第1図)

ところが、松舟博満氏によって、小林氏図示の形状とは違ったことが明らかになったのである。石清水遺跡出土の土器は、円筒形ではなく、上げ底の平底と丸みのある胴部から外反しながら口縁部へ至るといった形状をとっているのである(木崎1998)。

こうした新知見の下、筆者は、石清水式土器を次のように説明した(木崎1998)。

- ・形状は、上げ底の平底、丸みのある胴部から外反口縁。

- ・文様は、間のびしていて、しかも浅い彫り込みの施文原体が使用されている。

さらに、石清水式土器の編年的な位置を、こうした説明を踏まえ、南九州の押型文土器群の中で、もっとも新しく位置付けられている手向山式土器の文様に共通するところが多いことから、中九州西部の押型文土器群の中でも、もっとも新しく位置付けられる、としたのである(木崎1998)。そして、中九州西部の押型文土器編年を、「稲荷山式→早水台式→下菅生B式→沈目式(・田村式)→石清水式」と結論付けたのであった(木崎1998)。

そこで、石清水式土器の型式的特徴を整理し、その意義を明らかにしておきたい(木崎1998)。

石清水式土器は、沈目式土器に後続する中九州西部の押型文土器の1土器型式である。器形は、平底、外反口縁、そして丸みのある胴部をもっている。文様は、手向山式土器と同じ、間のびしての、浅い彫り込みの施文原体で付けられる。

ところで、人吉市石清水遺跡出土の土器は、上げ底の平底を呈していて、手向山式土器によく似た土器である。ただし、石清水式土器が手向山式土器と決定的に違う点がある。それは、石清水遺跡や無田原遺跡の土器が示すように、手向山式土器特有の屈曲胴部を持たないところである。要するに、手向山式土器に近い文様を持ちながら、中九州西部のそれまでの押型文土器の器形を基本的に踏襲する土器ということで理解できるのである。そこに、中九州西部の押型文土器群の移り変わりを考えるうえでの、石清水式土器の意義が存在するのである。

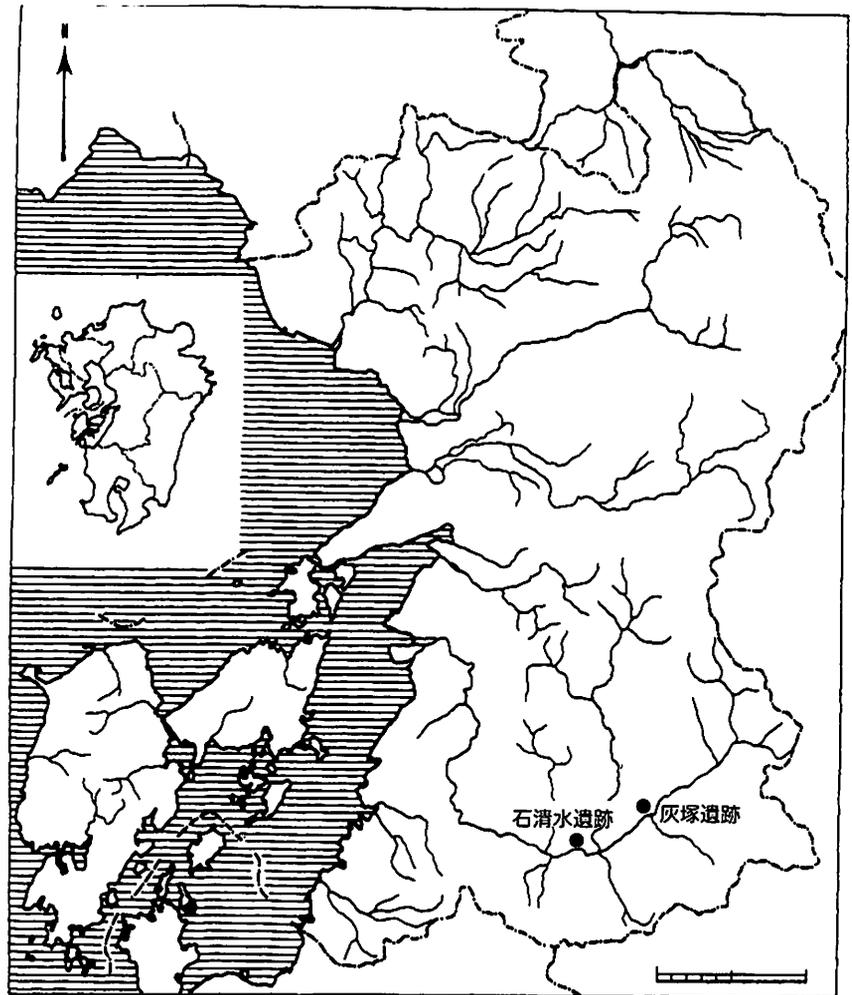
3 熊本県灰塚遺跡発見の石清水式土器

石清水式土器は、石清水遺跡の他、無田原遺跡、大丸・藤ノ迫遺跡、天道ケ尾遺跡、瀬田裏遺跡、中後迫遺跡、ワクド石遺跡などで発見されている。現状では、まだまだ資料数も限られている。ただし、おそらく、関連資料の増加は、微妙な資料を除けば、その型式的特徴が明確であり、期待できるところでもある。

そうした中、良好な土器が灰塚遺跡で発見された。重要な資料ということもあり、敢えてここに紹介するものである。

(1) 灰塚遺跡

灰塚遺跡（熊本県教育委員会2000）は、熊本県球磨郡あさぎり町深田にある（第2図）。遺跡は、球磨川沿いの洪積台地上にあり、球磨川沿いに広がる沖積地を一望できる場所に位置している。発掘調査は、県営須恵・深田地区緊急畑地帯総合整備事業に伴って実施された。その調査年度は、1992（平成5）年度から1996年度に及んでいる。調査の結果、先土器時代から中世までの遺構、遺物が発見された。



第2図 灰塚遺跡と石清水遺跡

先土器時代では、地形改変が原因で明確な包含層を確認できていない。石器としては、三稜尖頭器等が発見された。このことから、始良Tn火山灰上位の石器文化が存在していたことが分かる。

縄文時代では、早期が中心で、わずかに前期、後期、晩期の土器、石器が発見された。早期の遺構としては、集石68基、土坑35基がある。特に注目されるものは、壺形土器を埋納した土坑である。遺物には、下菅生B式土器、沈目式土器、石清水式土器、手向山式土器などの押型文土器群、天道ヶ尾式土器、塞ノ神式土器などがある。石器には、石鏃、削器の他、後期や晩期の扁平打製石斧などがある。

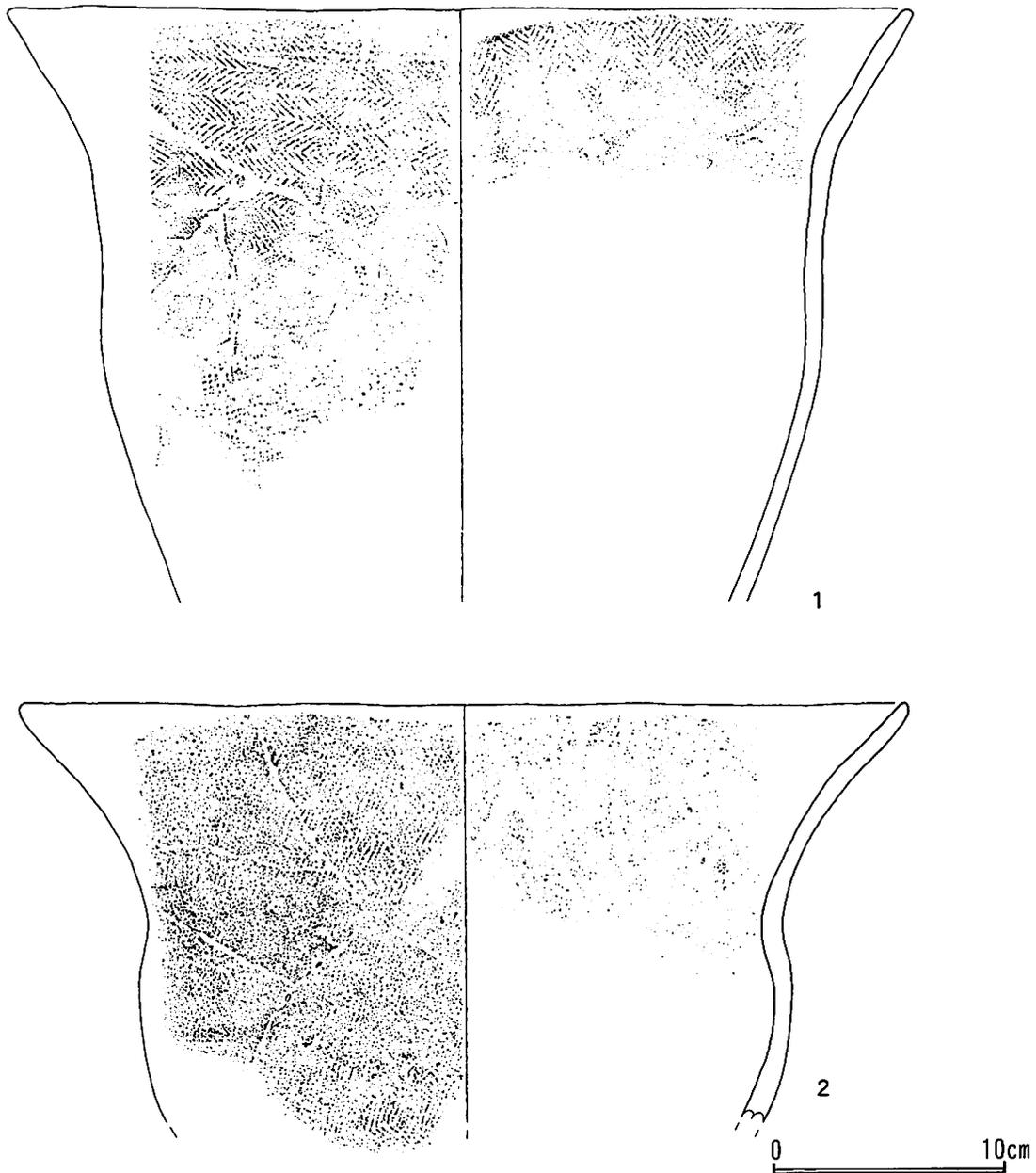
古墳時代では、竪穴式住居跡がある。古代では、土壇墓や掘建柱建物跡が見つかった。また、中世では、中世武士の本格的な館跡が見つかり、古代末から中世前半期の郡衛跡とも評価され、注目を集めた。

(2) 石清水式土器

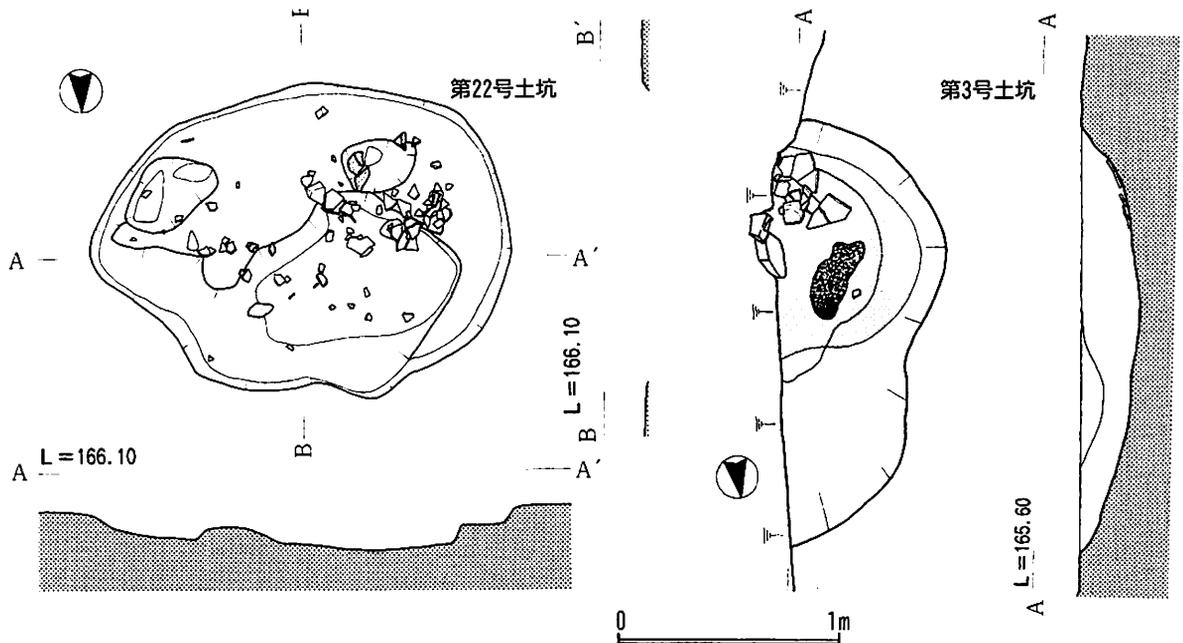
紹介する石清水式土器は、その全体像が窺える2点である(第3図1、2)。器形、文様、施文原体、法量の順に見ていくことにしよう。

1は、22号土坑（第4図）で見つかった石清水式土器である。底部を欠いた資料である。器形は、ラッパ状に大きく開く口縁部、わずかに膨らむ胴部によっている。文様は、山形の押型文である。表面の頸部から口縁部にかけては、縦方向の施文、胴部では斜め方向の施文である。また、裏面口縁部には、横方向に施文されている。文様は、間のびしての、浅い彫り込みの施文原体で付けられるもので、手向山式土器に近似したものである。これらの特徴から石清水式土器と認識できる。また、その全体の形状は、かつて高田が石清水遺跡で発見した石清水式土器によく似たものである。口縁径39cm、胴部径31.5cm。現状高28cm。

2は、3号土坑（第4図）で見つかった石清水式土器である。胴部下半から底部を欠いた資



第3図 灰塚遺跡の石清水式土器



第4図 石清水式土器出土の土坑

料であるが、型式的特徴を十分に窺わせる。器形は、ラッパ状に大きく開く口縁部、丸く膨らむ胴部によっている。文様は、山形の押型文。表面の頸部から口縁部にかけては、縦方向の施文、胴部では斜め方向の施文である。また、裏面口縁部には、横方向に同じ文様が施されている。文様は、間のびしての、浅い彫り込みの施文原体で付けられるもので、手向山式土器に近似したものである。これらの特徴から石清水式土器と認識できる。口縁径39cm、胴部径28cm。現状高28cm。

4 おわりに一点描から今後に向けてー

ここで紹介した2点の資料については、石清水遺跡発見の標式資料と比較しても、典型的な石清水式土器と評価できる。その意味でも、石清水式土器の評価を行なううえで、見逃せない資料となるだろう。

そこで、本稿を閉じるに当たって、今後の展望を示すこととしたい。

中九州西部の押型文土器の移り変わりについては、前記したように、「稻荷山式→早水台式→下菅生B式→沈目式（・田村式）→石清水式」（木崎1998）という変遷案で整理できる。それは、器形と施文の変化で認識できる変遷でもあるが、どのように地域性が形成されていったのかを、土器製作の面で考えるヒントを与えるものである。特に、沈目式土器から石清水式土器への変化は、中九州西部での押型文土器の型式変化として重要な意味を持つものである。

また、中九州西部の石清水式土器と南九州の手向山式土器との関係も重要な意味を見出せるものである。例えば、南九州での手向山式土器の成立を考えるうえでの、石清水式土器の役割は重要である。具体的にいえば、手向山式土器の屈曲胴部、沈線文等々の特徴は、南九州での

土器伝統に根ざしたものであり、一方、手向山式土器の押型文は、石清水式土器の押型文施文が刷り込まれたと考えることも可能なのである。こうした視点は、中九州西部の石清水式土器を評価する中で、さらに鮮明になっていくものと考えられる。

【謝辞】平成15年度企画展示『肥後の至宝展Ⅱ 球磨楽展～球磨の考古と歴史に遊ぶ～』の企画・開催という機会が与えられなければ、本稿を起稿することは無かった。本稿を閉じるにあたって、御芳名を掲げて、感謝の意を表し述べたい。

清田純一、北川賢次郎、古屋松硬子、渋谷敦、高田睦子、高田剣、鶴嶋俊彦、出合光宏、原田正史、福原博信、帆足俊文、前田一洋、和田好史、江本直、角田賢治、池田朋生、吉里美枝子、大友由紀、人吉市教育委員会、相良村教育委員会、五木村教育委員会、山江村教育委員会、あさざり町教育委員会、城南町教育委員会（敬称略）

文献

- 大津町教育委員会1992『瀬田裏遺跡発掘調査報告資料Ⅰ』
乙益重隆1967「九州西北部」『日本の考古学』Ⅱ 河出書房新社
木崎康弘1998「中九州西部押型文土器の編年」『縄文集成シリーズ 九州の押型文土器一論攷編』九州縄文研究会
熊本県教育委員会1986『大丸・藤ノ追遺跡』
熊本県教育委員会1990『天道ヶ尾遺跡』
熊本県教育委員会1995『無田原遺跡』
熊本県教育委員会1994『ワクト石遺跡』
熊本県教育委員会2000『灰塚遺跡（Ⅰ）—熊本県球磨郡深田村字灰塚所在の遺跡—』
小林久雄1934「所謂楕円捺型文土器に就て」考古学5-6、『九州縄文土器の研究』小林久雄先生遺稿集刊行会
小林久雄1939「九州の縄文土器」『人類学先史学講座』11、『九州縄文土器の研究』小林久雄先生遺稿集刊行会
小林久雄1948「捺型文土器の諸問題」『九州縄文土器の研究』小林久雄先生遺稿集刊行会。
小林久雄1949～50「肥後の縄文式土器」『九州縄文土器の研究』小林久雄先生遺稿集刊行会
小林久雄1967『九州縄文土器の研究』小林久雄先生遺稿集刊行会
中後追遺跡発掘調査団1978『中後追遺跡』
高田素次1984『嘘のような本当の話』
高田素次1986『しらがね帖』
三島 格1965「原始・古代」『城南町史』熊本県城南町

熊本市竜田陳内所在の 阿蘇二の宮神社境内で採取した石器について

池田 朋生

熊本県立装飾古墳館 主任学芸員

経緯

本資料は、平成8年の冬長谷部善一氏（県文化課主任学芸員）の情報提供が基で得られたものである。資料の存在については石の本遺跡群Ⅱ（1999）^{（註1）}、土層観察結果は石の本遺跡群Ⅲ（2001）^{（註2）}において報告している。

当時、池田は熊本市郊外にある石の本遺跡群において、発掘調査・整理報告を進めている最中であった。石の本遺跡群は、平成6年度の8区^{（註3）}の発掘調査を皮切りに、後期旧石器時代から縄文時代にかけての複合遺跡として調査が続けられていた。平成8年度は、発掘調査最終年度にあたり54区・55区と呼称した調査区において、やはり後期旧石器時代の遺跡調査が行われていた^{（註4）}。

この54区・55区では、上層は流土が厚く堆積していたものの、下層は、ほぼ後期旧石器時代の層と見られたV層（通称ニガシロ層）が良好に残っていた。さらに複数の分層が可能なうえ、各層位からは大量の石器と炭化物が出土するという、調査成果が示されつつあった。

このことから、V層の分層にあたりテフラ分析等、関連する科学分析を並行して行うことが計画された。計画にあたっては、先行調査である熊本県旧石器時代調査総合報告（江本1986）の調査成果を踏まえ、周辺の露頭・遺跡についても調査対象を広げた。ちょうど、小国町耳切遺跡で同様な後期旧石器時代の遺跡調査が行われており、江本の先行調査も阿蘇外輪山北側でも行われていたことから、熊本市石の本遺跡群の周辺から小国町耳切遺跡までの範囲を対象とした。さらに調査箇所を選定にあたっては過去に発掘調査が行われ、考古学上のデータとリン



図1 遺跡・位置図

① 阿蘇二の宮神社 ② 石の本54・55区 ③ 石の本8区

クする地点、及び先行調査による成果を追認できる露頭を対象に、古環境研究所の早田勉氏に調査を依頼した。長谷部からの情報提供は、ちょうどそのような計画がなされていた折のことで、平成9年1月27日早速確認を行った。

石器採取地の立地と状況

石器が認められたのは、熊本市内の立田山の東麓にあたる熊本市龍田陳内3丁目6番、阿蘇二の宮神社の境内東側である。駐車場として利用するためか境内の一面が地下げされ、露頭が容易に観察できた。現在も笹類が生い茂ってはいるが、土層確認は行える。長谷部が採取した石器とは、この露頭からの抜き取りによって得られたものである。

立地は、ほぼ南へ伸びる舌状台地の末端で、採取地のやや北側に比較的平坦な段丘面がある。この一帯が陣内上ノ園遺跡と見られ、周囲は宅地として利用されている。台地そのものは巨視的にみれば立田山の東側の丘陵に含まれる。国土地理院発行の二万五千分の一の地図によれば、石器採取地の標高は約50mである。

石器採取地は、この舌状台地の末端に南座する阿蘇二ノ宮神社の境内東側の断面で、約10m四方の参拝者用駐車場のため掘り下げられたところである。神社境内は社殿が作られた折に削平を受けていると見られる。平成13年に社殿が改築された折に、新たに削平を受けた北側でも土層確認ができた。こちらは目視で約5m上に暗色帯が認められる。石器採取地は何れも駐車場の整備で出来た東向きの土層断面からであり、採取した場所が纏まっている。

池田・長谷部・早田と共に現地にて土層の確認を行った。抜き取られた箇所を確認し、この出土層を中心に土層を観察した。このとき、更に石器1点を検出した。

土層観察

土層を肉眼で観察したところ、石の本遺跡群8区のものに最も類似すると考えられた。石の本遺跡群の基本層序との対比を進めると、採取地点の土層所見は以下ようになる。

I、II、III層：表土層、クロボク層、アカホヤ二次堆積層。本来堆積していると見られるこれらの土層は、笹類の繁茂によってここでは観察できなかった。

IV層：クロニガ層、暗褐色土。縄文時代早期の包含層。阿蘇周辺では良好な堆積が確認できるが、熊本市北部から植木町にかけて堆積が明瞭でなくなり、県北での確認は困難。

V層：ニガシロ層。いわゆるソフトローム、ハードローム、始良Tn火山灰、黒色帯など幾重もの層を含む。層の細分は立地、堆積状況に大きく左右され、一遺跡内で変化に富むことも珍しくない。やはり県北ほど堆積が明瞭でなくなり、細分も困難となる。この層の細分とその根拠が、後期旧石器時代の詳細な時期を判断する手掛りになることは周知のところである。ここでは3つの層に細分できた。

V a 層：白斑状に粒土が混じる。堆積は薄く、ブロック状に入る。A
T 包含層。

V b 層：相対的に、暗色の度合いが最も高い。

V c 層：下層のローム層との漸移層。やや黄色味を帯びるが、土質は
ニガシロ層そのもの。

VI 層：ローム層。この層の成因は、風堆積土（レス）と考えられている。

VI b 層より下層の拡がりは捉えられていない。上層だけで2つ
の層に細分した。

VI a 層：V 層との漸移層、やや暗色ながら土質は粘性を帯びローム層
そのものである。

VI b 層：VI 層ローム層そのもの。観察の際採取した石器1点は、VI a
層～VI b 層にかけてあたりである。

VII 層：ローム層。後日、池田が境内内北側で確認した土層である。VI 層にくらべ、やや赤味
を増す。層の性格は良く判らない。付近では、国道3号線北バイパスの建設等によっ
て切り通しした道路の壁面を、肉眼で観察を行った際の早田の指摘は、阿蘇4の非溶
結性の噴出物ではないかとの指摘を得た。色調、土質から同じ土層の可能性を考えて
いるが、はっきりしたことは判らない。

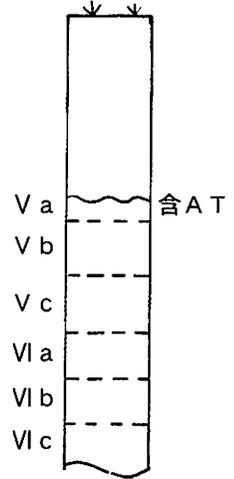


図2
土層模式図

(石の本遺跡群IIIから引用・
加筆)

石器観察

採取した石器5点についての所見を述べておく。長谷部より提供された石器は4点(1～4)。土層観察の際得られた新たな石器は1点である(5)。何れの資料とも、採取後の僅かな欠損の他は、新たなキズ、耕作具による擦痕なども全く無く、縁辺も鋭く残りが良い。大まかに土を払い、水洗洗浄を行わなかったため、現在もローム層の黄褐色土が付着している。表採品とは明らかに異なる出土直後のような状態である。

- 1 二次加工剥片 縦長剥片を利用し、主要剥離面から表面左縁に二次加工を加えている。右側縁にポジティブな剥離面を残しており、石核時の剥離痕と見られる。この右側縁の剥離面末端と礫面によってエッジが形成されており、そこに小剥離痕状の使用痕が集中している。エッジは使用痕によってやや丸みを帯びており、相当使い込まれていると思われる。主要剥離面に対し、刃部と想定できるこのエッジが90度傾くが、台形石器と呼称してもおかしくないものではないだろうか。表面に残る剥離痕から、石核時単接打面から連続して縦方向に剥離を行おうとした意図が見える。
- 2 使用痕剥片 表面に残る剥離痕を見ると、礫面から大ぶりの剥片を採取した後、打面を90度転位し、剥離面を打面に同一方向から最低2度の打撃によって縦長の剥片を採取して

いる。表面右側縁に鋭い剥片の縁辺が見られ、この縁片の中程から末端にかけて使用痕が認められる。なかでも小剥離痕状の使用痕が表面末端に数枚、裏面中央に1枚認められる。

- 3 使用痕剥片 両端が折れたような剥離のため、剥片のもとの形状がはっきりしないが、薄手の幅広な素材と思われる。表面上下両端にエッジが残っている。上端のものは残された縁片がごく短いものの、上下両端とも使用痕と見られる小剥離痕が表裏両面に見られる。上端の小剥離は側面の剥離面に切られているところから、折損前に既に使用されていたと見られる。折損後は、下端部の小剥離痕が剥離面を切っているところから、下端部の縁辺を積極的に使用していると見られる。
- 4 剥片 表面左側縁に折損と見られる剥離痕が見られる。主要剥離面側に、裏面を切る剥離痕が幾つか見られるが、意図はわからない。表面には多方向からの剥離痕が残されているところから、多面体の石核の一角から剥がされたものと見られる。
- 5 スクレイパー 幅広な剥片を素材にしている。二次加工と見られる下端部の剥離が施される前段階には、表面側、主要剥離面側とも幅広の剥離痕が見られる。このことから本資料は石核として使用されたものを転用した可能性がある。しかしながら、この資料は石質が明らかに他資料と異なり、風化が進んでいることもあって、細かな剥離の切り合い関係が不明瞭であり、観察結果には注意すべき点がある。

観察表

No.	器種	石材	石質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重さ (g)	備考
1	二次加工剥片	安山岩	サヌカイト質	6.9	2.9	1.9	29.2	長谷部氏提供
2	使用痕剥片	安山岩	サヌカイト質	7.2	2.6	2.0	31.3	長谷部氏提供
3	使用痕剥片	安山岩	硬質	4.7	4.6	1.0	19.2	長谷部氏提供
4	剥片	安山岩	やや多孔質	4.5	2.6	1.5	20.6	長谷部氏提供
5	スクレイパー	安山岩	軟質	3.1	6.5	1.2	20.1	土層観察時採取

所見

得られた石器は、長谷部から提供された資料がV c層下部からVI a層での採取と言うことである。土層確認時採取された石器はVI a層に近いVI b層の上部で見つかった。V層のなかでも、V a層は始良T n火山灰(以下ATと略す。)を含む土層であることがテフラ分析で判明しているので、少なくともAT下位出土の石器であることは間違いない。

以下、当採取地に近い石の本遺跡群AT下位の各遺跡との比較を試み、私見を述べる。

問題はVI層中という、層位の認識である。木崎の指摘にもあるように、暗色帯の下部出土からの石器である場合、3万年を遡る古い石器である可能性が出てくる⁽⁴⁶⁾。曲野遺跡で特徴的な台形石器を含む一群が出土した層位は、V層からVI層へうつる漸移層ということである(江本他1984)。また、石の本遺跡群8区の石器群出土層位はVI b層が中心である。以上のような

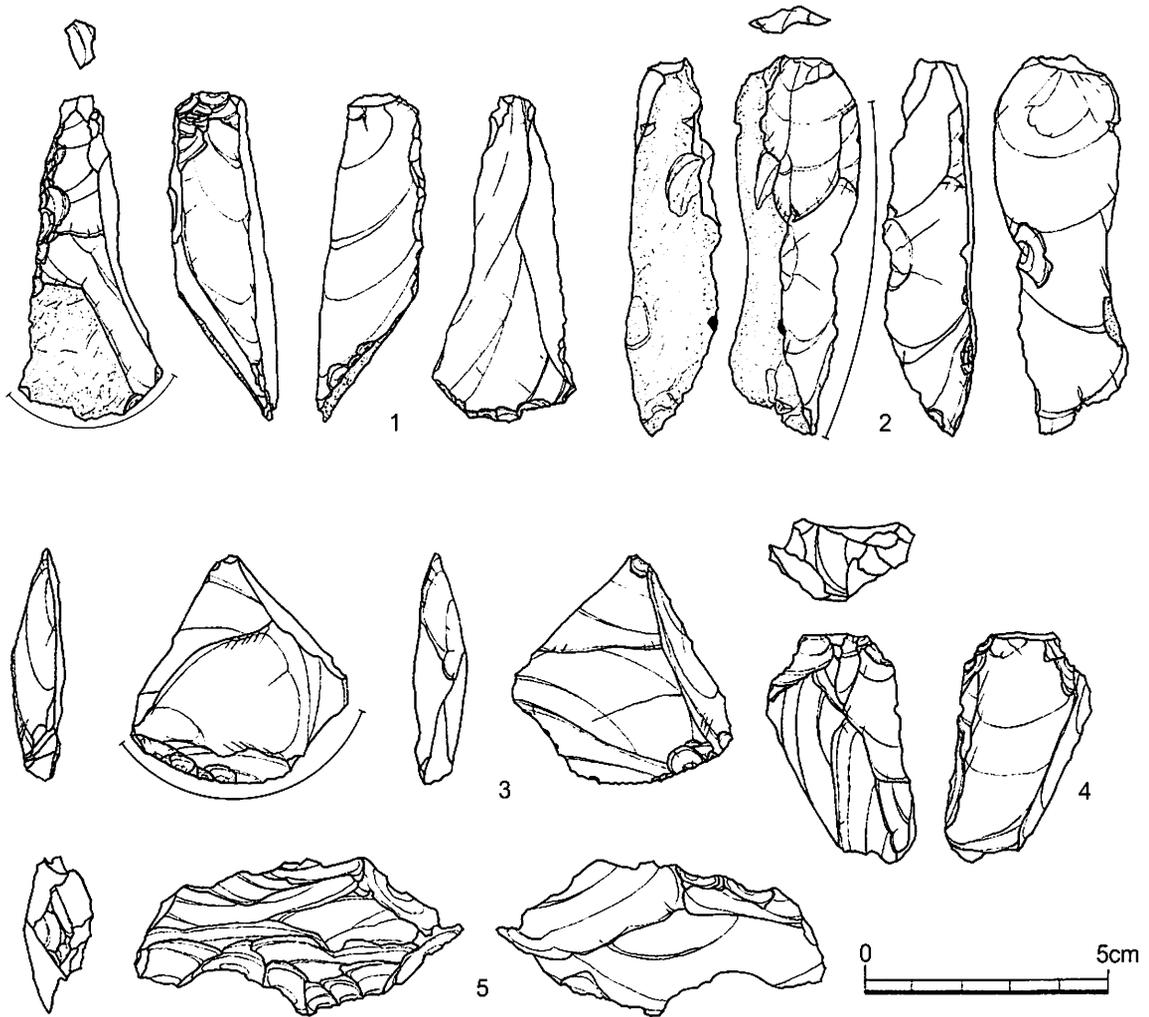


図3 採集資料実測図

調査成果から述べれば、本資料は漸移層からの出土であり、曲野遺跡と同様な層からの出土と見ることが出来る。しかし、暗色帯の堆積については、一地域はおろか地点によっても、地形の変化等に左右されることが多く変化に富んでいる。事実、石の本遺跡群の各調査区の土層観察では、極端な場合V層の細分がせいぜい2枚の分層しかできないものから、7枚もの分層が可能な土層堆積を示すところもある。何れの場合も、上層にATを含む層が検出されており、AT下位の土層堆積が異なることが判る。更に付け加えるならば、肉眼観察では3枚程度の分層が可能な堆積を示す層位の場合、最下層のVc層はVI層のローム層との漸移層と捉えられる。ところが、さらに堆積の良いところでは、もう一つ最下部に暗色帯と、上層の暗色帯との間層の2枚に細分できる。何れの場合でもローム層の直上の暗色帯を手掛りにすれば、層的事実は覆らないわけだが、石の本遺跡群55区ではその二つの暗色帯^(註7)から異なる石器群がそれぞれ検出されており、今後の調査ではより厳密な土層観察が必要となるだろう。

また、曲野遺跡で検出された特徴的な台形石器を含む一群が、所謂漸移層のなかでもローム

質のVI a 層から検出されるのか、ニガシロ層の範疇であるV層の下層から検出されるのかも、今後の調査において、出土層位把握の必須事項である。

今回の土層観察の結果、V c 層～VI a 層からの出土ということに従い、比較対象となる遺跡を上げるならば、石の本遺跡群54区A T下位のVI a 層出土の石器群、さらに55区A T下位のV g 層からVI a 層にかけて出土した第1石器群と呼ばれる二つの一群がまず組上に上がる。また、暗色帯の分層と漸移層の捉え方が前述のような理由で左右されることから、8区VI b 層出土の石器群も検証対象として考慮してみる。

まず、54区A T下位VI a 層出土の一群(以下、54区VI a 層石器群とする。)は、チャートの石材を利用した石器群である。また、55区のV層最下層の暗色帯であったV g 層からローム層であるVI a 層にかけて出土した第1石器群と呼んだ一群は(以下、55区第1石器群とする)、西北九州産と思しき黒曜石、チャートを使用している。一方、8区出土の石器使用石材は、多孔質安山岩が主体をしめる。今回の採取品は全て安山岩である。8区に類似した石質には資料No.4、5が上げられる。1～3はサヌカイト質の緻密な安山岩であるが、8区の石器群にも僅かだが出土している。最も、彼の遺跡ではそれらの石質では接合資料が得られておらず、遠隔地からの搬入石器とみて間違いないだろう。一番類似する石材としては佐賀県北方町、多久市の鬼ノ鼻山周辺産の安山岩が考えられる^(註8)。

しかし、多孔質安山岩は54区でも出土している。但し、主要な使用石材ではなく、目立ったToolも検出されていない。

次に石器組成を見ると、54区VI a 層石器群は刃部磨製石斧を伴う。更に特徴的な石器としてペン先形ナイフ形石器が検出されている。また、55区第1石器群は、西北九州産と見られる良質な黒曜石製の石器が認められ、石斧を伴わない。主要なToolはあまり見られず、ノッチドスクレイパーなどのスクレイパー類の他は、使用痕剥片が主体である。もっとも、54区A T下位の石器群にしてもToolには、ペン先形ナイフ形石器としたものは1例のみで、それ以外はスクレイパー、使用痕剥片がほとんどである。

また、8区に特徴的な折損^(註9)による剥離痕が認められる資料は3と5が上げられる。しかしながら折損資料自体は、何も当該期に限った特徴ではない。但し、8区の場合はその割合が高く、剥離技法と剥片取得の思考に明らかな差があり、注意が必要である。一方、1、2は縦長剥片の採取を意識するかのような一方向からの連続した剥離痕が見られる。そして2には、8区出土の石器には見られない、急角度の二次加工が主要剥離面側から連続して入っている。

このことから、本資料は採取された層位もふまえて考えるならば、8区石器群より後出のものと思われる。問題は、54区VI a 層石器群、若しくは55区第1石器群のどちらかということになる。この両者の前後関係を導き出すのは層位的関係において他には、石斧とペン先形ナイフ形石器1点というところと、使用石材に遠隔地である西北九州産黒曜石が使用されている点で

ある。55区第1石器群は、時期判断の基準になる Tool が乏しく、積極的な評価は難しい。しかしながら、本採取資料が搬入石材であるサヌカイト質安山岩で Tool が作られている事実や、縦長剥片を意識した剥離が見受けられるところなどから、55区第1石器群に近い時期を想定したい。今後は、村崎の着眼点である曲野遺跡^(註10)、耳切遺跡との関係について、更に考察をすすめていく必要があるだろう。

(註1) 第5章、文中でのみ指摘。

(註2) 第4章、自然科学分析で土層断面、テフラ分析の結果を報告した。一点、本報告には訂正がある。当採取地点の立地を迫の上遺跡の同一台地末端と理解していたため、将来は迫の上遺跡の範囲内(熊本県遺跡地図上では範囲外)に収まるものと誤認していた。そのため、この報文では「迫の上遺跡土層断面」として紹介している。石の本遺跡群Ⅲにて報告されている迫の上遺跡土層断面のテフラ分析と石器出土地とは、実は当採取地のことである(県教育委員会によって発掘調査が行われた迫の上遺跡からは旧石器時代の石器は検出されていない)。実際には、一段下がった中位段丘上の遺跡により近接しているところで、迫の上遺跡はさらに上段の丘陵頂部一帯に広がる。中位段丘上の遺跡は縄文時代から中世にかけての複合遺跡である陣内上ノ園遺跡である。地点を間違った呼称で報告したことをこの場を借りて訂正しておきたい。

(註3) 池田(1999)参照。本文では、便宜上調査時の「8区」と呼称するが、遺跡名は石の本 No.8 遺跡としたい。

(註4) 廣田(2001)参照。本文では、調査時の「54区」「55区」と呼称する。今後は、石の本 No.54遺跡、同55遺跡と呼称したい。

(註5) 一連のテフラ分析の調査結果は、耳切遺跡、石の本遺跡群Ⅲ、同Ⅳを併せて参照。

(註6) 木崎(2002)参照。

(註7) 江本(1986)で指摘された、BB2、BB3と考えられる。

(註8) 江本直氏が採集した、佐賀県北方町の安山岩等を参考にした。

(註9) 池田(1999)では、同じ石質の安山岩製の石器では、「折り取り」・「折断」という「技法」は確認できなかった。更に検討すべき課題ではあるが、ここでは、剥片剥離の際の「折れ」と考え「折損」と呼称する。

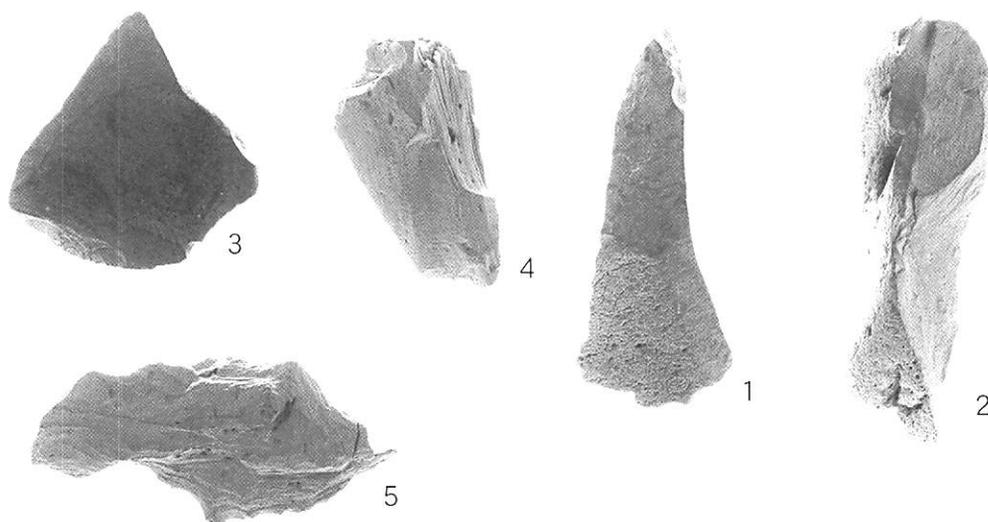
(註10) 村崎(2003)参照。

文中では、一部敬称を略させていただきました。また、本資料紹介にあたり、下記の方々にお世話になりました。(順不同・敬称略)

長谷部善一、早田勉、江本直、古森政次、木崎康弘、村崎孝宏、岡本真也、師富国博、村田百合子

参考・引用文献

- 池田朋生 1999 石の本遺跡群Ⅱ 熊本県文化財調査報告第178集 熊本県教育委員会
 池田朋生 2001 石の本遺跡群Ⅲ 熊本県文化財調査報告第194集 熊本県教育委員会
 江本直他 1984 曲野遺跡Ⅱ 熊本県文化財調査報告第65集 熊本県教育委員会
 江本直 1986 熊本県旧石器時代調査報告 熊本県文化財調査報告第81集 熊本県教育委員会
 木崎康弘 2002 九州地方の後期旧石器時代に見る中期旧石器時代文化の残映「科学」72-6
 廣田静学 2001 石の本遺跡群Ⅳ 熊本県文化財調査報告195集 熊本県教育委員会
 村崎孝宏 1999 耳切遺跡 熊本県文化財調査報告第179集 熊本県教育委員会
 村崎孝宏 2003 始良Tn火山灰降灰以前の石器群に関する基礎的研究 考古学論集Ⅳ 竜田考古学会



採集した石器 (S = 2 / 3)



石器採集場所

この電子書籍は、熊本県立装飾古墳館 研究紀要 第5集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、全国の歴史博物館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：熊本県立装飾古墳館研究紀要 第5集

発行：熊本県立装飾古墳館

〒861-0561 熊本県山鹿市鹿央町岩原 3085 番地

電話：0968-36-2151

URL：<http://kofunkan.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2018 年 6 月 1 日